

令和元(2019)年度 文化庁委託事業報告書

方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承 2

令和2 (2020) 年 3 月

茨城大学人文社会科学部 杉本妙子研究室

まえがき

本報告は、令和元年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業に応募・採択されて行った調査研究事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2」の報告書である。平成24年度文化庁委託研究事業「東日本大震災による危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）」から始まり、本年度で8年間、継続して取り組んできた事業の報告である。東日本大震災の被災地である茨城県および福島県浜通り地域における方言の継承や、方言をとおした地域活性化活動に活かし得るものとして、今年度は昨年度に引き続き、特に地域の昔話（民話）に注目して取り組んだ。その一つが、平成28年度から続けている方言による昔話の会である。この方言昔話の会は、今年度で4回目であり、茨城県内各地の語り手の方々をはじめ、福島浜通り方言、広島方言などの語り手の方にも加わっていただいていたことができた。今年度も、昔話の会の来場者アンケートからは、方言で語られた昔話を大いに楽しんでもらえたことや、様々な地域の方言を聞くことによって方言の良さやおもしろさや地元の方言だからこそ感じられるものを、多くの方に感じていただけたことが確認できた。この方言昔話の会については、本報告書の第二章に詳しく記したので、会の映像を収めたDVDとあわせてご覧いただければ、方言・昔話の魅力などを感じていただけるのではないと思う。また、福島県浜通りの新地町において、民話の伝承者の小野トメヨ様よりお聞かせいただいた昔話とそれに関連する談話を第三章に収めることができた。新地町も津波によって大きな被害を受けた地域である。9年前のその時のこともお話しいただいた。本報告書では、昔話や東日本大震災などについてのたくさんのお話の中のほんのわずかしか収めることができななかったが、震災の折、一人一人がどう思い行動したかの一端を知ることができるお話なので、ぜひとも多くの方に目を通していただきたい。今年度はまた、地域の方言や民俗を知るためのものとして、茨城方言かるたの制作にも取り組んだ。方言かるたは、手軽な遊びをしながら地域の方言に触れることができるところが魅力である。その方言かるた作りは、昨年度の茨城大学の授業から取り組みを始めた。学生とともに、限られた45枚のかるたにどのような茨城方言を盛り込むか、あるいはどのような茨城の民俗を取り上げるかを考えながら制作を進めた。その制作の過程そのものが、私と学生とにとっての良い学びであった。今年度、読み札・絵札の原案を完成させることができた。今後は、実際にかるた遊びに使えるような製品化、さらには実際に子どもたちに使ってもらおう活動を目指したいと考えている。

東日本大震災と原発事故から9年となる。昨年からの1年の間にも、茨城県や福島県、日本各地において豪雨による被災があちこちであった。その都度、9年前のことが鮮明に思い出された。このようなときに、方言や民話はどのような役に立つのかと考えることも多かった。この1年はまた、私にとって民話について学んだり考えたりすることの

多い1年でもあった。そして、暮らしのことばである方言、暮らしや人々の思いを映す民話は、人と人をつなげてくれるものだと、実感する1年でもあった。これまでに方言や民話をとおして出会った皆さまとの関係をありがたく思うとともに、これからの出会いに期待したい。

今年度の事業でも、多くの方々のご支援、ご協力をいただきました。関係自治体等の皆さま、個人の皆さま、特にお名前を挙げることをご承諾くださった個人の皆さまには、ほんとうにお世話になりました。その皆さまのお力添えに感謝し、ここにお名前を挙げさせていただきます。

《自治体等団体》

茨城県教育委員会様、茨城県内への避難者・支援者ネットワーク・ふうあいねっと様、茨城大学図書館様

《個人のご協力者の皆様》（五十音順）

青木いづみ様、小野トメヨ様、海老原佳美様、川澄敬子様、小林久雄様、近藤たみ様、佐藤貞子様、佐藤富子様、白川ケイ子様、齋藤清子様、立田通子様、東ヶ崎秋雄様、東ヶ崎婦美子様、深谷哉子様、藤枝豊子様、藤枝安子様、三浦京子様、吉田孝子様、吉成智枝子様

最後になってしまったが、映像編集、アンケート調査データの入力や集計を行ってくれた学生の穴田祐介さん、角田咲桜さん、昔話の会のサポート、方言かるたの絵札制作を行ってくれた大嶋恭子さん、勝間田万綾さん、佐藤琴さん、千葉麻帆さん、寺門萌々菜さんに対しても、ここに記して感謝いたします。

令和2(2020)年3月2日

茨城大学人文社会科学部 杉本妙子

目 次

第一章 概要	1
I 業務の概要	3
II 談話収集等の調査の概要	7
第二章 方言による昔話の会	9
I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」の実施概要	11
II 方言昔話等	14
【DVD収録の昔話、他】	
河童とっくり（共通語・茨城方言）／子ぎつねお万／茶栗柿／	
お初お玉／けちくらべ／鼻取り地蔵／半日村／茨城方言ミニ講座／	
ぶったたきと半殺し／ばか息子の挨拶／カッパレ餅	
III 来場者アンケート結果	43
IV 関連資料	52
第三章 昔話と方言談話	57
I 文字化の基準・記号の見方	59
II 水神沼の話と東日本大震災のときのこと	62
第四章 方言かるた	81
I 茨城方言かるたの制作の概要	83
II 読み札・絵札（一部）とその展示資料	84
III 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」における報告	94

参考文献

第一章 概要

I 業務の概要

1 業務題目

方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承 2

2 目的

本業務の目的は、東日本大震災の被災地である茨城県及び福島県浜通り地域で受け継がれてきた方言と民話（方言による昔話）を、それぞれの地域の生活文化を継承するものとして捉え、方言と昔話によって当該地域の文化を学ぶとともに、方言の魅力の発信を行い、もって方言の働き・価値の再認識を促すことである。また、対象地域の方言資料として方言談話の記録、民話の記録、語り手への聞き取り調査等を行い、方言・民話の保存・継承に資するための基礎資料作りを行うことである。

3 業務の期間

令和元年10月31日～令和2年3月18日

4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略

本業務の目的に沿って、地域の文化としての方言・民話を中心に記録保存及び公表するとともに、地域の生活文化としての方言・民話を用いて、地域社会に還元する取り組みを行った。

茨城方言は東北方言と関東方言をつなぐ方言として注目すべき方言であると考えられるが、地域における関心が低く、自方言への消極的・マイナス意識が高いことが先行研究で明らかになっている。また茨城方言に関する研究は、例えば関東の他地域方言と比べても少なく、地域も限られている。しかも方言の担い手の高齢化が進んでいることから、茨城方言の研究ならびに保存（記述）・継承への取り組みは必要かつ急務であると考えた。また、福島県浜通りは広域で帰還が可能となったものの、茨城県内においても避難継続者が多い状況が続いており、この地域の方言の置かれた状況は極めて深刻である。したがって、地域の文化・魅力として茨城方言ならびに福島浜通り方言を保存・継承しようとすることは、緊急かつ必要なことであると考えた。

このような状況を踏まえて、本業務では以下の5項目及び本業務に関連した「その他の取り組み」に取り組んだ。

(1) 被災地の方言談話を収録・保存する取り組み

平成31年3月に福島県浜通り地域の新地町で行った聞き取り調査から、当該地域に伝わる昔話と関連する方言談を文字化した。調査や談話内容等については、本章次節「II 談話収集等の調査の概要」と重複するので、ここでは省略する。

(2) 方言による昔話の語りの会を実施し、地域への愛着や自信を深める取り組み

茨城方言及び福島浜通り方言を中心に、昔話の語りの会「語ってみっぺ・聞いてみっぺ・方言昔話4」を実施した。平成28年度から継続して実施している。その開催の目的は、聞く側も語る側も、方言をとおして地域への愛着や自信を深めることである。

過去3回の昔話の会の実施と同様に、茨城大学図書館と連携するとともに、地域で活動している再話グループや民話の会等の協力を得て、令和元年11月30日(土)13:30～16:00に茨城大学図書館ライブラリーホールにおいて開催した。この開催に際しては、これまでと同様に茨城県教育委員会の後援を得て実施した。本年度の昔話の会では、30分開始時間を早めて二部構成とし、第1部では次項目(3)の方言かるたについての紹介を行い、第2部を過去3回と同様の昔話の会として実施した。第2部は茨城方言を中心に福島浜通り方言等による昔話の語り、茨城方言ミニ講座である。また、茨城方言かるたと関連する資料の展示、主に昔話を題材にした布絵の展示等を行った。さらに、会の実施時に、自記式調査を実施して成果を検証した。この昔話の会の実施内容については、第2部を中心に昔話・方言ミニ講座・自記式調査結果等を本報告書の第二章において述べるとともに、会の映像記録(昔話の語りと方言ミニ講座を編集したDVD)を添えて、茨城県内を中心に公共図書館等に送付した。これによって、広く活用を図ることができるものと考えている。また、昔話の会の実施報告書(文化庁に提出)において、実施の詳細やアンケート結果の詳細を報告した。なお、会の第1部の方言かるた制作については、第四章においてまとめて述べた(アンケート結果については第二章でまとめて取り上げた)。

昔話に関わるイベントとしては、青森県八戸市と岩手県釜石市で継続的に開催されている南部弁の日のイベント(方言の昔話の語りの会)を視察することによって、本業務で実施した昔話の会を相対的に捉えることができた。また、みやぎ民話の会による「第7回 民話ゆうわ座」に参加し、民話(昔話)による学びについて考える機会を得た。視察等は、以下の3件である。

①令和元年12月7日(土)14:00～19:00

「第7回南部弁の日 はっちがずっぱど南部弁～うん、これアよごあんすナ～」
青森県八戸市・八戸ポータルミュージアム「はっち」

②令和2年1月25日(土)14:00～16:30

「南部弁サミット in 釜石 おらほ弁で語っぺし」
岩手県釜石市・釜石市民ホール TETTO ホールB

③令和元年12月21日(土)13:00～16:30

「第7回 民話ゆうわ座」
宮城県仙台市・せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

茨城(水戸)、青森(八戸)、岩手(釜石)の3地域で行われている方言昔話の会だが、それぞれの地域の方言の置かれている状況が異なる。茨城県における会では、茨城方言への関心や評価を高めることにつなげることが重要な点である。その点を考慮して、これまでの会の内容や他県での取り組み内容を参考にして第4回の構成を検討し、二部構成として茨城方言かるたの制作についての紹介を第1部で行うことにした。

第二章の昔話の会のアンケート調査結果で述べたが、方言かるた作りについては多くの意見が寄せられ、関心の大きいことが確認できた。二部構成としたこと、昔話以外の要素を加えたことによって、会の目的を十分に達成することができた。また、この成果は、今後の茨城における活動に発展させるべきものであると考える。

(3) 茨城方言かるた作成の取り組み

茨城方言への関心や理解を、子どもから大人まで楽しみながら促すことができる素材として、茨城方言かるた（読み札の原文と絵札の原画）を作成した。茨城方言かるたづくりは、平成 30 年度茨城大学 COC 地域志向教育支援プロジェクトとして茨城大学人文社会科学部の授業の取り組みにおいて作成を開始し、本業務において読み札原文と絵札原画を完成させた。読み札原文は茨城方言の「あ」から「ん」までの仮名で始まる文である。読み札原画の作画は昨年度と同じく、読み札原文をもとにして茨城大学教育学部美術専修学生に依頼（学生アルバイト）した。かるた制作と並行して、その一部をかるたのサンプルとして作成し、上記（2）の昔話の会や茨城大学学園祭において報告・展示して公表した。完成版（読み札原文、絵札原画）は本報告書の第四章に収めた。なお、実際にかるた遊びに用いることができる製品化までを行うことは本業務の取り組みとしては時間的にも経費の面でも困難であったので、製品化は今後の課題である。

(4) 昔話の語り手への聞き取り

茨城県を中心に、福島県浜通りやその他の被災地域において、方言による地域の文化である昔話（＝民話）の担い手である語り手の方々に対する聞き取りを行い、昔話の継承における課題等を把握した。課題は、担い手の高齢化、次世代への継承の難しさ、語りの学びの機会をどう得るか、等である。聞き取りは、上記（2）での青森・岩手での視察時や、県内の民話の会への参加の際にインタビュー形式で行った。また、平成 31 年 3 月に福島県新地町において行った語り手への聞き取り調査結果も、この取り組み項目に位置づけられるものであり、上記（1）の方言談話として記録・報告した。

(5) Web ページや地域のメディアを介した情報発信の取り組み

上記（2）の昔話の会等の本業務に関する情報を、新聞を始めとする地域のメディアに対して情報提供し、地域メディアを介した情報発信（複数の新聞社の地域情報紙への掲載等）を行った。また、昔話の会開催の情報発信として、茨城大学のホームページでの情報提供や県内公共図書館等へのポスター・チラシ送付を行った。さらに、本報告書を茨城県内公共図書館を中心に送付し、取り組みの成果の情報発信を行った。これらによって、茨城方言や福島浜通り方言への関心・理解を高めたり、地域の人々に対する方言の保存・継承の理解を促したりすることにつながったものと考えられる。

なお、平成 29 年度改修の web ページについては、本業務期間内には十分に充実させることはできなかつたので、今後の課題である。

(6) その他の取り組み

本業務の成果を地域社会に還元するために、過去も含めた本業務の成果を活用した

方言や方言昔話の学びの機会として一般向けの講座や模擬授業等を行った。本委託事業期間外に実施したのもも含めて、下記の3講座を担当実施した。

- ①笠間市教育委員会主催の令和元年度学校ボランティア養成講座「あなたが伝える 笠間の民話」の「第1回 方言と民話」を担当。笠間市友部公民館にて、令和元年6月26日実施
- ②茨城県立水戸第二高等学校模擬授業として、「文芸・思想メジャー入門：日本語方言学・社会言語学のすすめ」を担当。同校にて、令和元年11月14日実施
- ③取手市立図書館と茨城大学との連携によるプロジェクトとして、「取手の方言と昔ばなしを語る会」の講演「方言と昔話」を担当。取手市福祉交流センターにて、令和元年12月15日実施

以上を総括すると、本業務の実施内容は当初の計画と若干異なるところはあるものの、概ね実施することができ、業務の目的を達成できたと判断する。

5 業務実施体制

業務実施体制は次のとおりである。

・代表責任者：

杉本妙子（茨城大学人文社会科学部教授）

担当内容：業務全体の統括、方言昔話の会の開催（責任者）、方言かるた制作の統括、方言談話集作成、聞き取り調査の実施、報告書等の作成、茨城方言をテーマとした講座の実施、等

・実施補助：

- ・穴田祐介（茨城大学人文学部学生）

担当内容：昔話の会の映像編集

- ・角田咲桜（茨城大学人文社会科学部学生）

担当内容：昔話の会のアンケート調査データの入力・集計

- ・大嶋恭子、勝間田万綾、佐藤琴、千葉麻帆、寺門萌々菜（茨城大学教育学部美術専修学生）

担当内容：方言かるた絵札の作画、昔話の会当日業務補助

*その他、本業務代表の杉本の担当した茨城大学人文社会科学部の授業受講者が方言かるた読み札原文作成と談話資料作成補助の一部を授業の一環として行ったが、個々の学生名は省略する。

II 談話収集等の調査の概要

「I 業務の概要」の「4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略」の「(1) 被災地の方言談話を収録・保存する取り組み」ならびに「(4) 昔話の語り手への聞き取り」として行った談話調査・昔話に関わる聞き取り調査を行った地点（地域）、話者、調査者、文字化等担当者等は下記のとおりである。談話は「2」のとおりである。

1 文字化対象の談話・聞き取り調査地域

(1) 福島県北相馬郡新地町

調査地点：北相馬郡新地町小川（調査協力者宅）

調査年月日：2019年3月19日

話者：女性2名（うち1名は談話等の聞き手として）

話者1…新地町在住、90代、女性 *主たる話者

話者2…茨城県東海村在住、70代、女性 *話者1の話しの主な聞き手

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

文字化補助：学生5名（「5 業務実施体制」参照）

2 方言談話

(1) 福島県北相馬郡新地町の方言談話

①水神沼の話と東日本大震災のときのこと

第二章 方言による昔話の会

令和元（2019）年11月30日（土）に、茨城大学図書館と連携して「茨城大学図書館土曜アカデミー」として開催した、被災地方言による昔話の会「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」（茨城県教育委員会後援）の実施概要、方言昔話、来場者アンケート結果について述べる。なお、本章では「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」の主に第2部について述べる。第1部の茨城方言かるたの制作に関しては主に第四章で述べることとし、本章では来場者アンケートの中の方言かるたの質問項目の結果についてのみ取り上げることとする。

I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」の実施概要

(1) 名称 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」

(2) 主催者等

主催…令和元年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2」（茨城大学・代表責任者 杉本妙子）
ならびに茨城大学図書館

後援…茨城県教育委員会

(3) 実施の目的

茨城方言を中心に被災地方言による昔話の語りの会を開催し、方言をとおして地域への愛着や自信を深める。

(4) 実施日時 令和元年11月30日（土） 13:30～16:00

(5) 実施場所 茨城大学図書館本館3階ライブラリーホール（水戸キャンパス）

(6) 来場者数 91人

(7) プログラム

第1部

①開会のあいさつ・会の趣旨説明

②報告「茨城方言かるた」

（ 休 憩 ）

第2部

③方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ

・「河童とっくり」…共通語／広島方言／福島浜通り方言／群馬方言／茨城方言（県央）

④茨城方言の昔話を楽しむ（その1）

・「子ぎつねお万」…東海村に伝わる昔話

・「茶栗柿」…手話と昔話

・「お初お玉」…継子譚

⑤カーテンシアター：茨城方言の昔話「けちくらべ」

※「カーテンシアター」は、紙芝居の絵を横長のカーテン状につなげたものを、昔話の語りの進行に合わせて開いていくもの。

（ 休 憩 ）

⑥東北・福島浜通り方言の昔話・語り

・「鼻取り地蔵」…双葉郡双葉町両竹にある鼻取り地蔵にまつわるお話

・「半日村」…福島浜通り方言による「半日村」（創作絵本、原話・斎藤隆介）

⑦「茨城方言ミニ講座」

⑧茨城方言の昔話を楽しむ（その2）

- ・「ぶったたきと半殺し」
- ・「ばか息子の挨拶」
- ・「カップレ餅」

⑨おわりのあいさつ

(8) その他

- ・当日、開催前の配布資料として、B5版5ページ（表紙・裏表紙を除く）の冊子状の資料、プログラム、アンケート調査用紙、チラシを配布。資料内の昔話については、話のあらすじ、あるいは導入としての昔話の紹介文を載せることで、直に聞いて楽しんでもらうことを目指した。
- ・「茨城方言かるた」の展示と解説。8組の方言かるたと、読み札の方言の説明、一部の読み札の中の茨城の民俗（「カップレ餅」「ワーホイ」等）についての解説の展示。（本章第四章参照）
- ・布絵の展示。会場（ライブラリーホール）外に、昔話（花咲か爺、浦島太郎、金太郎、カップレ餅、他）に関連した布絵の展示。布絵は、茨城町の個人の制作によるもので、1.5メートル四方大から1.5×2メートル大程度の作品。

《参考》会の趣旨説明（会当日に説明に用いたパワーポイント）

令和元年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業
「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2」・
茨城大学図書館土曜アカデミー

「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」

日時：令和元（2019）年11月30日（土）

13:30-16:00（予定）

場所：茨城大学図書館ライブラリーホール

文化庁「被災地における方言の活性化支援事業」とは？

事業の目的

本事業は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災において、被災や避難に伴い消滅の危機にあると考えられる被災地域の方言について、「東日本大震災からの復興の基本方針」（平成23年7月29日）において「『地域のため』である文化財や歴史資料の修理・修復を進めるとともに、伝統行事や方言の再興等を支援する。」と明記されていることを受けて、被災地域の方言の保存・継承の取組や方言の力を活用した復興の取組を支援することにより、被災地域の方言の再興及び地域コミュニティの再生に寄与することを目的とします。

（同事業募集案内より）

方言を取り巻く環境はどうなっているのか？ 今、方言はどのような状況にあるのか？

◎ユネスコの世界の危機言語の指摘

ユネスコは、日本国内の言語（方言）の中で、アイヌ語と八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、与那国語などの方言群を消滅危機言語として指摘。文化庁も「消滅の危機にある方言・言語」に関する事業を展開している。

→ ユネスコが指摘した言語だけが危機的状況なのか？

→ 日本各地の方言が、今、危機に瀕しているのではないのか？

・・・震災、共通語化、地域の共同体や家族の形態の変化、地域によっては方言へのマイナスイメージ、...

◎平成29年改訂の学習指導要領

中学校学習指導要領国語編中学校1学年〔知識及び技能〕(3)
我が国の言語文化に関する事項ウ「共通語と方言の果たす役割について理解すること。」

《解説》

共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことで、異なる地域の人々が互いの伝えたいことを理解することができる。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的、社会的な伝統に根ざした言葉であり、その価値を見直し、保存・継承に取り組んでいる地域もある。

例えば、東日本大震災による被災地域においても、方言を使うことで被災者の心が癒やされるなどした事例が報告されるとともに、方言の保存・継承の取組そのものが地域コミュニティの再生に寄与するなど、地域の復興に方言の力を活用する取組も進められている。

こうした方言が担っている役割を、その表現の豊かさなど地域による言葉の多様性の面から十分理解し、方言を尊重する気持ちをもちながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて適切に使い分けられるようにすることが大切である。

本日の会の趣旨

地域の文化としての方言・民話とおとして、地域への愛着や自信を深める目的で、方言による昔話の語りの会を開催します。

今回は、例年より30分早く開始させていただき、現在、制作を進めている「茨城方言かるた」について、少し紹介させていただきます。

2時からの第2部は、例年と同様の語りの会です。

茨城方言の昔話を中心に、福島方言による昔話、また、方言の多様な姿や各地の方言のおもしろさを体感していただくために、方言による聞き比べ、カーテンシアター、方言ミニ講座なども加えた構成で、本日の会を開催します。様々な方言の語りなどを聞くことにより、地域の方言への関心が高まり、そのことが地域への愛着や地域の文化である方言・民話の価値の再発見、そして地域への自信を深めることにつながると考えています。

どうぞ、昔話をお楽しみください。

II 方言昔話等

本節では、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」（2019年11月30日開催）において語られた方言昔話、茨城方言ミニ講座の内容を示す。方言昔話については、茨城方言によるものを中心に、一部の方言による昔話（広島方言版・群馬方言版の昔話）については、共通語版の昔話を示すことで、その方言版は省略した。なお、本節で省略した方言版昔話についても、会当日の映像を編集したDVDには省略していない昔話等とあわせた全てを収め、本報告書に添付した。

昔話は、同じ語り手による同じ話であっても、語る度に全く同じということはなく、多少は変わるものである。そこで、本節では再話した昔話で、再話者である語り手から再話文を提供していただいたものについては、その再話文を示した。そのため、実際の語り（DVD映像）とは、若干異なるところがある。再話文のない昔話等については、当日の語りの音声・映像をもとに文字化したものを示した。

文字化の示し方は、おおむね以下のとおりであるが、昔話によって示し方が違う場合がある。また、適宜、方言の語句に注を付したが、注の付け方・多寡についても、昔話によって異なる。

〔方言昔話等の文字化の示し方〕

- ・昔話等は、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」のプログラム順に示した。
- ・昔話の題目の脇に、[再話：〇〇][作話：〇〇]とあるのは、再話者・作話者による文である。また、一部の昔話については[方言訳：〇〇]として方言訳者を示した。なお、文節間の1字空けや漢字のルビなど、読みやすさや発音を表すために、一部、元の再話・作話に手を加えたところがある。再話の原話については、各昔話のはじめに記した。
- ・昔話の参考になっている文献がある場合は、昔話の後に参考文献を示した。
- ・昔話等の題目のみを示した演目と一部の方言訳版は、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」において語られたものを文字化したものである。
- ・原則として、語りの発音どおりに平仮名・漢字交じり文で表した。複数の読み方ができる漢字には、適宜、振り仮名を付した。
- ・言いよどみ、言い直し等は、適宜、省略した。
- ・語と語、あるいはまとまった意味の文節・句と文節・句の間を一字空けにするとともに、適宜、句読点を付けた。
- ・助詞「ハ・ヘ・ヲ」（発音は「ワ・エ・オ」）は「は・へ・を」を用いた。
- ・長音（伸ばす音）は、「なあ、ねえ」のように表記、小さい「あ、え」や長音のカナ「ー」を用いて表した。
- ・ガ行鼻濁音（が、ぎ、ぐ、げ、ご）については、ガ行濁音との表記の区別はせず、概ねガ行濁音の仮名で表記した。（一部、ガ行鼻濁音を用いたところがある。）
- ・標準語と異なる方言の発音や語形は、かな漢字表記にルビを付して表した。
- ・適宜、発話には出てこない助詞や語の一部等を〔 〕で補った。
- ・一部、聞き取れなかった箇所や発音が判別できないところには、下波線を付した。
- ・わかりにくいと思われる方言の語（俚言）や地名等については、適宜、注を付けた。注の解説は、各昔話等の後にまとめて示した。
- ・昔話の中の会話は「 」で、心内発話は『 』で示した。

1-1 共通語版「河童とっくり」※ [再話：七絃の会]

※原話は、加藤政晴著『利根川おぼけ話』（崙書房、1991年）

むかし、あるところに、働^{はたら}き者の男がいました。

ある日、男は一日の仕事を終えて、川で馬をあらっていました。すると、川の中から手がぬうっと出てきて、馬のしっぽをつかむと、いきなり水の中に引きずりこみました。馬はおどろいてヒヒーンといななくと、川からとび出して走りだしました。男はわけがわからず、

「どうしたんだ、まってくれ」と、馬を追いかけました。やっと馬に追いつくと、馬のしっぽに、水かきのついた青い手がぶらさがっていました。男はおどろいて、

「これはなんだ。そうか、河童^{かっぱ}⁽¹⁾の手だな」と、その手を家に持って帰りました。

さて、その晩^{ばん}のこと、男の家の戸をトントンたたく者がいました。戸を開けてみると、二匹^{ひき}の河童^{かっぱ}でした。親河童^{がっぱ}が、

「どうか、おまえさまの持っているむすこの手を返してください」と、頭をさげました。片手^{かた}のない子河童^{がっぱ}も涙^{なみだ}をポロポロこぼしながら、

「もう、いたずらはしません」と、あやまりました。男は、

「そうか、わかったよ」といって、河童^{かっぱ}の手を返してやりました。

すると、親河童^{がっぱ}は、お礼にと、男にとっくり⁽²⁾を一本さし出しました。

「これは、酒がいくらでも出てくるとっくりです。でも、とっくりの底^{そこ}を三回たたくと酒は出なくなります。お好きなように使ってください」河童^{かっぱ}はそういって、帰っていきました。

男は、さっそくためしてみようと、とっくりの酒を飲みほしました。すると、すぐにとっくりは酒でいっぱいになりました。

「ははあ、これが河童^{かっぱ}とっくりか。いいものをもらったぞ」男は、それからというもの、とっくりをかかえて、酒を飲んでねむり、さめては飲んでの毎日で、すっかり大酒飲みになってしまいました。

ある日、男はよっぱらって、足をふらつかせながら外に出ました。すると、げっそりやせた馬が、男にすりよってきました。男は、はっとしました。

「すまなかった。おれが飲んだくれていたうちに、こんなにやせてしまったんだな。もう、酒はおしまいにするよ」男は急いで家に入ると、とっくりの底をポンポンポンと三回たたきました。すると、河童^{かっぱ}がいったとおりに、酒は一滴^{いってき}も出なくなりました。

それから、男は、前にもまして馬を大切に、野良仕事^{のら}⁽³⁾にせいを出したということです。

《注》

(1)河童 川や沼に住んでいる想像上の生き物。背中にこうら、頭の上に皿がある。

(2)とっくり 酒を入れる入れ物。

(3)野良仕事 田んぼや畑で作業をすること。

1-2 茨城方言版「河童とつくり」※ [再話：七絃の会]

※原話は、加藤政晴著『利根川おばけ話』（崙書房、1991年）

むがし あっどこに、ようぐ 働ぐ男が いだんだどよ。

ある晩方 男 野良仕事 終やして 川で 馬め⁽¹⁾ごど あらって やってだと。そう
すつと 川ん中がら 手がぬうつと おん出で来て 馬めがしっぽ ひつつかんで⁽²⁾ 川
さ 引きずりこんだ。すつと、馬め びっくらこいで⁽³⁾ ヒヒーんって 声あげつと む
ぎもなぐ⁽⁴⁾ 川がらとび出して かけて いっちまったっちけ。

男 わげ わがんねえぐって、

「こら、どうしたんだ。待ってろ、待ってろ」って、追っかけだど。男、やつと 追っ
づいで、馬めごと見っど しっぽさ 水かき ついだ 青い手 くっつけてんの 見っけ
で おったまげだ⁽⁵⁾と。

「こりゃ、なんだっぺ。 んだ、河童^{かっぱ}の手だなあ」って、馬めの しっぽさ くつついて
だ 手 ひっ放なして うちさ 持ってつたと。

その晩に、男のうちの 戸^とば⁽⁶⁾ ただくもんが あつたっちけ⁽⁷⁾。男 戸^とば 開げつと
二匹^{にひき}の河童^{かっぱ} ちょこんと つつ立ってだと。そんで 親河童^{がっぱ}が、

「おめえさまが 持ってる せがれ⁽⁸⁾が手 どうか 返し^{けえ}してくんねえげ」って、頭 さげ
たど。手 失^なぐした 子河童^{こがっぱ}も 涙^{なみだ}たらし⁽⁹⁾ながら、

「おら⁽¹⁰⁾、もう 悪さ しねえがら」って、あやまった。そんで 男、

「そうか。んだら、手 返し^{けえ}してやっぺ」って、河童^{かっぱ}らに 手 返し^てした。

すつと、親河童^{がっぱ} とつくり一本 おっ出しで、

「このとつくり 酒 いぐらでも 出でくる とつくりだ。んでな、とつくりの底^{そこ} 三
べんただくと、酒 出なぐ なっかんな。おめえさまが 好き^すなように お使いなせえ」
って、わだしで、河童^{かっぱ}ら 帰^{けえ}ってつたと。

男、本^{ほん}当^とがちく⁽¹¹⁾が ひとつ ためしてやっぺと とつくりの 酒 みんな 飲んじま
つたと。男、もう、とつくり からっぽ だっぺって、見でみつと 酒 とつくりさ い
っぺえに なつてたんだと。男、

「いやあ、これ 河童^{かっぱ}とつくりだっぺ。いいもん もらつた」って。

そんで、朝っから晩まで 酒 かっくらって⁽¹²⁾ 大酒飲みに なつちまつたと。

ある日、男 よっぱらって 表さ 出つと、やせつこけだ 馬めが 男のとこさ すり
よつてきたと。男 馬めごと よぐよぐ 見て、

「おめえ こつたに⁽¹³⁾ やせつこけちまって。おら 酒 飲んだぐれで おめえがごと
放^ほつたらがし してたがんなあ。おら、もう 酒 やめっぺ」ってゆつた。男 うちさ 入^{へえ}
つてつと とつくりの底 ポンポンポンって 三べん ただいた。すつと、河童^{かっぱ}の ゆつ
たとおり とつくりから 酒 一滴^{いってき}も 出なぐ なつたと。

それから 男はよう 野良仕事さ せいだして 馬めも 大^{でえじ}事^じにして えら かせいだ
と。 おしめえ

《注》

- (1)馬め 馬。「め」は動物名の後につく接尾辞。
- (2)ひつつかんで つかんで。基本形は「ひつつかむ」。
- (3)びっくらこいで びっくりして。基本形は「びっくらこく」。
- (4)むぎもなぐ とてつもなく。ここでは「いきなり」の意。
- (5)おったまげだ たまげた。おどろいた。基本形は「おったまげる」。
- (6)戸ば 家の出入り口の戸。
- (7)あったちけ あったそうだ。あったということだ。
- (8)せがれ むすこ。
- (9)涙たらし 涙を流し。
- (10)おら おれ。わたし。
- (11)ちく うそ。「ちぐ」とも。
- (12)かっくらって 飲んで。食べて。基本形は「かっくらう」。
- (13)こったに こんなに。

1-3 福島浜通り方言版「河童とつくり」* [再話：七絃の会、方言訳：吉田孝子氏]
※原話は、加藤政晴著『利根川おぼけ話』（崙書房、1991年）

むがしむがし あったじな⁽¹⁾。 ある所に よく かせぐ男が いだんだど。

ある日のごど、 男は 一日の仕事でがして⁽²⁾ 川で 馬^{んま} 洗ってやってだど。 ほうしたっけにな、 川ん中がら ぬうっと 手が 出で来て 馬の尻^{しり}っぽ⁽³⁾ つかんだがど 思ったっけに、 いきなり 水ん中さ 引^ひっぱり込んだだど。 馬は たまげで ヒヒーンと 鳴えで、 川から おん^お出^でて 走^はねだしたど⁽⁴⁾。 男は 何が何だが ほうげなく⁽⁵⁾、

「なじよしたんだあ⁽⁶⁾ 待ちえろお」

って 馬ごど⁽⁷⁾ 追っかけたど。

やっどご 馬に 追っついで よっくど⁽⁸⁾ 見でみだっけに 馬の尻っぽに 水かきの ついた 青い手 ぶら下がってんだど。 男は たまげで

「あいやあ 何だべ これは。 あっ ほうが 河童のやろうの 手だな」

どって⁽⁹⁾、 ほの手 我が家さ 持^もって帰^{かえ}ったど。

はあで、 その晩のごど、 誰^{だん}じゃが 男の家の 戸を トントンと ただぐんだど。

みだっけに 河童の親子が 戸んぶぐっちゃ⁽¹⁰⁾ つっ立ってだど。 親の河童が、

「どうが、 おめえさまが 持^もってる おら家の息子がな手⁽¹¹⁾ 返^{かえ}してくんちえ」

って、 頭^{あたま} 下げだど。 童子の河童も 片っぽの手 もげちまったもんだがら、

「もうど⁽¹²⁾、 いたずらしねえがら」

って 涙 ポロポロこぼしながら あやまったど。 男は、

「ほうがほうが わがった」

どって 河童の手 返^{かえ}してやったど。

ほうしたっけにな、 親の河童が お礼にって 男に とつくり 一本 つん出したど。

「このとっくりはな、酒が なんぼでも 出でくんだ。 んだげんちも とっくりのけづん所^{とご} 三べん ただぐど、 もうど 出でこなくなちまうがらな。 すきなようにして 使ってくんちえ」

ほう言^ゆって 河童の親子は 帰^{けえ}って行^いったど。

男は 『どおれ、 ひとつ 試^ししてみっぺ』ど思^{おも}って とっくりの酒 全部 飲^のんで 空^くっぽにしてみだど。 ほうした^くつ^ちけに、 ずぎ⁽¹³⁾ とっくりの口^{くち}まで 酒で いっぺえにな^なってんだど。

「ははあ、 これが 河童とっくりってゆうものが。 いいもの もらったわい」

ほれがら^らってゆうもの 男は とっくり たんが⁽¹⁴⁾って、 酒 飲^のんでは眠^ねり、 覚^さめては飲^のんでの 毎日^{まいにち}で、 すっかりど 大酒飲^のみにな^なちまったど。

ある日^ひのごど、 男は ふらふら^らと、 表^{おもて}に 出^いでみだんだど。 ほうした^くつ^ちけに、 げっそりど やせ^せ一^{いち}だ 馬^{うま}が なつ^なつこく よさ^よって来^きた⁽¹⁵⁾ど。 男は は^わと 我^{わが}に返^{かえ}って、

「悪^{あく}りが^がったな^な。 おれが よ^よば^ばら^らって^てる^るうちに、 こんなに やせ^せち^ちま^まって は一^{いち}。 もうど、 酒は 飲^のま^まね^ねが^がら^らな^なあ」

男は ご^ごいら⁽¹⁶⁾ 冢^{いさ}さ 引^ひつ返^{かえ}して行^いって、 とっくりのけづ ポンポンポンと 三べん た^たで^でえ^えだ^だんだど。 ほうした^くつ^ちけに 河童^{かどう}の言^いった^たとお^おり、 ひとつ^{ひとつ}た^たら^らし^しの酒も 出^いでこ^こな^なぐ^ぐな^なち^ちま^まったど。

ほれがらはな、 男は 前^{めえ}よりも ま^まと⁽¹⁷⁾ 馬^{うま}ご^ごど 大^で事^{えじ}にして 一^{いち}生^{せい}懸^{けん}命^{めい} 仕^し事^じした^たんだ^だち^ちけ^けど。 こん^{こん}じ^じえ お^おし^しめ^めえ

《注》

- (1) あったじな あったそうだ。昔話の始まりの表現。かつては日常でも話の開始の場面で使われていたという。
- (2) でがして 終わらせて。
- (3) 尻^{しり}っぽ 尾。「シリポ」とも。
- (4) 走^はね^はだ^はした^はど 走り出したと。「走ねだす」は「ハネル+〜ダス（出ス）」。
- (5) ほうげ^{ほうげ}なくて 訳が分からなくて。
- (6) な^なじ^じよ^よした^{した}んだ^{んだ}あ どうしたのだ。
- (7) 馬^{うま}ご^ごど 馬のことを。馬を。ゴドは生き物の目的語を表す助詞。
- (8) よ^よっ^っく^くど よく。よーく。
- (9) ど^どって と^と言^いって。
- (10) 戸^とん^んぶ^ぶぐ^ぐっ^っち^ちゃ 戸口に。戸口を表す「トンググチ」に助詞「ニ」が下接し、音が融合して「〜ッチャ」となったもの。
- (11) 息^い子^こが^がな^な手^て 息子の手。「ガナ」は「〜のもの」の意。
- (12) も^もう^うど も^もう。決^けして。下に打ち消しの表現が続く。「モート」とも。
- (13) ず^ずぎ^ぎ すぐ。すぐに。
- (14) た^たん^んが^がって 持^もって。持^もち^ち上^あげ^げて。基本形は「タンガク」。
- (15) よ^よさ^さって^て来^きた^た 寄^よって^て来^きた^た。

(16)ごいら 急に。突然。「ゴエラ」「グエラ」とも。

(17)まっと もっと。一層。

2 「子ぎつねお万」(茨城県東海村に伝わる昔話)

むかーし、久慈川⁽¹⁾が 蛇のように くねくねと 曲がって 豊岡⁽²⁾や 八反原⁽³⁾あたりを 通って 海さ 流れていたころの 話だ。そこいらはな 木の実が いっぺえなあって、生き物らには うーんと 暮らしやすい 所^{とこ}だったんだと。子ぎつねのお万は 豊岡辺りを ねぐらにして、ほして りすや 狸めら⁽⁴⁾と 朝から晩方まで いっぺ 遊んでいたんだと。

はてな、ある時 広ーい 原っぱ 抜けて 畑さ 出てみっと、木の根元に じさまが こっくりこっくり 居眠り こいてたんだと。

『あっ、いたずらすっぺ』っと思つてな、じさまの足 こちょこちょこちょこちょくすぐったんだと。

じさま、目 覚まして、

「あれっ、なんだ きづねの こでねーかー」

って きづねはな、

「おら じさまと 友達ん なりてえ」って こう ゆんだと。

じさまなあ、孫 いねかったから くりくりした かわいい目 見てな、

「ああ よかっぺ」って ゆったんだと。

ほれから たぬきや りすなんかと いっしょになー、じさまんとこさ 毎日 遊びに 来るようになつたんだと。

あつ時⁽⁵⁾な、じさまな 「いやあ きょうは いっぺえ 稼えだ。腹 へったなあ」なんて ゆってたらな、お万がな 白ーいものな どんぶりさ 入れて ほかほか 湯気 たつたんだと。それ 持ってきて、

「じさま うどん こせたから 食え」ってゆつてな 持ってきたんだと。

「ああ ほうかほうか」つてな、食うがと思つた⁽⁶⁾。

「じさま、そりゃ うどんでねえよ。ミミズだっぺよ」つてなあ、うさぎめがなあ おせてくっちゃんだと⁽⁷⁾。

「あ いやいやいや、おら だまされるとこだった。いっばい 食わされるとこだったなあ」なんつて じさまは 笑っていたんだと。

さあて そんな ある日な、もらい風呂^{風呂}に行く 一家 見つけた お万はな、『よーし、また いたずらしてやっぺ』なあって 思つてな、待ち構えていた。

「さっ、とうちゃん 先にな、ああ きょうは 汗 いっぺ かいだから、早ぐ 風呂さ へえって さっぱりしてえなあ」なんつてな、もらい風呂^{風呂} 行く、もらい風呂^{風呂}に 約束してた 家^{いえ}さ 行ったんだと。

「おばんでやんす、おばんでやんす。あれっ、誰も いねえな。まあ いいや。かあちゃんと 娘 後がら 来っから おら 先さ 入^{はい}ってっぺ」つて、きもの 脱

いでな ほおして 風呂さ 入^へったんだと。

「なんだか この風呂 さっぱり あったかくねえなあ。」って 思っていたらな、 あどから やって来た かあちゃんと 娘は、

「とおちゃん、 なに やってんだよ。それは 風呂で ねえよ。肥溜めだっぺよー」って ゆってなあ、

「なーんだ おら だまされちまったのかあ。 くやしなあ」つつてな、 とおちゃんはなあ んと くやしがったんだと。

そんなこんなあつてな、 村の人らは

「よし、 きづねめに だまされんようにしなくちゃなんねなあ」つつてな、 ちいーっと 用心しはじめたころだ。 一人の 馬喰^{ばくろ}がな、 久慈浜さ 魚 買いに行つて、 そうして 帰り道な 長え 坂道^{さかみち}、 八幡台坂^{はちまんたいざか}の長い坂道⁽⁸⁾ 歩いてつとな、 なんだか 急に 背中の かごが 軽くなったような 気がした。 下してみつと、「あれっ、 魚が 一匹も 入^{はい}ってねえ。 これ、 これは なんか あるな」つと 思つてな 回り こうやって 見回してみつと、 行ぐときには ねえかった 変てこな 松の木が でーんと 立ってんだと。 ほんでな、『よーし、 これは きづねの 仕業だな』と思つて、 近くにあった 丸太ん棒 バシーッと その 松の木 ぶつたいたんだと。

「ぎゃーっ」って声が出て、 やっぱし きづねが 転がるように 逃げてつたんだと。

やあ、 その話 聞いたな じさまは、「いやあ なんぼか お万、 痛かったっぺなあ」つつてな、 ほおして 薬 つけて 世話してやつたんだと。 ほして、 やつと 傷が 治ったかなあつと 思った頃な お万は 思ったんだな。 『おら、 おもしろ半分 に やってたけんと、 ほんとは わりいごとだったんだなあ。』って、 やつと 気が付いたんだと。 ほして、 その頃から もう お万たちは そんなに 遊びにゃあ 来なくなつたんだと。

ところがな、 しばらくしてからな、 お万たちが ひょっこり 訪ねて来たんだと。

「近々、 お万が 嫁様になるごとになつた」って ゆつてな、 ほうして 「はあ ほうかほうか。 あんなに いたずらだった お万が お嫁になるのか。 嫁様 行ぐのか」つつてなあ、 じさまは うんと 喜んでくつちやんだと。 ほうして、 しばらくしたある晩方な、 遠くの 山のほうから ピンカラピンカラ 提灯の 灯り ともしてな、 狐の 花嫁行列がな やつて来て、 ほうして じさまの 家の周りを ぐるぐるぐるぐる 回つて 行つたんだと。 おしめえ。

《注》

- (1)久慈川 くじがわ。源流は茨城・福島・栃木県にまたがる八溝山。茨城県では大子町、常陸太田市、常陸大宮市、那珂市を流れ、日立市と東海村の間を通過して太平洋に流れ出る。かつての久慈川は平野部ではかなり蛇行していたようで、現在でも常陸太田市栗原には蛇行の跡である三日月湖が残る。
- (2)豊岡 地名。東海村豊岡。東海村と日立市の境を流れる久慈川の河口沿いの地域。
- (3)八反原 地名。はつたんばら。

- (4) 狸めら 狸ら。「タヌキメ」のメは、動物名の後につく接尾辞。
- (5) あっ時 ある時。ラ行のルが促音化している。なお、茨城方言では、動詞の終止・連体形語尾「〜ル」が促音化するため、動詞「ある」も「アル→アッ」となる。
- (6) 食うがと思っ^もた 食うかと思っ^もた。食おうと思っ^もた。「〜トモッタ」は「〜ト+オモッタ」が融合した形。
- (7) おせてくっちゃんだと 教えてくれたんだと。「〜テクッチャ」は「〜てくれた」。
- (8) 八幡台の長い坂道 八幡台坂。東海村豊岡にある坂。『東海村のむかし話と伝説』（東海村教育委員会編集・発行、1981年）には「狐に化かされた話」の6（95ページ）として、次のような話が収められている。

「八幡台坂」（豊岡）というのは、村松から久慈浜へ行く途中に松並木があって、そこが坂になっているんですがね。

その坂あたりには、たくさん狐がいたんだそうですよ。それで、魚を荷車さつんで久慈浜へ売りに行くときなど、夜遅くなったりすると、荷車へ乗って来て、魚をよく取られたそうですよ。

それから、そこを通る人が、よくばかされたというような話がありましたわ。

話者 須藤丑造（村松宿）

3 「茶栗柿」*

*手話と語りによる演目。語りに先立って、来場者にも手話に参加してもらうために、「茶」「栗」「柿」等を表す簡単な手話についての説明があった。（手話についての説明は省略。）以下の語りの中では、来場者が手話に参加したところはゴチック体とし、手話の参加を促す声掛けは【 】で示した。

むがーし むがしな、ちょっこし 頭の弱^よえ 息子が おったんだと。この息子、い一つも 遊んでんでなあ、やー 両親 心配して 相談ぶってな ものを 売りに行かせることにしたんだと。そっでな、籠にな 茶と 栗と 柿を 入れてな、持たせて 売りに 行かせた。それで、息子 町さ 行ったと。

【いいでしょうか、皆さん。息子がいっぱい売ることができるように、（手話の）ご協力お願いいたします。】

でも 息子、いやー 茶と 栗と 柿、一つ一つ 言うのは うざったい⁽¹⁾もんでなあ、やー この三つを 一つにまとめて 言って 歩いたと。

「茶 栗 柿、茶栗柿 茶栗柿」て 言ったんでも 何を 売ってるか 誰も わからんもんでなあ、一つも 売れんで 帰ってきたと。

そしたらな、両親 息子に 聞いたと。

「おまえ、何^{なん}て 言って 歩いたんだ」って。

「あ おらなあ、茶栗柿 茶栗柿 言って 歩いたと」って。

「はーあ、だめだ だめじゃ。それでは だめだ。一つずつ、いいか 一つずつ 言うんだ。茶は茶で 別々、栗は栗で 別々にな。柿は柿で 別々に、なあ」って。

「あっ、 わかった わかった」

で 息子、 また 売りに 歩いたと。

「茶は茶で 別々、 栗は栗で 別々、 柿は柿で 別々」って 言うて 歩いたんだと。
そして、 家さ 帰ってきてな、

「いやー おらな、 教えられたとおりに 茶は茶で 別々、 栗は栗で 別々って 言うて 歩いたんだが、 一個も 売れんで あった」って 言ったと。 それで、 両親 が っかりしてなあ 顔ば⁽²⁾ 見合わせて、

「はあー、 ばかに つける 薬は ないんだなあ」って 言ったと。

それを 聞いた 息子、

「やあー つける薬が ないなら 飲む薬を ください」っと 言ったんだと。

はい、 おしまいです。

《注》

(1) うざったい めんどうくさい。『茨城方言民俗語辞典』には、「ウザッタイ」「ウザイ」の見出しはないが、「ウゼイガキ」の見出しがあり、語義は「めんどうくさいこと」とある。

(2) 顔ば 顔を。「ば」は目的語を表す助詞。茨城県内では、南東部の鹿嶋市や神栖市で使われる。

4 「お初お玉」* [再話：七絃の会]

※原話は鶴尾能子編『茨城の昔話』（三弥井書店、1972年）所収。再話は『茨城のことばで語る おあきさんの昔ばなし』（杉本妙子編（2016）「被災地方言と方言で語る生活文化の再発見と継承」（2015年度文化庁委託事業））所収。

むかし、大工の男が 嬢あを持つと、女のおどめ⁽¹⁾が できたんだと。

んで、初めてできた おどめに、お初って つけたんだって。そのお初が 三つのとき、おっかさまが 死んちまったんだと。そうすつと、おとつあま、

「ああ、しょうがねえ。嬢あが 死んで 娘 あって、おれ ひとつんじ⁽²⁾ いらねえ。トーライ⁽³⁾でも、もらうしかねえ」って、トーライさま もらったんだと。

しばらくすつと、トーライさまにも 女のおどめが できて、お玉って つけたって。

あるとき、おとつあま、お初の おっかさまが 墓⁽⁴⁾さ、墓印⁽⁵⁾になって 栗の木 植えたんだっけ。

娘らが いがく⁽⁵⁾なって、七つと 五つになつと、栗の木も いがくになって、実が なるようになった。桃栗三年ちゅうからな。んで、秋になつと、栗 いっぺえ 落っこちたんだと。

すつと、トーライのおっかさま、

「おめえら 墓場⁽⁶⁾さ 行って、栗 拾って来う」って、てのごい⁽⁶⁾で 袋 縫うっちど、

「お初は これ 持ってげ、ほら お玉は これ 持ってげ」って。それで 出かげっと
き、

「おめえは 妹なんだから、姉ちゃまが後⁽⁷⁾んなって 拾え。姉ちゃまは 先んなって、
拾あんだど」って言って 出したと。おっかさま、たいへん 世間前⁽⁸⁾は いいように 言
うんだと。

それで、お初が 先になつて、散らばつてる 栗、一所懸命 袋さ 入れたと。

ところが、お初が袋、片っぽ けつ ぶん抜けていた⁽⁹⁾んだ。お玉がな⁽¹⁰⁾は、よおく 縫
つてあつて、けつ 止まつてたんだと。お初が いぐら 栗 拾え集べても、袋から 落
っこちまう。お玉 その後 行って、姉さまが 集べた栗 みんな 入れっから、いっ
ぺえ たまつたど。

お玉、うちさ 帰つて来つと、

「母ちゃん、栗、こうたに⁽¹¹⁾ 拾つてきた。姉ちゃん ちいんと⁽¹²⁾しか 拾あねえ」つ
て言つた。

すつと、おっかさま、

「おめえに いい栗 拾あせつぺって、先んなつて 拾あせんのに、なんで 姉のくせに、
ちいんとしか 拾あねえんだ」って、姉のけつ ひっぱたくやら、焼け火箸 おつつける
やら、さんざん、いじめたつて。

あるとき、おっかさま、お玉に 言つたど。

「お玉、こんにやく 買って来う」

「何すんだ、母ちゃん」

「おでん こしえてやっから、こんにやく 買って来う」

お玉、こんにやく 買って来つと、おっかさまに 言つた。

「母ちゃん、こんにやくで おでんべつたら⁽¹³⁾ こしえてくれや」

「こしえてやっから」って、こんにやく 半分で おでんべつたら こしえて、娘
らに食わせて寝せつちやつたど。

大工のおとつあま 毎日 遅くて、娘ら 寝てから 帰つてくんだつちど。

おっかさま、親父が 来ねえうちに、継子^{ままこ}のこと、どうやって 殺しちやつたらよかつ
ぺって、首つた⁽¹⁴⁾なんどでは 傷つて わかつから、まず ひとつ お化けになつて、
責め殺しちまうべつて 思つたど。

おっかさま 鬼の面^{おに つら}なつと、その上さ、おかめのお面^{めん} かぶつたど。それで、こんに
やくで べろ こしえて、そのべろ お面^{めん}さ くつつけつと、散らし髪^{こわ}の 化けもん
になつたど。

おっかさま 針 持って、お初の寝どころさ 行くと、針のけつのほうで、チクチク チ
クチク 刺して、毎晩^{めえぼん} いじめていたんだと。そしたら お初、

「母ちゃんよ。怖いよ、おっかねえよ」って、化けもんが おっかなくて 泣いてたんだ
ど。

お初、おとつあまが 帰つてきても、化けもんが 出つとも、こうしらつちやつとも そ
うしらつちやつとも、まず 言わねえんだと。そうしてつと、顔色 悪くなつて、体 やせ

っこけてきたんだと。

おとつつあま、こりゃあ、何ごとかあったなって 思ったと。それで、
「嬢あ、きょうの晩げは 泊まりだから、娘らこと よおく めんどうみて 世話しろや」
って、ちく抜いて⁽¹⁵⁾、家 出たんだと。ほしたら、お玉が 言ったと。

「母ちゃん、今夜も こんにやく 買って来んのか」

「うん、買って来う」って、おっかさま、娘らに おでん こっしええて 食わせっと、早
えぐ 寝せちゃったんだと。

そしたら おっかさま、今日は 親父め 泊まりだし、がきめら 寝ちゃったから、今
夜こそ 責め殺してやっぺって、お初とこさ 行って、こんにやくの べろで なめたり、
針で つつとおしたり⁽¹⁶⁾ しいしい、いじめてたど。

おとつつあま、表で その様子 聞くと、たまげて、とぼ⁽¹⁷⁾ 開けっと 飛びこんで、
「おめえ、何 やってんだ」って、おっかさまこと 取り押さえたんだと。おっかさま、
「まさか、泊まりだと 思ってた」って言った。おとつつあま、娘らに 聞いた。

「おめえらんとこさ、毎晩 こうゆう 化けもん 出たのか」すっと、お玉 言ったと。

「おれがとこさ 出ねえけど、姉ちゃんとかさ 毎晩毎晩 出て、そうやって いじめ
てた」

「このあま、ひでえ あまだ。おれが いねえ 間に、おめえは 毎晩毎晩、こうゆう 継
子いじめしてたのか。そういう 鬼みてえな嬢あは 置くこと できねえ、きょうかぎり
暇 やっから、家 出てけ」って言ったと。すっと、おっかさま、

「ほんじ、悪かった」って。それで、

「おれ、わが娘 かわいくて、継子のこと ひどくして すまねえかった。これから め
んどうみて、どこまでも おれの娘と 同じぐ育てっから、今夜のどこ、世間さ 知らせ
ねえで 勘弁してくろ」って、謝ったと。

それから、継子も いじめられねえで いがくなって、片付いたんだと。

こんじ、おしめえ

《注》

- (1)おどめ 赤ん坊。
- (2)ひとり 一人で。
- (3)トーライ 継母。後妻。継母は雷を十集めたほど恐ろしい存在だとの意。
- (4)おっかさまが墓 おっかさまの墓。「が」は名詞を修飾する「の」の意の助詞。
- (5)いがく 大きく。基本形はイガイ。
- (6)てのごい てぬぐい。
- (7)姉ちゃまが後 姉ちゃまの後。「が」は名詞を修飾する「の」の意の助詞。
- (8)世間前 世間体。
- (9)ぶん抜けていた (底が) 抜けていた。基本形はブンヌケル。
- (10)お玉がな お玉のもの。「がな」は「～のもの」の意の準体助詞。
- (11)こうたに こんにに。

- (12)ちいんと 少し。
 (13)おでんべったら みそおでん。こんにやくの田楽。
 (14)首った 首すじ。
 (15)ちく抜いて うそをついて。基本形はチクヌク。
 (16)つっとおしたり 突きとおしたり。突き刺したり。基本形はツットオス。
 (17)とぼ 雨戸。家の出入口。

5 カーテンシアター「けちくらべ」＊〔再話（茨城方言版）：七絃の会〕

＊原話・原画は『けちくらべ』（文・小野和子、画・大和田美鈴画、教育画劇、1997年）。

＊再話の茨城方言は、語り手によって一部を変更。以下は、変更された語りによる。

数字は、紙芝居の絵に対応した順番を表す。

1 むがし

けちんぼ けちべえつう けちの名人が いで、 んで
 「世の中に おれがほど けちなやづ いんめえ」
 って、えっづも 自慢 こいでたんだど。

けちべえさん^げ家の隣は うなぎ屋で そっから ぶーん
 ぶーんって うなぎの ええ においがしてくんだ。
 んでも、この けちべえさんちゃ うなぎ屋の
 うなぎ 買ったごど ねえがったど。

2 んで けちべえさん、 うなぎのにおいで
 「んめえ、んめえ」って、飯 食って、
 「こおすりや、おかず いんねえべ」って、
 にーご にーごして すまあしでいたと。

これに きづいだ うなぎ屋さん、
 「けちべえさんよ、うなぎの ^{だい}におい代
 払って くんちよ」って のっこんでった。
 すっど、

3 じゃら じゃら じゃら じゃら
 けちべえさん 銭が へえった ふくろ
 ぶんまあしで、
 「ほれ、^{だい}におい代 やっぺ」って。
 銭の^{おど}音が ^{だい}におい代 だっちけ。

うなぎ屋さん これには まいっちゃって、
しょぼくれて 店さ けえってっただ。

- 4 この はなし 聞いて、やっかんだのが
隣町の しわんば しわべえさん。
こっちも けちの チャンピオンだ。
「よおし。まげで いられっか」って。

自慢の 扇子 持って、じぎに
けちべえさん家さ やって 来だ。

- 5 けちべえさん家さ 来てみっと まっくらだ。
「ははあ、灯り けちっで やがら」
しわべえさん そろーがに うちん中さ
へえってった。

- 6 すっと こっつあむい 部屋で、すっぱだかの
けちべえさんが でえーんと あぐらかいでだ。
「そおだどごにいで、かぜ ひいだら、そん
しちまあべ」って、しわべえさん ゆった。
「なあに、かぜどごが 汗 出で しゃあんめえ。
ほれ、てんじょう みで 見ろ」
しわべえさん ゆわれで 上 見だら…。

- 7 「うわ。わ わ わっ わっ わっ。 うわっ」
いがあい 石、けちべえさんが 頭の
上で、ぶーらん ぶーらん してんだど。
いまにも おっこちそおだ。
「この 石がよ、いま ぼっこちっか いま
ぼっこちっかって、いやあ、汗 出っぺ。こおすりゃ、
ひ なんか いんねえ。あづい あづい」
けちべえさん 汗 ぬぐったど。

- 8 しわべえさん、自慢の扇子 おんだしで、
「そおだに あづげりゃ、これで あおいでやっから」
ほおれ ぱふ ぱふ ぱふ
半分 開げで あおぎだしだど。そんで、
「とぎに けちべえさんよ。この 扇子

もお 十年も 使ってたど
「ほお。そおげ」
「半分 開^{ひら}げで 五年 使ったっぺよ。
もお 半分で 五年 だっぺ。
あわせで 十年ちゅう わげだ」
「ほお。そおげ」

- 9 ぐりっ ぐりっ ぐりっ
けちべえさん 扇子 かまえて、
ごおせに 首 ぶんまあしだ。
「こおしで、首 ぶんまあしでみろ、扇子
おっちゃれねえ。十年どごが 一生
使えっぺ。首っちゃ いぐら 使っても
へんねえし。いい 運動に なっど」

ぐりっ ぐりっ ぐりっ
ぐりっ ぐりっ ぐりっ

- 10 しわべえさん いじやげで、帰^{けえ}っぺどしで、
「ちょっくら 灯^{あが}り かしでくんちよ。
こおだに くらくちや、はぎもん めえっかんねえべよ」
すっと、けちべえさん
ぼお ひつつかんで…

いぎなり しわべえさんが 頭^{あたま}
ぼがりっ。

- 11 しわべえさん「いでででで。
目がら 火が でだっぺよ」
すっと、けちべえさん しゃあしゃあど、
「その 火で、はぎもん めえっけで
お帰^{がえ}りなんしよ」って ゆったど。

- 12 しわべえさん あっけなぐ 降参して、
おであげしちまって、けちべえさんの
弟子に なったと。んで、
「節約。節約」つって。
いまでも ふたりは けちの 勉強
こみっちら やってたど。

みんなも ひとつ けちの 勉強
やって みつけ。

おしめえ

6 「鼻取り地蔵」〔作話：吉田孝子氏〕

*鼻取りについて…田植えの前になると、水を張った田んぼで、馬鍬という農具を馬に引かせて代掻きをしました。この時、馬のくつわに長い棒を付けて人間が先導しました。主に女性や子供の仕事とされていました。（作話者注）

むがしむがし あったじな。 双葉の両竹⁽¹⁾に 貧乏だげんちも⁽²⁾ 信心深い 爺さまど 婆さまが いたんだど。 ふたりは ちーんとぼっかしの 田んぼど 畑 耕して 仲良く 暮らしていただ⁽³⁾たど。

ある春の ぬぐい 日の事、 爺さまは、
「今日は 天気もいいし、 どーれ、 田んぼさ 行って 代掻ぎ してくっかな」って 言⁽⁴⁾ったど。 ほしたら 婆さまが、
「あいやあ なんだべー⁽⁴⁾。 おれ 今日は 町ちゃ 用足しに 行がねっかなんねのに。 鼻取りしてやらんにべした⁽⁵⁾」って 言⁽⁵⁾うんだど。 んだげんちも、
「なんしゃ⁽⁶⁾、 ちんとぼっかりの 田んぼだもの 造作ねえわい」どって 馬 引っぱって 出⁽⁷⁾だして 行⁽⁷⁾ったど。

爺さまは 田んぼに 着くど 早速 代掻ぎ 始⁽⁸⁾だ⁽⁸⁾ったど。 んだげんちもな、どう ゆう 理由だが 馬が 言⁽⁹⁾う事 きいでくん⁽⁹⁾にんだど。 爺さまが なんぼ
「ほらほら まっすぐ 歩げ」って 言⁽⁹⁾っても 止まってみたり、 横⁽⁹⁾つちよの方に 行⁽⁹⁾ったりするもんだから うんと 難儀⁽⁹⁾して⁽⁹⁾いた⁽⁹⁾た⁽⁹⁾ど。

ほうした⁽⁹⁾つけにな、 何処⁽⁹⁾から 来⁽⁹⁾た⁽⁹⁾んだが 見⁽⁹⁾だ⁽⁹⁾事⁽⁹⁾のねえ ちんちゃこい⁽⁹⁾ 男⁽⁹⁾童子⁽¹⁰⁾が 立⁽⁹⁾ってで、
「爺さま、 おれ 鼻取りしてやっかー」って 言⁽⁹⁾う⁽⁹⁾んだ⁽⁹⁾ど。 爺さまが
「おめえみでえな 童子の できる 仕事⁽¹⁰⁾でねえ」って 言⁽¹⁰⁾った⁽¹⁰⁾んだ⁽¹⁰⁾げん⁽¹⁰⁾ち⁽¹⁰⁾も、 男⁽¹⁰⁾童子⁽¹⁰⁾は 鼻棒 たんが⁽¹¹⁾った⁽¹¹⁾が⁽¹¹⁾ど 思⁽¹¹⁾ったら ジャブジャブど 田んぼ 入⁽¹¹⁾って⁽¹¹⁾来⁽¹¹⁾て 早速 鼻取り 始⁽¹¹⁾だ⁽¹¹⁾った⁽¹¹⁾ど。

ほうした⁽¹¹⁾つけに、 あらほど 言⁽¹¹⁾う⁽¹¹⁾事⁽¹¹⁾ き⁽¹¹⁾か⁽¹¹⁾な⁽¹¹⁾か⁽¹¹⁾った 馬が 童子の 後⁽¹¹⁾っ⁽¹¹⁾し⁽¹¹⁾ょ ヒョイヒョイど くっ⁽¹¹⁾付⁽¹¹⁾いで 行⁽¹¹⁾ぐ⁽¹¹⁾んだ⁽¹¹⁾ど。

こうして 爺さまは 童子に 手⁽¹¹⁾伝⁽¹¹⁾ってもら⁽¹¹⁾った⁽¹¹⁾も⁽¹¹⁾ん⁽¹¹⁾だ⁽¹¹⁾か⁽¹¹⁾ら 代掻ぎの 仕事、 昼の 前⁽¹¹⁾に すっか⁽¹²⁾ど⁽¹²⁾ でが⁽¹²⁾し⁽¹²⁾っ⁽¹²⁾ち⁽¹²⁾ま⁽¹²⁾った⁽¹²⁾ど。 爺さまは たいそう 喜⁽¹²⁾んで 帰⁽¹²⁾り⁽¹²⁾仕⁽¹²⁾度⁽¹²⁾しながら 童子に 言⁽¹²⁾った⁽¹²⁾ど。

「ありが⁽¹²⁾ど⁽¹²⁾な⁽¹²⁾あ。 お前⁽¹²⁾も なんぼが 腹 減⁽¹²⁾った⁽¹²⁾べ。 おら家⁽¹²⁾さ 来⁽¹²⁾て まんま 食⁽¹²⁾って⁽¹²⁾行⁽¹²⁾げ」

ほしたら 男⁽¹²⁾童子⁽¹²⁾は 泥足⁽¹²⁾のまんま にこにこ⁽¹²⁾どして 立⁽¹²⁾って⁽¹²⁾た⁽¹²⁾ど。 ほれが⁽¹²⁾ら 家⁽¹²⁾に 向⁽¹²⁾って 歩⁽¹²⁾き⁽¹²⁾始⁽¹²⁾だ⁽¹²⁾つと 童子も 馬の 後⁽¹²⁾っ⁽¹²⁾し⁽¹²⁾ょ⁽¹²⁾ん⁽¹²⁾な⁽¹²⁾って くっ⁽¹²⁾つ⁽¹²⁾い⁽¹²⁾て⁽¹²⁾来⁽¹²⁾た⁽¹²⁾ど。

んだげんちもな、家に着いた時にはも一は⁽¹⁴⁾ 童子の姿なかったど。爺さまは『はあできてえだなあ⁽¹⁵⁾』って思って今来た道引っ返してみたんだど。ほしたら途中からちんちゃこい泥んこの足あどあったんだど。ほのあどずーっと訪ねで行ってみだっけに地藏堂の中まで続いでいだど。

爺さまは、

「あいやー、お地藏さまが童子の姿になっておら家の鼻取り手伝ってくっちゃんだなあ。ありがてえなあー」って言って厚ぐお礼したど。

やがてこの話は村中に伝わってこのお地藏さまを「鼻取り地藏」って呼ぶようになったんだど。

ほれがらはな村の人達も何事がある度に お参りするようになったんだちけど⁽¹⁶⁾。こんじえおしめえ。

《注》

- (1) 双葉の両竹 福島県双葉郡双葉町両竹。
- (2) 貧乏だげんちも 貧乏だけれども。
- (3) 暮らしていただった 暮らしていたのだった。
- (4) なんだべー なんだろう。
- (5) 鼻取りしてやらんにべした 鼻取りしてやれないだろうよ。シタは強調の意。
- (6) なんしゃ なあんだ。大したことではないといったニュアンスを含む表現。
- (7) 出だして 出かけて。基本形は「でだす」。
- (8) 始だった 始めた。基本形は「はだつ」。
- (9) ちんちゃこい ちいさい。
- (10) 男童子 男の子。
- (11) たんがった 持ち上げた。つかんだ。持った。基本形は「たんがく」。
- (12) すっかど すっかり。全部。
- (13) でがしちまった 終わらせてしまった。
- (14) も一は もう。最早。「モハ」とも。
- (15) きてえだなあ 不思議だなあ。奇妙だなあ。
- (16) なったんだちけど なったのだということだ。

7 「半日村」※ [福島浜通り方言訳：白川ケイ子氏]

※原話は斎藤隆介作・滝田二郎絵『半日村』（岩崎書店、1980年）。

*語る前に、この「半日村」の話は、昔話とは違うのだけれども、聞いてみると、（東日本大震災・東京電力福島第一原発事故の）復興につながる、ぐっとくる場面があって、今日はそれを語ってみたいと思う、との前置きがあった。

うーう、さみ さみ。

今っから半日村ってゆう話 しっかりと 思ってんだげんちょ、ほーいづ 思っただけで 身ぶるい 出る。

ほごの村は いぎなし⁽¹⁾ 寒い 部落なんだ。な一して 寒いかってゆったら ほしい
づは 後ろさ^{うっしよ} 高え^{たげ} いぎなし^{たげ} 高え 山 あって、東から お天道様^{てんとう}が 出たって、や
ま 高^{たが}一くって お天道様の 顔 見らん^{てんとう}にえんだ。

昼飯^{ちゆうはん}ごろんなって やつとごさつとご 高^{たが}一く のぼった お天道様^{てんとう}、 山の上から
ぱ一つと 光 当でる。 ほうしつと ほれ 鳥は歌いはだづ⁽²⁾し 花も笑いはだづ⁽³⁾。
童^{わらし}らも 家の前^{いんめ}がら はねてきて、 ほごまったり⁽⁴⁾ ぎすつたり⁽⁵⁾ せつなぐ⁽⁶⁾なっ
てる。 なんて ゆつたつて ほれ 嬉しがってんのは、 田の稲だ。あかるい 光 い
ぎなし 浴びで さやさやさやさや 葉っぱ ゆるがして 水 吸い上げはだづ。 んだ
けんちよも だめだ。 おへらつた⁽⁷⁾あど 晩方さなつて、 晩方さなつと 前^{めえ}のおっ
きい 堤^{つづみ}がら ひやつこくて 寒^{つづみ}い 風、ビューツ ビューツと 吹いてくつぺし。今
度 かぜ 吹いてきたら ドビドビドビドビつて 堤^{つづみ}さ 波 立ち始める。ほうやつたら
はあ 鳥は 帰^{けえ}ちまあし 花も 笑あ^{わらし}の やめる。童^{わらし}らも はあ 家^いさ 帰^{けえ}ちまう。
なんてゆつたつて もごいそうなのは⁽⁸⁾ 一晚^{しとばん}じゅう 田さ 立^{つづみ}てなきやなんねえ 稲
だ。 稲は 風 サワサワ 止むも止めつぺし 水 吸い上げんもの 止める。 ほおや
つて ブルブルブル 稲も 縮^{はんび}まって ふるえ出す。 ふんだもの 半日村^{はんび}の 米な
んか いいわけねえわ。 なんぼしたつて ほかの部落の 半分きり とんにえかつた。
んだがら ほごの 人^{したち}達は み一んな 青い顔して やせつこけて がおつてだと。 ほ
この村さ 一平つてゆう 名前^{なめえ}の 童^{わらし}いだ。 ある晩 一平のと一ちゃんと かあちゃ
ん 囲炉裏^{いろり}さ あたりながら なづぎ⁽⁹⁾ くつつけて しゃんべくつてだと。

「あ一あ おらの村は なんちゅう村だ。あそごの山せえ ねがつたらなあ。だめだべえ、
山は 山だべ。動か^{いご}さいる わけねえし 不幸^{ふつしやあ}せな村さ 生ま^うまつちやと 思つて あぎら
めるつきり ねえなあ」

一平は ほの あしたの朝、ふぐろ たんがいで⁽¹⁰⁾ 山さ 登つた。てつぺんさ 着く
と てつぺんの であろ⁽¹¹⁾ ほつちくつたり ふぐろさ いつちえ 山 落ちてきた⁽¹²⁾。
落ちてくつと 前^{めえ}の 堤^{つづみ}さ ぎ一つと 空^あげた。空^あげ終わつと まだ 山さ ふぐろ た
んがいて 登つた。まだ であろ ふぐろさ 入^いつちえ 山がら 落ちて、また ぎ一つ
と 堤^{つづみ}さ 空^あげた。空^あげ終わつと ちようど 昼飯^{ちゆうはん}時^{どき}だつた。ほうしつと 鳥は チッ
チと 鳴きはだつし 花も 笑いはだつし 童^{わらし}らも 家の前^{いんめえ}がら はねてきて、 ほごま
つたり 遊び始めた。

一平 おかしなこと してるもんで、村の 童^{わらし}らは
「なした、なした。なんじよしてんだ」つて 聞いてみだど。
「う一 おれ あの山 けつぺずつて⁽¹³⁾ 堤^{つづみ}さ んめちまあがともつてんだ」
「一平のやつ なに へでなし⁽¹⁴⁾ かだつてんだべ。なに ばがなごと ゆつてんだ。あ
だまでも くるつたんでねえのが」

童^{わらし}らは みんな 大笑いした。

んだけんちよも 一平は まあだ ふぐろ たんがいて 山さ 登つて てつぺんの
土^{ちち} ふぐろさ 入^いつちえ、落ちて ほしい まだ 堤^{つづみ}さ ぎ一つと 空^あげた。空^あげおわつ
と まだ 山さ 登つた。

ほんなごと おかしなごと してるもんだがら 村の 童^{わらし}ら
「なした なした。なんじよしてんだ」つて。

みんな 来て、ほんのうち 一人 二人 ふたんじえ まねごとしと、三人 四人、三人 四人 まねことしと、五人 六人、 なんだが やんねと ながまがら あまされっちまあような 氣いして、みーんな ふぐろ たんがいて 山さ 登って、てっぺんの 土 取ってきて、泥 ざーっと 前の 堤さ 空けた。

おどならは ほいつ 見て、みんな 笑って、
「山 動されるわけ ねえべ。なに ばがなごど やってんだ」って はじめは 笑ってたけんちよ、ほんのうち

「ばーかだなあ ふぐろで はがいがねえべえ⁽¹⁵⁾。ほんなときは もっこ 使え。もっこ俺んちがら 持ってんげ」なーんて ゆってくいる おどなも 出てきた。

「ほっちくりかた⁽¹⁶⁾ こうやんだ」「けっぺづりがだ⁽¹⁷⁾は こうやんだ」って、教えてくいる おどならも 出てきた。

毎日 毎日、童らが みんなで ほんなごと してるもんだがら、山は しとつても 低ぐなんねかったけんちよ、ほんのうち 一人 二人、ふたんじ やりはだつと、三人 四人、五人 六人、やんねと なんだが 村づきあいわりいような 氣して、おとならも 仕事の 暇 めつけては 山さ 登ったり 落ちたり 一生懸命 みんなで やりはだつた。ほれで 毎日 毎日 ほんなごと してるうち なあんだが この頃 お天道様 出んの 早ぐなったような 氣いしてきた。ほうしたら ほれ みんな 元氣いぐなって、

♪はあーああ 朝も はよから よーお
もっこを かついでない あ やろやっかない

なあんて 歌 歌あ 人らも 出できて せっせこせっせこ 山あ 登ったり 落ちたり してたあと。毎日 毎日 ほうやってたら、なんだか 山あ 低ぐなったような 氣いした。

ほれから 何年も 何年も たった。大人らは みんな 死んじまって あの世さ いっちまった。一平だり 一平の仲間の 童らは みんな おどなさ なっちまった。一平の 童も おとなになった 人達も 仕事の 暇 みては 山さ 登った。一平だり 一平の仲間の 童らも 暇ながら 遊ぶかありさ 山さ 登った。

ある朝だった。

「コケッココー」って 一番などり 鳴ぐのと いっしょに パーッと お天道様 まぶしくなって まちっぽくなって⁽¹⁸⁾ 出てきた。ほうしたら 鳥は 歌いはだつし 花も 笑いはだつし、一平だり 仲間のおとなだり 一平の童だり 仲間の童らも みんな 家の前がら はねできて、せえぎり 朝日 浴びて、

「あっははははは あっはははは」
と笑った。

山は 半分こになった。半分こになった 堤は 田さ なった。田さは 青々ど 稲植いらっちえ サワサワど ゆらいでた。

ほれから 半日村は 一日村って 呼ばいるようになったど。 こんじえ おしまい。

《注》

- (1)いぎなし とても。たくさん。「いきなし」とも。
- (2)歌いはだづ 歌い始める。「～ハダツ」は「～し始める」の意。
- (3)花は笑いはだづ 花は咲き始める。
- (4)ほごまったり (子どもが) ふざけまわったり。基本形は「ほごまる」
- (5)ぎすったり ふざけたり。基本形は「ぎする」。
- (6)せつなぐ うるさく。基本形は「せつない」(形容詞)。「せづない」とも。
- (7)おへらった 陽が沈んだ。
- (8)もごいそうなのは かわいそうなのは。基本形は「もごい」(形容詞)。
- (9)なづぎ ひたい。ナツキとも。
- (10)たんがいで 持って。基本形は「たんがく」。
- (11)でえろ 泥。土。
- (12)落ちてきた 下りてきた。基本形は「おちる」。
- (13)けっぺずって 削りとって。基本形は「けっぺずる」。
- (14)へでなし つまらないこと。
- (15)はがいがねえべえ はかどらないだろう。
- (16)ほっちくりかた ほじくり方。掘り方。
- (17)けっぺづりがだ 削り方。
- (18)まちっぽくなって まぶしくなって。基本形は「まちっぽい」。「マジッペエ」とも。

8 茨城方言と共通語による「茨城方言ミニ講座」

皆さま こんにちは。わたくし ○○と申します。ことばが こんなにきれいなので、茨城弁はしゃべれないんですけど、いっしょけんめ がんばります。〈会場、笑〉

皆さんに お会いできると思って 今日 おしゃらぐしてきたの。〈会場、笑〉

ところでよ、みんな 知ってっけ？今年の魅力度ランキング。

知ってる？ 茨城は 何位？

残念、そう、残念だったね。また今年も 最下位だったの。七年連続 10回の受賞だそうでございますねえ、えー。

ちょっとね わたし 聞いてみたいんですけど、皆さん 魅力度ランキングで 最下位って 「別に かまねどー」って、「気にしねー」と思ってる人 どのぐらい いらっしゃいます？

「いやっ 一つでも 上げてもらいたい」ってゆう人は どのぐらい います？

一つ、一つつつわけには いかないよねえ、ほんとにねえ。

先生んとこの 群馬は 45位。〈会場、笑〉 で、佐賀が で 不思議ですね、佐賀が その次なんですって。で、最下位が 茨城でしょう。

もう一つ、気になるとこ ないですか？〈会場から、栃木〉 栃木。43位。

ねえ、まあ、目くそ 鼻くそだっぺよね。〈会場、笑〉 大した変わりはない。大した変わ

りはない。なんで そんな ちがうのかなって、でもねえ。近所でもねえ 違うのは な
ぜか。「U字工事」が いっからけ？〈会場、笑〉

そうでもない。やあ、うちの「かみなり」、がんばってもらあねえと 困っちゃうよねえ。
そう。まあね、いろんな話 今ね 聞いてるんだけんでも、あのう みんなでねえ、ちょ
っと わたしの場合は 参加型なので、これから ゆうのを みんなで いっしょに や
ってもらいたいんですけど。

実は、あのう あたし これでも ちょっと 働いてたんですよ、こないだね。そした
らば、あのう 隣の、わたしの仕事は 要するに 受け付けをして その 証明書を渡す
ってゆう 仕事なんだけど。キンコンカンコーンってなるから、「んじゃあ ^{はあ} 早く 終わり
にしっぺえ」なんて かたづけてたら、や おじんつあまがよお なんか こ 来たんで
すよ。

「あっ、受け付けてくんちええ」って 来たんですよ。

したら、隣のしとが

「はあ きっちまあべ やっちまあべ」って ゆうんですよ。

こ [れ] わかります？「ま は きっちまあべ やっちまあべ」って、わかります？
〈会場から「うん」〉

ん、さすが 茨城でございますね、わかりますね。

あたしは、「はーっ」って 言っちゃいましたけど。

そう、「きっちまあば」ってゆうのは、「来てしまったら、ねっ。もう 来てしまっ
たら やっちまうべ、もう それ やってしましましょう」。ねっ、「やっちまあべ」って
ゆうのはね だいたい [意味が] 二つぐらい あると思うんですよ。あのう 仕事なん
かだと 「あー やっちまあべ」ってゆうと 「まあ 終わりまで やってしまおうよ」
って、「みなさん やってしまおうよ」っていう 意味。それから もう一つは 「物を や
る」、うん 「渡してしまおう」。「あっ、おめえに これ やっから」みたいな感じの 「や
る」ってゆう ことばで、ま だいたい 二つぐらいの 意味は あると思うんですけど、
まあ 来てしまったら、もう わたしの 仕事の場合は 「その 証明を やってしまお
うよ」ってゆう 話ですね。

で、ここで みなさんで ちょっとね 練習してみたいと 思います。

「きっちまあば やっちまあべ」

この あの ニュアンスですねえ。この イントネーションに 気を付けて ゆってく
ださいね。

〈抑揚が少なく感情が入らない言い方で〉「きっちまあば やっちまあべ」じゃないんです
よ。「もう 来ちゃったら やっちゃおう」ってゆう 心を込めて ゆってくださいね。い
いですか。

せーのっ！

〈来場者とともに〉「きっちまあば やっちまあべ」

そう、あ いいですね。前の おかあさん、すごい イントネーション すばらしいで
すねえ。〈会場、笑〉なんかもう もろ ^{いばらぎ} 茨城弁の イントネーション、すばらしいです
ね。あのお話、いろいろ 聞いてたんですけど、わたし こないだ あのう 柿の木に
登ったんですよ。あの ^{かき} 柿、取っぺと思って。でも、ちょっと あの 柿の木っちゃ あ

の すべっぺよね、ちょっと あの。 あと 枝なんか おっかけちまあんだよね。そう。
〈会場、笑〉

で、この体重で 乗ったから、やっぱ ちょっと やばかったみたいで 取っぺともったんだよ。でも、そろーかに やったんだよねえ。そろーかに。もう 全身の 筋肉を 使いながら、そろーかに こうやって もぎってたんだよね。

したらば、残念 すべって ぽろげっちゃったんだよねえ。もう ぽろげっちゃったら 大変。もう 青なじみは そこらじゅう でぎっちゃやし。で、きょう 来たら、来たでしよ。そしたら あそこの ロビーで カルタが あったのねえ。したら そこにねえ、こう あのう、ちょっと あのね

「しゃあんめえ 青なじみぐれえは しゃあんめえ」とかって。〈会場、笑〉

ええ そう、しゃあねよねえ、これ ぽろげっちゃったら。

で、「ぽろげる」ってゆう ことばも、なんか 皆さんで ちょっと やってみたいんですけど、「ぽろげる」ってゆうのを こう 場面的にやってみると、 現在・過去・未来みたいなことで やってみると、

「ぽろげる」 今 まさに ぽろげようとしている、「ぽろげる」。

「ぽろがす」 もう 自分のところに もう ぽろがす。

で、ぽろげてしまった 「ぽろげだ ぽろげだ」

Are you ready? OK? 〈会場、笑〉

「ぽろがす」、あっ、「ぽろげる ぽろがす ぽろげだ」。

いいですか？大丈夫？大丈夫ね。 じゃ、いくよー！せーのっ！

〈来場者とともに〉「ぽろげる ぽろがす ぽろげだ」

はい、この時ですね 皆さん あの もうちょっと 大きな 声で やっていただいていいですか。

人差し指 出していただいて、あの じなっていたいただいても がなっていたいただいても結構です。

〈大げさな調子で〉「ぽろげる」って、こう 言ってください、いいですか？せーのっ！

〈来場者とともに〉「ぽろげる ぽろがす ぽろげだ」

そう。いかにも もう「ぽろげだー」っていう 感じが出てて よかったと思いますねえ。

で ねえ、やっぱり かるた ちょっと 見てたんですけど、あのう さっき おっしゃってた 「ざぷとん」？「ざぷとん」なんて言いますよねえ。実は うちの父は 「ノブオ」ってゆうんですけど、まありからは 「ノブちゃん」って 呼ばれてたんですよね。

〈会場、笑〉

言いません？「ノブちゃん」。

〈来場者から、「ゆうよ」〉

ゆうよねえ。ゆうよねえって、お父さんに ため口 きいちゃいますけど。そう ゆうんですよね？

〈来場者から、「ゆうね」 笑〉

で、「ノブコちゃん」ってゆう人は お父さんから、「ノブコ」って ゆわれてたんですよ。なんか すごく 不思議。でも、その不思議なことは なぜか わたし わかんない

ですけど、先生に 聞かなくちゃいけないんですけど。ねえ、なんで そうゆふうに 呼ぶんだろなあってゆう 感じしますよねえ。

あとね、あのう 今日 考えてきたのは、あのう 実は あのう 田んぼが あるじゃないですか。あそこに こう、うちも 農家やってたんで、こう [足を] 入れると ズブズブって 行っちゃうじゃないですか。あれ、皆さん 何て言います？

〈来場者から「ウンノマル」〉〈会場、笑〉

「うんのまる」、そう、よく知ってる。もう 図星でございます。

今日は、「のまる」ということばで 練習をしようかなあと 思って 持ってきた。

知ってます？聞いたことない？聞いたことない、教えます。はい。

「のまる」、だいたい あの イメージ的にはね、こう ズブズブっといった 田んぼからね 足がねえ、引き抜けなくて、「のまっちまあ のまっちまあ」ってゆう感じが 「のまる」てゆう イメージなんですけど。

え、「のまる」、それから もう一つは 「おんのまる」。言いますよね。「おんのまっちまっただあ」とかね。

次は 何が 出てくると 思います？

〈来場者から「ブンノマル」〉

そう、ここの お母さん方^{がた} もう バリバリに 茨城弁が。〈会場、笑〉

もう 「ぶんのまる」でございます。だんだん ひどくなってきました。「あっ、おんのまっちだあ」みたいな、「あっ、のまっちだ」「あっ、おんのまっちだ」「あっ、ぶんのまっちだあ」ってゆう 〈会場、笑〉 そういう 感じですね。イメージ、いいですか、これ イメージ 大事ですからね。

「のまる おんのまる ぶんのまる」。いいですか、いきますよ。せーのっ！

〈来場者とともに〉「のまる おんのまる ぶんのまる」

はい、そうです。でもねえ、もうちょっと 威勢よく 言ってみましょうよ、ねっ。

「ぶんのまっちだあ」って ゆって。「ぶんのまる」って ゆわないですね。〈大げさな調子で〉「いやあ おれげの_____ ぶんのまっちだあー」ってゆう 感じですから。そうね、〈おだやかな調子で〉「ぶんのまる」なんて ゆってる場合じゃないんですよ。

いいですか？はい、もう一回 いきます。せーのっ！

〈来場者とともに〉「のまる おんのまる ぶんのまる」〈会場、笑〉

そう。もう 前のほうは ぞろぞろと もう ネイティブの方が 多いようですけどもね。そう、そうゆことも ありましたね。えっ、そうです。

でねえ、皆さんに いろいろねえ あの ご紹介したい あれが あるなあっともって、書いてきたんですけどねえ。

あのう、あの 何ですかね、さっきねえ あのう あれに ついてたのは、その なんだっけ、えーと 先生が 紹介してくれた 茨城の方言じゃないやつ。

え、名取市ですかね、名取市のやつを ちょっと。「よっぼりしい あさ おぎらんねえ こどもだち」つんだよね。「よっぼり」。

茨城の場合だ [と]

〈来場者から、「あさねぼう」〉

そう 「よっぼりの 朝寝坊」、これ ふつうですね。「よっぼりの 朝寝坊」。これ

は、だいたい 標準語で 出てきます。茨城弁で 言うと、どうゆう 言いますか？はいっ。
〈来場者に答えを求める〉

〈来場者から、「よいっばりの あさねぼう」だ〉

「よいっばり、よいっばり。よいっばり あさねぼう」。あっ、じゃあ 〈複数の来場者からの声〉 それ、早く 言ってるだけ。〈会場、笑〉

そう、でもね あの その 早く ゆうってゆうのも だいたい 茨城弁の 特徴ではあります。今日は わたし、ゆっくり 話し してますけれども、通常 他の人と 話す時って、「そうだとゆうたって あることあんめえよなあ」なんて、ねえ。「あんたが そうゆこと ゆうからがっぺよ」って ゆっちゃうと まるで 喧嘩してるように 聞こえるんですよ。喧嘩してるわけでも んー なんか ものすごい その人の 攻撃してるわけでもないんですけど、何となく そうゆふうに 聞こえる。そ、茨城弁の特徴って そんな感じですよ。え、んー。ときどき あのう だんなさんに おこられるとか なんか ゆってますけど、はい。ですから、「宵っ張りの 朝寝坊」は標準語。「よっ…」

〈来場者から、「よっばり坊の 朝寝坊」〉

「よっ、よっばり？」「よっばり？」茨城県は 「よっばり」ですか？「よっばりの あさねぼう」？

ん、「よっばり」ってゆうところは きっとね 向こうでは 「よっばり」。だから 茨城県の中でも あのう 「よっばり」つったり 「よっばり」ってゆってみたり、いろんなことばが こう 出てくる。ね、そこそこ 地域によって 若干 違ってくるってゆうのは ありますよね。はい。

えー わたくしが 聞いたところでは、「さらげっこ、んー なんだっけ。さらげっこ でっちゃった」ってゆうのが わからなくて、同じ地域の中でも、「さらげっこ でっちゃった」って。おとさん わかります？「さらげっこ」、わかります？ 〈来場者とのやりとりをしながら〉 んー。なんか つんのめって 転んじゃったみたいなの この 意味なんですよ。だから、「さらげっこ てる」って わかります？「さらげっこ てる」。えーとねえ、〔常陸〕大宮とか 常陸太田のほうでは 「さらげる」って ゆうみたい。転がる、こう なんか 転んだりすること、言います？「さらげる、さらげる」って。なまさらげを 聞いたこと あるんですけど。「バイクで さらげっちゃった」とか。あっ、やっばり そう 言います？なんか そうゆうみたいですよ。え、はい。

だから ほんとに あのう さっきも ねえ、一番最初に 目的とか、~~~~~とかって 言ってますけど、あのう ほんとに なくさないで いてもらいたい。えー、その地域の ことば。やっばり 今でも その コミュニケーションツールとして 使うのは もちろんですけども、こうゆものはですね、やっばり 若い方に、ねっ、覚えておいていただきたい。使わなくても やっ こうゆ おじちゃん こうゆこと ゆってたなあとか、こうゆことゆうと 通じるよーとか、そうゆうのをですね、あのう 下の人達にもね 伝えていけたらなと 思っております。

はい、ありがとございました。

9 「ぶったたきと半殺し」※ [再話：七絃の会]

※原話は茨城民俗学会編・永岡通之文『茨城のむかし話』（日本標準、1975年）。

むがし、山のふもとに 茶店があつて、じさま⁽¹⁾と ばさま⁽²⁾ くらしてたんだと。

ある晩方^{ばんがた}、雨でも 落っこつてきそうな 雲ゆきなんで、じいさま 早く 店 かたづけっぺ⁽³⁾と、表さ 出た。すつと、しばらく前に 茶 飲んでつた 旅の人が いんだと⁽⁴⁾。じさま、心配^{しんべい}して、

「あれえ なんだつぺ、そつたどこさ⁽⁵⁾ いて、どうしたんだ」って、聞いた。

「いやあ、今日のうちに 山ごえすつぺと 思つてたんだが、日が くれつちつたし、雲ゆぎも 悪い^{わり}んで、どうすつぺと、ひつ返^{かえ}して 来たんだ。んでも、泊まつとご なくて、こまつてんだ」って、旅の人 いったと。じいさま、

「んだな、今つからの 山ごえは、やめたほうが いがつぺ⁽⁶⁾。たちの悪い きつねめ⁽⁷⁾に 化^ばがされて、ひでえ目に あわされつかなあ。んだ、こつた⁽⁸⁾ ぼろ家 で よがつたら、泊まつたらがつぺ⁽⁹⁾」そんで、ばさまに、

「ばさまよ、泊めても いがつぺよな」って 聞いた。

「しゃんめえ⁽¹⁰⁾、うちん中^{なが}、しつちらがつてつけど⁽¹¹⁾、まあ 入れよ^{へえ}」旅の人、地獄^{じごく}で仏^{ほとけ}だつて、ざしきで ゆつくらしてたら、ばあさまが、

「風呂 わいだから、ひと汗^{あせ} 流しな」って、迎え^{むげ}にきた。

「いやあ、先に 風呂 もらうわけにはいがねえ」って、旅の人が いうと、

「いいがら、遠慮^{えんりよ}しねえで 入れ^{へえ}」って、ばさま、風呂 すすめんだと。

旅の人、さら湯⁽¹²⁾さ 入^{へえ}らしてもらつて、いい気分 で 湯さ つかつてつと、台所のほうから、何やら 話し声が 聞こえてきたんだと。

「ばさまや、今夜は ひとつ ぶったたきにすつぺ」

「そりゃ いいな。んでも、じさま、それよか 半ごろしのほうが いがつぺ」

「いいや、ぶったたきにすつぺ」

「半ごろしも うめえど」って。これ 聞いた 旅の人、

『いやあ、あの ふたつて⁽¹³⁾は、鬼^{おに}の夫婦^{ふうふ}に 違^{ちが}えねえ。こつたどこに いたら、ぶったたかたれで、半ごろしにされつちつて、頭から 食われつちまあ』

旅の人、ぶるぶる ふるえて、着物 ひつつかんで⁽¹⁴⁾、表さ とび出したと。あんまし あわてて、縁台^{えんだい}の 角っこさ ぶつかつて、ガラガラガタン ドシーンつて、すつ転がつちまつたつと。じさまとばさま、えがい⁽¹⁵⁾ 音 聞くと、たまげて すつとんできて⁽¹⁶⁾、旅の人ごと⁽¹⁷⁾ 助けつぺとすつと、

「ど、どうか、命ばかりは 助けてくろ。金も 着物も みんな やつから⁽¹⁸⁾」つて、まっ裸^{はだか}で 両手 合わせて おがんだと。じさまとばさま、何のこつたかわ がんねえで、ぼかんと しちまつたつと。んで、旅の人から わけ 聞くと、じさま、

「いやあ、そつたごとけえ。ここいらじゃ、ぶったたきつうのは、うどんのこつとで、半ごろしつうのは、ぼだ餅^{もち}のごつとだよ。おめえに、うめえもん 食わせ

っぺと 相談ぶってたんだ⁽¹⁹⁾」って、^{わら}笑った。

それで、 みんなで はら かかえて 大笑いになったんだと。 おしめえ

《注》

(1)じさま おじいさん。

(2)ばさま おばあさん。

(3)かたづけっぺ かたづけよう。

(4)いんだと いるのだと。

(5)そったどこさ そんなところに。ソッタは「そんな」、サは場所を表す語に付く助詞。

(6)いがっぺ いいだろう。

(7)きつねめ きつね。メは動物名の後につく接尾辞。

(8)こった こんな。

(9)泊まったらがっぺ 泊まったらいいだろう。「～タラ+イガッペ」が融合した形。

(10)しゃんめえ しょうがない。

(11)しっちらがってっけど 散らかっているけれど。基本形は「しっちらがる」。「シッチラカル」とも。

(12)さら湯 沸かしたてで、まだ誰も入っていない湯。

(13)ふたって 二人

(14)ひつつかんで つかんで。ヒツは接頭辞。基本形は「ひつつかむ」。

(15)えがい 大きい。「イガイ」とも。

(16)すっとんできて とんできて。急いでやってきて。基本形は「すっとぶ」。

(17)旅の人ごと 旅の人を。ゴトは人や生き物の目的語につく助詞。

(18)やっから やるから。

(19)相談ぶってたんだ 相談していたんだ。基本形は「相談ぶつ」。

10 「ばが息子の挨拶」

むがあし あったど。 あるとごろに ばが息子がいだんだど。

ある日のごど おどつつあまど ふたんじ 用足しに出がげだ^{けえ}帰りに 知り合いの人に 会ってな、

「いやあー、これはこれは いいお日和で 何よりでござんす」

と おどつつあまが 挨拶してるつつうのに ばが息子、こっちの方 むいで 鼻くそなんぞ ほじぐってんだど。それで 家^{うち}さ^{けえ}痛^{けえ}って おどつつあまが、

「おめえも はあ いい年なんだがら 挨拶ぐれえ ちゃんとできねばなんねど。挨拶は そうだに難しいもんだねえんだがら、『これはこれは いいお日和で なによりでござんす』と こう言えばいいんだ。わがったが」

「ああ そうが 『これはこれは いいお日和で 何よりでござんす』と こう言えばいいんだな。わがったわがった」

となって 出がげでいったんだ。そうすつと 向こうがら 大勢の行列が、ぞろぞろぞろ、

「やあ いっぺの行列が 来た。どれ おらの立派な挨拶 聞かせてやっぺ」

となって、でげえ声 はりあげで、

「これはこれは いいお日和で なによりでござんす」

と 挨拶したんだが、それは 葬式行列であった。行列の中がら 一人のおんつあま 出できで、

「なんだっぺ。今日は おら家のおじんつあまが 亡くなって、これがら お墓さ行くつうのに 何が いいお日和で 何がなによりだ。このやろめ」

と こっぴどぐ おごられたんだ。そこで 家さ帰って おどつつあまに話すと、

「ばがだなあ おめえは。そうゆう時はなあ 『このたびは、ご不幸なごどで 御愁傷様でございやす』と こうゆうんだ。わがったが」

「ああ そうが 『このたびは、御不幸なごどで 御愁傷様でございやす』と こういえばいいんだな わがったわがった」

となって 次の日 出がげで行ったんだ。そうすつと 今日也大勢の行列が ぞろぞろぞろ、

「いやあ 今日 今も いっぺえの行列が 来た。どれ この立派な挨拶 聞かせてやっぺ」

となって でげえ声 はりあげで、

「このたびは 御不幸なことで 御愁傷様でございやす」

と 挨拶したんだが それは花嫁行列であった。行列の中がら 一人のおんつあま 出てきて、

「なんだっぺ。今日は おれ家の一人娘が 今がら嫁入りするつう めでてえ日に 何が御不幸で 何が御愁傷様だ。このやろめ」

と こっぴどく おごられたんだ。そこで 家さ帰って おどつつあまに話すと、

「ばがだなあ おめえは。そうゆう時はな 『これはこれは 結構なごどで おめでとうございやす』と こうゆうんだ。わがったが」

「ああ そうが 『これはこれは 結構なごどで おめでとうございやす』と こういえばいいんだな わがったわがった」

となって 次の日 まだ 出かけて行ったんだ。そうすつと 大勢の人が 集まって わやわやわやわや。

「ああ いっぺえの人が 集まってる。どれ おらの立派な挨拶 聞かせてやっぺ」

となって、

「これはこれは 結構なことで おめでとうございやす」

と 挨拶したんだが そごは火事場であった。火が ぼうぼうぼうぼう燃えでいで、その中がら 一人のおんつあま 出できて、

「なんだっぺ。おら家が ぼうぼうぼうぼう燃えでるつうのに 何が結構で 何がおめでとうございやすだ。このやろめ」

と こっぴどく おごられたんだ。そこで、家さ帰って おどつつあまに話すと、

「ばがだなあ おめえは。火が ぼうぼうぼうぼう燃えでつ時は 桶さ水をくんで かげでやるもんだ」

「ああ そうが 火が ぼうぼうぼうぼう燃えてっ時は 桶おけさ水をくんで かげでやればいいのか わがったわがった」

となつて 次の日 まだ出がげでいったんだ。 っと 一軒の鍛冶屋があつて ふいごで 風を びゅうびゅうびゅうびゅう送おくつて やつと火がぼうぼう燃えて、熱あつい床とこさ 鉄のつけで とんちんかん とんちんかん はだぎ始はじまったんだ。ちょうどそごさ ばが息子 通りががつて、

「あらら。火が ぼうぼうぼうぼう燃えてる」

となつて そごにあつた 桶おけをもつて 川さいて 水をくんで、ジャーっと かげつちやんだ。そんで 鍛冶屋に こっぴどぐ おごられだんだ。家うちさ帰かえつて おどつあまに話すと、

「ばがだなあ おめえは。忙しそうに はだいでいる人を見たらば おめえも一緒になつて はだいで 手伝つてやるもんだ。(わがったが)」

「ああ そうが 忙しそうに はだいでいる人がいたらば おらも一緒になつて はだいで 手伝つてやればいいのか。わがったわがった」

となつて 次の日 まだ 出がげでいったんだ。(そうすつと) 一軒の家うちがあつて 夫婦喧嘩をして おどつあまが おっかさまのごど ばがぼが はだいでだんだ。ちょうど そごさ ばが息子 通りががつて、

「あらあ 忙しそうに はだいでいる。どれ おらも手伝つてやっぺ」

となつて 一緒になつて はだいだんだ。そうすつと おどつあまが くるつと 後ろ 振り向いて、

「なんだっぺ。おら家げの おっかあに 何すんだ。おら家げの大事なおっかのごど ばがぼがぼがぼが はだぎやがつて。このやろめ」

と こっぴどくおごられだんだ。そんで 家うちさ帰かえつて おどつあまに話すと、

「ばがだなあ おめえ。 喧嘩している二人がいたらば『おめえさまにも いろいろ言い分があつげんども、こちらさまにも いろいろ言い分があつげんども 今日のごろは おらに免じて』と言つて 二人をひきはなすもんだ。わがったが」

「ああ そうが 喧嘩している 二人がいたらば 『こちらさまにも 言い分があつげんども、こちらさまにも 言い分があつげんども』と言つて 二人を引き離せばいいんだな。わがったわがった」

となつて 次の日 まだ出かけて行つたんだ。そうすつと 野原があつて 牛と牛が角つのつき合わせて 喧嘩してんだ。ちょうど そごさ ばが息子が通りががつて

「あららあ これは大変だ」

となつて こっちの牛に向がつて

「おめえさまにも いろいろ言い分があつげんども」

まだ そっちの牛に向がつて

「おめえさまにも いろいろ言い分があつげんども 今日のごろは おらに免じて」
と言つて 一生懸命 引き離したんだが 牛には ばが息子の話が わがったんだが わがねんだが わがねけんども 二本の角で トーンと突き飛ばされて 大けがしちまつたんだ。
おしめえ

※参考文献：藤田浩子の語りを聞く会編（1996）『かたれやまんば —藤田浩子の語り— 第二集』（藤田浩子の語りを聞く会発行）、57～61 ページ

11 「カップレ餅」※ [再話：七絃の会]

※原話は鶴尾能子編『茨城の昔話』（三弥井書店、1972年）。

むかし、^{ひぬま}涸沼川⁽¹⁾にかかる^{いぬま}飯沼橋⁽²⁾のそばに、^{かしまや}鹿島屋⁽³⁾つつう造り酒屋、あったんだと。ここいらでは、一日に餅をつくつつう習わしがあったんだ。

ある年、日照りつづきで、畑のもんも田んぼのもんも、ろくにとんにやかっただと。それでも、旧暦の十二月一日になるつつうと、どうにか鹿島屋では餅つきやっことができたんだと。

土間で男ていら⁽³⁾が餅ついてと、いづのまにか、やせっこけたちんちえ⁽⁴⁾河童、臼んどこ、ぐるぐるぐるぐる、まわってんだと。餅つく男ていら、河童がじゃまでじゃまで、しょうがながったんだと。んで、番頭さんいじやけて⁽⁵⁾、「じゃまだ、じゃまだ。いしやれ⁽⁶⁾」ってゆっても、河童いっこうに、いしやんねえんだと。

そんで、だんなさん、

「ほうだ、餅やればけえっぺ⁽⁷⁾。餅やれ」ってゆったと。男ていら、つきあがった餅、河童にやっど、よろこんでけえってたと。

いく日がたったある日、河童のおとつあまや⁽⁸⁾って来⁽⁸⁾と、頭さげて、

「その、このさむさでみんな霜げちゃって⁽⁸⁾、もう食うもんがねえ時に、餅をめぐんでいただいて、たいへんありがたかった。そいで河童の身なので何にもお礼できねえけんども、このさきここいらのていらを、水難から必ずお守りします」そうゆうと、けえってったんだと。

それからここいらでは、川さつっぺえ⁽⁹⁾っておぼれることもねえくなって、河童のゆったとおり、水難にあうことがなかったんだと。

そんで、だんなさん、

「ああ、この前の河童がこの村守ってくれてんだ。あの河童のこと、お祀りすっぺ」ってゆって、伏見のお稲荷さんから河童稲荷⁽⁹⁾つつうお札むかえて、祀りこんだんだと。

今でも旧暦の十二月一日にはなあ、餅ついて水難にあわねえようにと、餅、川さポイツと⁽¹⁰⁾かっぼ⁽¹⁰⁾お^{そな}供えすんだ。

んで、河童にあげる餅だから、カップレ餅⁽¹⁰⁾ってゆうんだと。

《注》

- (1) 涸沼川 地名。源流は茨城県笠間市国見山で、城里町、笠間市、茨城町を流れて涸沼に流入する川。
- (2) 飯沼橋 涸沼川にかかる橋。茨城町内には上飯沼・下飯沼という字がある。
- (3) 男ていら 男の人たち。
- (4) やせっこけたちんちえ やせて小さい。

- (5)いじやけて 腹をたてて。基本形は「いじやける」。「イジヤゲル」「イジヤケル」
とも。
- (6)いしやれ どけ。どいている。基本形は「いしやる」。
- (7)けえっぺ 帰るだろう。
- (8)霜げちゃって 霜枯れして。霜が降りて作物がだめになってしまっ。基本形は「し
もげる」。
- (9)つつえって 落ちて。入って。基本形は「つつええる」。
- (10)かっぼって 投げて。基本形は「かっぼる」。

*このカッパレ餅の話は、茨城町の東ヶ崎さんという家に代々伝わっている話。鹿島屋
という酒屋は今はないが、今でも東ヶ崎家では伏見からお札を迎えお祀りしている。

Ⅲ 来場者アンケート結果

本節では、「聞いてみっぺ、語ってみっぺ、方言昔話4」来場者のうち、アンケートにご協力くださった71名の方々の回答結果について、アンケートの質問項目に沿って報告する。(アンケート調査票は、次節「Ⅳ 参考資料」)

アンケート結果の詳細を以下に示していくが、全体としては、かなり好評だったと言える。アンケートから、次のようなことが指摘できる。

- ・プログラム内容は概ね好評だったと言える。特に好評だったのは、複数方言の昔話で構成されていた「方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ」、視覚的にも楽しめるプログラムである「カーテンシアター」、来場者参加型の「茨城方言ミニ講座」であった。
- ・方言そのものの良さ、おもしろさ、方言の違いについて、質問2.で「方言の良さを感じた」「ある程度、方言の良さを感じた」を選択回答した人は合わせて90%以上(無回答を除くと回答者の98%)もあり、昔話は方言の良さを感じたり伝えたりするのに適した素材であることがわかる。また、質問1.の自由記述でも方言へのプラス評価の意見も多かった。(具体的な回答は、後掲のアンケート結果の報告を参照。)
- ・質問2.で選択された回答を見ると、「方言の良さが感じられた」が70%以上あり、「昔ばなしを方言で聞くとおもしろい」が66.2%、「いろいろな地域の方言昔話が聞けてよかった」が約60%と、方言に対するプラス評価をする人が多かったことが分かる。一方、「2地域くらいの方言にしたほうがいい」の回答は0人、「茨城の方言の昔話に限定したほうがいい」を回答した人もわずか1名であり、いろいろな方言を聞くことが、おもしろさ、楽しさや方言の良さを感じることに繋がっていると言える。
- ・質問2.の回答からは、また、「方言がわからないところがあっても楽しめた」が31.0%もあったのに対して、「昔話は方言だとわかりにくい」と「方言がわからなくて昔話を楽しめなかった」はそれぞれ2名(2.7%)、「全体的に方言が難しかった」も3名(4.1%)と、方言が昔話の理解の妨げにはあまりなっていないことがわかる。
- ・質問3.の「(2)方言の使用」については、「方言を使ってみたいと思った」「少し方言を使ってみたいと思った」を合わせると約66%(無回答を除くと回答者の82.5%)であり、昔話を方言で聞くことによって、方言使用が促される可能性が認められる。
- ・質問3.の「(3)方言を聞く機会」についても、「もっとあったほうがいい」が76.1%(無回答を除くと回答者の87.1%)と多かったのに対して、「あまりなくてもいい」と回答したのはわずか1名であり、本企画が方言に触れる機会として機能していることが推測される。
- ・質問4.の方言かるたについての質問では、「とてもよい」「よい」を合わせると84.5%(無回答を除くと回答者の98.4%)であり、「あまりよくない」「よくない」と回答した人はいなかった。また、自由記述も多く、方言かるたの取り組みをよしとするものや使ってみたいなどの期待する意見がほとんどであった。また、会の終了後などに、直接、「どこで買えるのか」「使ってみたい」といった問い合わせも多かった。これらのことから、方言かるたの制作は期待や評価がされていることがわかる。
- ・質問5.「昔話などの地域の文化の保存・継承」、質問6.「地域の方言の保存・継承」については、いずれも必要性を認める回答が90%を超えている。このことから、本企画(方言昔話の会)や本事業そのものでの取り組みの継続の必要性が確認できる。

- ・約 90 名の来場者に対して、71 名の方がアンケートに回答してくださったことと、その回答の内容から考えると、本企画が好評であり、成功であったと言える。

以下、アンケート結果を個々の質問項目に沿って示していく。本アンケートでは多くの自由記述の意見を得ることができた。その自由記述の一部について、かなづかいや漢字や文体等の一部を修正して示す。なお、自由記述の回答者個人に関わる情報（年代や性別等）は除いて示していく。具体的な示し方は、以下のとおりである。

《示し方》

- ・アンケートの質問項目順。
- ・選択肢を回答する質問結果は、表として示した。
- ・具体的な感想や意見の回答（自由記述）は、内容によっていくつかに分けて示した。なお、本報告書では自由記述は、回答者に関わる情報を除いた一部のみとした。
- ・自由記述は原則として回答どおりに示したが、仮名等の誤りと思われるところなどは、適宜、修正した。また、読みやすさを考えて、句読点を、適宜、加えた。
- ・自由記述は、大雑把な内容によって区分して示した。したがって、同一の回答者からのものでも、いくつかの内容を回答してもらった場合は、分けて扱った。

アンケート結果

1. 本日の第 2 部のプログラムで、よかったと思ったものはどのプログラムですか。よかったと思ったものについて、いくつでも○を付けてください。また、どんなところがよかったか、具体的に教えてください。（複数回答可）

①方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ	46 (64.8%)
②茨城方言の昔話(その 1)	37 (52.1%)
③カーテンシアター「けちくらべ」	47 (66.2%)
④福島方言の昔話	34 (47.9%)
⑤茨城弁による方言ミニ講座	40 (56.3%)
⑥茨城方言の昔話(その 2)	41 (57.7%)

◆具体的な意見・感想

<全体についての意見・感想>

- ・全体的に良かった。
- ・全部良かったです。感動したし楽しかったです。
- ・すべての項目に感心しました。
- ・初参加でしたが楽しいひと時でした。全体的に良かったです。
- ・それぞれの語り手の笑顔の語り、つり込まれての笑い、涙、感情が揺さぶられました。
- ・語り手の方、どなたもとても上手で聞きやすかったです。
- ・方言により民話を語ることそのものがすばらしいが、カーテンシアター、手話と工夫を

凝らした上に、ミニ講座でアイスブレイクもでき、構成も大変すばらしく思いました。

- ・語り手の共感を呼ぶ口調がたいへん楽しくカーテンシアターの手法も良かった。
- ・語り部のみなさん全員、とてもお上手で楽しく、時間が短く感じられました。
- ・皆よかったです。方言にもやはり年代が出るのでしょうか。味がありもっと聞きたくなりました。
- ・昔話の内容が面白かった。

<方言の良さ、おもしろさについての意見・感想>

- ・方言の面白さを感じた。
- ・方言には暖かみがある。
- ・方言の温かさが感じられ、とても良かった。
- ・やっぱり茨城弁の話をしている時が、風景が浮かびました。
- ・自分も使っていた岩瀬・笠間の方言を思い出した。身体の中に浸んでいたことを思い出した。
- ・私自身は県南の出なので、また違った茨城弁が聴けるのは楽しいです。
- ・とにかく茨城弁が良し!!故郷の言葉、大切にすっぺえ。んだが、鹿行、県北、県西、中央各々、少しずつ違んだ！（という感想）でした。
- ・第2部の件、共通語の方がよく分かります。でも方言の方は気持ちが入って面白さが良かった
- ・日常的に使っていることばで語ると「話」が生き生きとしてくる。その違いがよくわかった。

<個々の演目についての意見・感想>

①「方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ」について

- ・共通語、方言によってずいぶんと違って聞こえる。再発見した。
- ・方言きき比べ、方言の楽しさがある。
- ・ひとつのお話を複数の方言で聞くことができ楽しかったです。
- ・同じ内容の話にもかかわらず、雰囲気が全然異なる事がわかった。
- ・方言を聞き比べて人々により、個性があって面白かったです。
- ・同じ話でも土地によって言い方が変わり、それぞれ味わいがあっておもしろかった。
- ・最初の話、地域によっての違いがよくわかり楽しませていただきました。

②「茨城方言の昔話（その1）」「茨城方言の昔話（その2）」について

- ・手話の昔話は目にもうって変え変化があり良かったです。
- ・「けちくらべ」「ばか息子の挨拶」アクセント、イントネーションお見事です。なつかしい思いで拝聴させて頂きました。
- ・「お初お玉」カーテンシアター「カップレ餅」、茨城方言の味が良くでていた。

③「カーテンシアター」について

- ・カーテンシアターは楽しく方言を聞いた。
- ・カーテンシアター語り手も良い。メンバーの役割もよくとれていた。
- ・カーテンシアター「けちくらべ」の語りはユーモアがありとても楽しく聞かせてもらいました。
- ・「カーテンシアター」内容はもちろんよかったが、新しい形の紙芝居でアナログのよさを実感できた。

- ・カーテンシアター「けちくらべ」が方言の語りを聞いたという想いが残りました。

④「福島方言の昔話」について

- ・福島の方言の語りは藤田浩子さんの語りでよく聞いていたせいか非常によく耳になじんで楽しめました。このように何べんも聞くということが、大切なのだと思いました。
- ・「福島浜通りのことば」は私の記憶にある「茨城平磯部田野地域のことば」に近いと思った。 * 「平磯」「部田野」はひたちなか市内の地名。(編者注)
- ・原発事故で避難中の話を方言でやることで、もう現代の語り部になるのでは！
- ・白川さんの語りは心に残りますね！
- ・福島吉田さん、とてもよかった。

⑤「茨城弁によるミニ講座」について

- ・方言ミニ講座たのしかった。
- ・ミニ講座はいつも楽しくて聞くことができます。
- ・ミニ講座の現実とのことばの実例が良かった。
- ・私は北海道生まれで茨城弁ほとんど使いませんので方言ミニ講座⑤とても興味を持ってました。

<その他、要望等>

- ・言うことなし。来年はもっと向上を期待す。
- ・子ども達にこういう機会をたくさん与えてあげて欲しいと思いました。
- ・昔話は哲学的なところがあると思った。
- ・マイクの音質がよく、語り部のみなさんの声が鮮明に聞こえわかりやすかった。
- ・方言の発言は、今日やった通りですが、やっぱり発音が全然違います。いくら練習してもそこはむづかしいと思います。
- ・聞き取りにくかった。言葉の発音、アクセント、イントネーションの問題で理解が困難であった。

2. プログラム全体についてお聞きします。「そうだ」と思うもの、いくつでも○を付けてください。(複数回答可)

方言の良さが感じられた	52 (73.2%)	2 地域くらいの方言にしたほうがいい	0 (0.0%)
方言の良さは感じられなかった	3 (4.2%)	茨城の方言の昔話に限定したほうがいい	1 (1.4%)
昔ばなしを方言で聞くとおもしろい	47 (66.2%)	共通語(標準語)の昔話をもっとあったほうがいい	1 (1.4%)
昔話は方言だとわかりにくい	1 (1.4%)	昔話の方言の説明があったほうがいい	7 (9.9%)
全体的に方言はよく分かった	19 (26.8%)	方言がわからないところがあっても楽しめた	23 (32.4%)
全体的に方言はまあ分かった	8 (11.3%)	方言がわからなくて昔話を楽しめなかった	2 (2.8%)
いろいろな地域の方言昔話が聞けてよかった	42 (59.2%)	全体的に方言が難しかった	3 (4.2%)
もっと多くの方言で昔話が聞きたかった	19 (26.8%)	布絵の展示が良かった	16 (22.5%)
その他(※)	8 (11.3%)		

※その他の意見

- ・全部良い。
- ・迫力があって、生き生きしているところがよい。
- ・方言の解説をあまり入れないところがよい。昔話なので文脈で理解できるので、勉強色をあまり出さないところがこの会の魅力のひとつだと思います。
- ・九州地方も少しいれてほしい。
- ・昔話である必要はない!
- ・話し方がキレイすぎる。
- ・特徴ある名取の方言かるたを提示して頂きたかった。
- ・かるた、読みがなをつけてくれたら嬉しいです。

3. 昔話を聞いて、方言、特に茨城方言についてどのように感じましたか? それぞれについて、1つ選んでください。

(1) 方言の良さについて

a. 方言(茨城方言)の良さを感じた	49 (69.0%)
b. ある程度、方言の良さを感じた	16 (22.5%)
c. あまり方言の良さを感じなかった	0 (0.0%)
d. 方言の良さを感じなかった	1 (1.4%)
無回答	5 (7.0%)

(2) 方言の使用

a. 方言を使ってみたいと思った	23 (32.4%)
b. 少し方言を使ってみたいと思った	24 (33.8%)
c. 方言を使ってみたいと思わなかった	10 (14.1%)
無回答	14 (19.7%)

※その他の意見

- ・生まれた地方が異なり、老人なので今から言語を覚えることが大変。
- ・ある程度日常的に使っている。

(3) 方言を聴く機会

a. もっとあったほうがいい	54 (76.1%)
b. あまりなくてもいい	1 (1.4%)
c. どちらともいえない	7 (9.9%)
無回答	9 (12.7%)

4. 方言かるたの展示と説明について、どのように感じましたか？

a. とてもよい	48 (67.6%)
b. よい	12 (16.9%)
c. あまりよくない	0 (0.0%)
d. よくない	0 (0.0%)
e. わからない	1 (1.4%)
無回答	10 (14.1%)

◆具体的な意見・感想

- ・非常におもしろい取り組みだと思います。
- ・「方言かるた」の取り組み、とても意識のあることとお話を伺い感じました。
- ・工夫されてると思いました。
- ・心をつなぐツールとしてとても大事な役割を果たすと思う。「カンメに刺されて寝らんねえ」思わずうなずき笑ってしまう生活の中の場面が捉えられて楽しいです。
- ・学生さんへ 頑張って作ってください。茨城をもっと知りたい気持ちになりました。
- ・絵札も素晴らしい。
- ・できあがったら3世代でかるた取りをしたいと思います。
- ・これはたくさんの地方であった方がよい。
- ・完成しましたら是非地元の子供たちに遊んでもらいたい。
- ・全国の県で広がって良いと思います。
- ・読み札が漢字のようですが、ふりがなが必要ではないでしょうか。例えば「厄除」は「やくよけ」ではなく「やぐよげ」と発音されると思います。
- ・発音記号つきにすると、よそ者でもすこしはマネデキソウ！
- ・群馬県のかるたは知っていましたが、茨城でもそのようなものもあつたら良いなと思っていました。
- ・「群馬方言かるた」などすでに地域に根ざしている所もあることを伺い、ぜひ完成して茨

城県内でも子供たち、また地域のコミュニティーの行事のなかで楽しみながら方言に親しめる機会になればと思いました。

- ・完成するのを楽しみにしています。
- ・すばらしい企画だと思います。
- ・小学校や子ども会でかるた大会を行っている地域が水戸内にあります。広まることを願っています。
- ・普通耳で聞いている言葉ですが、文字にするとこっけいな感じで笑顔になれる。
- ・テキストがあるといい。
- ・私自身忘れかけていた茨城弁で孫たちと遊んだら、さぞ楽しいことだと思います。
- ・茨城の方言、子供たちにも知ってほしい。使ってほしい。愛すべき言葉です。
- ・方言かるたが販売されることを望んでいます。
- ・かるた販売してください。家族で遊びたいです。
- ・購入希望。どのようにすればよいのでしょうか？
- ・広く普及されることを願っています。
- ・県外から来たので、茨城の方言の分からないニュアンスが少しわかり嬉しいです。
- ・かるたそのものより使い方が大事だと思う。
- ・高齢者等の相手の病院で働いているので、作業療法の一つの活動として使いたい。
- ・次回は方言かるたをとりあげて方言と絵を詳しく紹介してもよいと思う。
- ・具体的な「物」があると親しみやすくなり良いと思います。
- ・カルタ以外の遊び方があるとなおよし。

5. 昔話などの地域の文化について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a. 大いにある	51 (71.8%)
b. ある程度ある	17 (23.9%)
c. あまり必要ない	1 (1.4%)
d. 全く必要ない	0 (0.0%)
e. わからない	0 (0.0%)
無回答	2 (2.8%)

6. 地域の方言について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a. 大いにある	44 (62.0%)
b. ある程度ある	20 (28.2%)
c. あまり必要ない	1 (1.4%)
d. 全く必要ない	0 (0.0%)
e. わからない	0 (0.0%)
無回答	6 (8.5%)

7. 本日の会の全体について、ご意見やご感想をお聞かせください

- ・大変楽しく、面白かった。今後もこんな会に参加してみたい。
- ・情景がふわーっと浮かび心豊かな時間・空間でした。
- ・楽しかったです。奥が深いことを感じました。
- ・とても時間の経つのが早く感じました。どのお話もとても良かったです。
- ・最後までとても楽しませていただきました。ありがとうございました。
- ・ほのぼのとした雰囲気とてもゆったりした気持ちになりました。
- ・腹の底から笑えたり、胸奥の思い出も蘇った。
- ・方言での昔話をたくさん聞けてとても良かった。
- ・言うことなし。
- ・聴衆の方で、御高齢の方々がとても懐かしそうに聞き入る姿が見られ、とても良い刺激になったのではと思います。
- ・今回で4回続き、一番心に残りました。
- ・楽しく拝聴させていただきましたが、採取のご苦勞があつてのことと思います。着実な活動に敬言を表します。
- ・方言かるたの完成が待ち遠しいです。多くの子供たちに使ってもらいたいですね！今の小学生は方言を知らないのかかるたなら馴染みやすいと思います。

◆方言の良さや方言の継承についての意見・感想

- ・方言は地域の宝と思う。なまりも地域性があって楽しい。
- ・昔話、方言は日本文化の宝物です。御健闘を祈ります。
- ・地方の方言は日本の文化である。保存すべきである。いわゆる標準語(江戸弁・方言)のみでは、江戸時代以降の文化しか伝わらない。生まれが江戸地方で無い者にとっては味けない。
- ・方言の持つ優しさ、迫力、伝達力はすごい。
- ・方言とても良く、心地よく響きました。
- ・ミニ方言講座、茨城弁もおもしろい。
- ・最近 TV ラジオで漫才師「カミナリ」が茨城弁で活躍していることが誇らしい。
- ・方言は若い頃は恥ずかしかつたが、今は少し違ってきました。
- ・日頃から日常的に使っている方言はいいですね。ホッコリします。
- ・ふだん仕事でなまりや方言を注意されるので今日は開放された感じ。

◆次回への期待や継続への要望

- ・今後も継続していただけるなら大人へと伝えて行って欲しいと思います。
- ・このような企画をどんどんやって欲しいと思いました。
- ・毎年来ています。何回か聞いた話があり、新たなものも聞きたいです。

◆方言に対するマイナス意見

- ・方言の語りがキレイでちょっと本音の方言と違和を感じるところがある。

◆会の構成や内容などに関する感想や要望

- ・様々な切り口がありおもしろかったです。
- ・色々な話が聴けてバラエティ豊かで楽しめました。
- ・ハッピーエンドっぽいのが多いのもまたよし。

◆その他

- ・司会者はマイクを使用していたが、他の人は使用しないので聴きとり難かった。
- ・私自身が初めて参加したためミニ講座はちょっと分かりにくかった。
- ・語り手の出身地と今何をしているかを聞きたかった。
- ・布絵について制作者とか説明があってもよかったのでは。

8. 今日の催しのことを、何で知りましたか？

a. 新聞	13 (18.3%)
b. ラジオ	0 (0.0%)
c. ポスター・チラシ	14 (19.7%)
d. 土曜アカデミーのパンフレット	16 (22.5%)
e. 知人・友人から聞いた	22 (31.0%)
f. その他	9 (12.7%)

◎最後に、あなた自身についてお尋ねします。

性別

男性	18 (25.4%)	女性	43 (60.6%)	無回答	10 (14.1%)	合計	71 (100%)
----	------------	----	------------	-----	------------	----	-----------

年代

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	無回答		合計
人数	0	0	0	5	5	27	23	6	5		71
%	0	0	0	7.0	7.0	38.0	32.4	8.5	7.0		100

お住まい

県内 62 (87.3%)	水戸市	27	ひたちなか市	4	石岡市	1
	日立市	3	笠間市	8	鹿嶋市	1
	東海村	2	高萩市	2		
	茨城町	6	常陸太田市	1		
	牛久市	2	かすみがうら市	1	その他県内	1
	城里町	2	小美玉市	1		
県外 3 (4.2%)	東京都	1	福島県	2	無回答	6 (8.5%)

IV 関連資料

(1) 来場者アンケート調査票

A4、表裏2ページ、質問項目は8項目

(2) 方言昔話の会のチラシ・ポスター

チラシ : A4、カラー

ポスター : A2、カラー

* チラシ・ポスターのデザインは同一

4. 方言かるた（現在制作中）の展示と説明について、どのように感じましたか？

取り組みについて → a とてもよい b よい c あまりよくない d よくない e わからない

ご意見・ご感想 →

5. 昔話などの地域の文化について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a 大いにある b ある程度ある c あまり必要ない d 全く必要ない e わからない

6. 地域の方言について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a 大いにある b ある程度ある c あまり必要ない d 全く必要ない e わからない

7. 本日の会の全体について、ご意見やご感想をお聞かせください。

8. 今日の催しのことを、何で知りましたか？

a 新聞 b ラジオ c ポスター・ちらし d 土曜アカデミーのパンフレット
e 知人・友人から聞いた f その他 ()

◎最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

性別： 男 女

年齢： 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上

お住まい： 県内 → (※ 市・町・村) ※差支えない範囲でお教えてください

県外 → (※ 都・道・府・県) ※差支えない範囲でお教えてください

ご協力、ありがとうございました。

来場者アンケート（裏面）



文化庁委託事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2」
・茨城大学図書館土曜アカデミー

聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4

日時: 令和元年11月30日(土) 13:30~16:00(予定)

場所: 茨城大学図書館3階ライブラリーホール

* 入場無料、事前申し込み不要、駐車場有
(駐車場へは大学南門より入構、教職員駐車場に駐車可)



◆プログラム

第一部 13:30~13:50

- (1) 開会あいさつ、会の趣旨説明
- (2) 「茨城方言かるた」について(活動報告)

第二部 14:00~16:00

- (1) 聞き比べ、方言いろいろ
◎昔話「河童とつくり」を方言と共通語の語り
で語ることば…共通語、茨城方言、広島方言、ほか

(2) 茨城方言の昔話を楽しむ(その1)

継子譚「お初お玉」「茶栗柿」ほか

(3) カーテンシアター「けちくらべ」

(4) 福島方言で昔話を楽しむ

「鼻取り地藏」「半日村」ほか

(5) 楽しく学ぶ! 茨城方言ミニ講座

(6) 茨城方言の昔話を楽しむ(その2)

「ぶったたきと半纏し」「ばか息子の挨拶」ほか

《展 示》

布絵による昔話「カッパし餅」「笠地藏」「浦島太郎」ほか

試作版「茨城方言かるた」と解説

『おあきさんの昔ばなし』しみじみ楽しく茨城のことば」ほか

主催: 文化庁令和元年度委託事業・被災地における方言の活性化支援事業

「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2」(茨城大学)

・茨城大学図書館 後援: 茨城県教育委員会



「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」チラシ・ポスター

第三章 昔話と方言談話

本章では、福島県相馬郡新地町において聞き取りを行った昔話とそれに関連する方言談話を報告する。

新地町には「新地語ってみっ会」という民話の会があり、隣接する宮城県山元町、丸森町などとともに、昔話の語りの活動が盛んな地域である。また、新地町は東日本大震災では津波によって大きな被害を受けた地域であり、新地町に伝わる昔話ゆかりの地においても大きな被害があった。

本章で報告する昔話と方言談話は、2019年3月19日に、長く「新地語ってみっ会」の主要な語り手として語りの活動を行ってこられた語り手・小野トメヨ氏（新地町在住）にお話しいただいたものである。昔話も含めて、方言談話の文字化の形式によって記述、報告する。

I 文字化の基準・記号の見方

昔話・方言談話の文字化の基準と使用する各種記号は、下記の二つの参考文献に基づく平成24年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（茨城県）」の文字化基準を若干修正したものである。

〈参考文献〉

- ・『伝える、励ます、学ぶ被災地方言会話集文字化の基準・記号の見方』（川越めぐみ氏、東北大学産学官連携研究員（作成時））
- ・『宮城県沿岸市町村談話資料作成マニュアル 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業』

（1）文字化の概要

文字化は、上段に調査協力者（話し手）の方言の発話をカタカナで表記し、下段にその通語訳を漢字かなまじり表記で記した。発話は、基本的には下の例のように文節で分かち書きである。なお、調査員の発話については、概ね発音どおりとしたが、上下段に分けない漢字かなまじり表記を基本とし、漢字の発音が特定できない場合は漢字にルビを付した。方言形はカタカナ書きとした。

方言音声 → 上段、表音的カタカナ表記 共通語訳 → 下段、漢字かなまじり表記
--

例：ソー ソンデ ホーゲン デダノカシラ。 ← 上段 方言音声の文字化
そう それで 方言 [は] 出たのかしら。 ← 下段 上段に対する共通語訳

（2）発話者の表示

- ①発話の単位…原則として発話権が交替するまでを1発話とした。あいづち、発話権の交替のない短い発話は別に処理した。
- ②話者記号…話者、調査者などの話し手にA、B、C、D～のようにアルファベットで記号をつけ、発話の冒頭に示した。

(3) 文字表記の基準

【方言音声の文字化部分】 (上段)

表音的カタカナ表記を用いた。音声の方言的特色（キの口蓋化、母音の無声化、ガ行鼻濁音など）は、特に書き分けることはしていない。

長音：「ー」 例：ソーナンダ (×ソウナンダ)

助詞：「は」→「ワ」 例：アレワ ナンダガ

「を」→「オ」 例：コレオ モッテゲ

「へ」→「エ」 例：ガッコーエ イゲ

鼻音：入り渡り鼻音 → 上付き文字を使用…ンダ

ガ行鼻濁音については、ガ行と書き分けは行わず、ガ行のカナで示した。

中舌音：どちらかの音声の近いほうを採用した。

例：スに近いシ → 「シ」 / シに近いス → 「ス」

「ア」と「エ」の中間の音については「エァ」「アエ」という表記も許容した。

例：「ネァ (ない)」「ナエ (ない)」

四つ仮名：「ジ」「ズ」に統一した。（「ヂ」「ヅ」は使用していない）

例：ウジ (うち)、アイズ (あいつ)

【共通語訳部分】 (下段)

意識はできるかぎり行わず、基本的に方言の直訳とし、漢字かなまじり表記を用いた。

ないと読みにくい助詞等は、適宜、[]でくくって補った。

ないと疑問文と判断しにくい場合のみ、適宜、「？」を補った。

感動詞や終助詞などにおいては、基本的に長音記号「ー」を使用した。

(4) 記号の見方

【方言文字化の部分】 (上段)

。(句点)：ポーズがあり、意味的に1つのまとまりを持つ文の最後につけた。

、(読点)：基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。

読みやすさを重視して付した部分もある。

()：あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。

例：ソーヤッテ ムガシワネー (B ンダネー) ヤッダンダー。

{ }：笑い声、咳払い、間などの非言語音。

例：{笑} {咳} {手を叩く音}

~~~~~：聞き取れない部分には波線を引いた。

例：オチャズケノ~~~~~

聞き取りが不十分な部分は、聞こえた音を記した箇所に波線を引いてある。

例：コエズカレデ

\_\_\_\_\_：発話が重なっている部分には、普通の下線を引いた。

あいづちは発話を( )に入れ、重なっている部分には下線を引いた。

例：モラッテクダサイ (A ソーダ) (B モラテー)

=====：発話が重なり、かつ聞き取れない部分には、二重下線を引いた。

例：アイズ \_\_\_\_\_ (B ホンテ) オドゲデネーゴド

発話が重なって聞き取りが不十分な部分は該当箇所に二重下線を引いた。

例：アイズ キタナー (B ホンテ) オドゲデネーゴド  
( ) : 注記。( )内の数字は注記番号。各談話の後に注記をまとめた。  
地域特有の語や表現の意味用法を説明したり、談話に登場する主な人物、場所、  
屋号、船名などを説明した。その他、特に注意しておきたい音声的特徴などに  
使用したものもある。

例：ムガシワ サンザンサ<sup>(1)</sup> エッタゲンド

例：カーチャンノミセ<sup>(2)</sup>。

\*その他、1語であっても、音と音の間にポーズが入っている場合は、1字空けにした。

#### 【共通語訳部分】 (下段)

。(句点) /、(読点) / ? / ( ) / { } の記号の用い方は、上段と同じ。

×××× : 言い間違いや言いよどみなど、共通語訳ができない部分。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

~~~~~ : 聞き取れず、共通語訳も不明な部分には波線を引いた。また、聞き取りが  
不十分な部分の共通語訳で、意味が特定できる部分は共通語訳を入れた。

例：ツナミ ~~~~~ ネクテ

津波 ~~~~~ なくて

_____ : 発話が重なっている部分には、方言の部分に準じて下線を引いた。

例 A : アー。

ああ。

B : ソレオ イレデ。

それを 入れて。

===== : 発話が重なっており、聞き取れない、または聞き取りが不十分である部分には、
方言の部分に準じて二重下線を引いた。

例：ビョーギ _____ (B _____) シタンダ。

病気 _____ (B _____) したんだ。

[] : 方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例1：ミカン _____ ノセテ

みかん [を] 乗せて

例2：ヨメガ ジッカニ カインノワ ジューゴンチダナンテ

嫁が 実家に 帰るのは [正月の]15日だなんて

II 水神沼⁽¹⁾の話と東日本大震災のときのこと

話し手 A : 90代・女性

聞き手 B : 70代・女性

C : 調査員 (女)

収録時間 21分3秒

A : アノネー、アアレケアゾコケンザカイネ (B ンー) ケンザカイニネ
あのねえ、ああれ × あそこ 県境ね (B うん) 県境にね

コンナホラツツミガアルノヨ。 (B ハイ) デホレワソレワ
こんなほら堤があるのよ。 (B はい) でそれはそれは

ミヤギケンノブンナノイマワネ。 (B ハイ) (C ンー) アノツツミネ、
宮城県の 分なの 今はね。 (B はい) (C うん) あの堤ね、

ソノスイジンヌマツテユンダケドモ、ソレワショージサン⁽²⁾ニモ
その水神沼っていうのだけでも、それは庄司さんも

カタッテルトオモノ。 (B ンー) ダケドミヤギケンデカタッテルノワ
語っていると思うの。 (B うん) だけど宮城県で語っているのは

(B ンー) ドンナフーニカタッテルカワタシモチョッチチータコト
(B うん) どんなふうに語ってるか 私も ちょっと聞いたこと

ナイケド、 (B ンー) ンコッチデモカタッテルノネ。ミヤギケンノ
ないけど、 (B うん) × こっちでも語ってるのね。 宮城県の

(B ンー) ケンザガイニアンノネ。デイマワアツチャ
(B うん) 県境にあるのね。で今は ××××

C : スイジンヌマノハナシデスカネ。
水神沼の話ですかね。

B : ンー。ン? スイジンヌマノハナシデスカ? (A ンー、スイジ) コレ?
うん。ん? 水神沼の話ですか? (B うん、×××) これ?

(A ンー) ア。
(A うん) ああ。

A : コレスイジンヌマネ。(C エー) デスイジンヌマスル? コレ
これ水神沼ね。(C ええ) で水神沼 [の話を] する? これ [は]

(C ハイハイ) ダイジャノハナシネ。(B ンーン) ダイジャガイテネ。
(C はいはい) 大蛇の話ね。(B ふうん) 大蛇がいてね。

ユエ イグツモ アンノ コノ スイジンヌマニ。 (C ン一) (B ア オハナシガ)
これ いくつも あるの この 水神沼に。 (C うん) (B あ お話がね)

オハナシワ モーネ、 コレ ウ ダイジャノ ハナシダノネ (C ン一) アド
お話は もうね、 これ × 大蛇の 話だのね (C うん) あと

ムスメガ ホレ ダイジャニ バカンサレタリ ダノネ (C ン一) (B ンッ バ
娘が ほら 大蛇に 化かされたり だのね (C うん) (B うん ×

バカニサレタ イーノ) コ コレワ カタハノシワ カ アノー ホラ、
) × これは 片葉の話は × あのう ほら、

(B カタハノ ヨシノ ハナシ) カー カタッポノ ハ (C ア一) (B ン一 ハ)
(B 片葉の 葦の 話) × 片方の 葉 (C ああ) (B うん 葉)

コーナッタノネ、 (B ン一) アノー ホレー ホンナ ハナシモ アンノネ。
こうなったのね、 (B うん) あのう ほら こんな 話も あるのね。

(B ン一) コレワ ドー アノー ホレ エー アノ ナンテユーカ アノー
(B うん) これは どう あのう ほら × あの なんというか あのう

ン一 チンジフ⁽³⁾ガ アッタトキ ホレ ア アノ キョートカラ ホレ、
× 鎮守府が あったとき ほら × あの 京都から ほら、

(B ン一) アノー (B ン一) サムライガ キテタノ。 (B ン一)
(B うん) あのう (B うん) 侍が 来てたの。 (B うん)

ソノシト (B ン一) カイルトキニ コレ スイジンヌマニ ヨッタトキ ホレ、
その人 [が] (B うん) 帰るときに これ 水神沼に 寄ったとき ほら、

(B ン一) ムスメトノ レンアイミタイデ (C ン一) (B ン一)
(B うん) 娘との 恋愛みたいで (C うん) (B うん)

ソナンナッテ (B ン一) ン一 ワカレテイッタカラネ (B ン一) ン
そんなふうになって (B うん) × 別れていったからね (B うん) ×

ホノ ミナミノイケ ホレ ハシ (B ン一) ハシ (B ン一)
この 南の池の ほら 端 (B うん) 端 (B うん)

デルナッテユーネ ソンナ オハナシ。 ソレ ン一 (B ン一) カタホーワ
出るなっというね そんな お話。 それ うん (B うん) 片方は

デナイデネ (C ン一) カタ。 ユ ミエケンアタリニモ アルヨネ (C ネ
出ないでね (C うん) ×。 これ 三重県あたりにも あるよ (C ね

キキマスネ) ソレ ソレ チョット ナガイノネ。 ダカン (B ナンデモ
聞きますね) それ それ ちょっと 長いのね。 だから (B 何でも

センセー) スイジンヌマネ (B ナンデモ イーデス) シ (B センセーガ) デ
先生) 水神沼 (B 何でも いいです) × (B 先生が) で

スイジンヌマネ、 (C ハイ) ノ ダイジャノ サイゴネ。
水神沼、 (C はい) [水神沼] の ×× 大蛇の 最後ね。

(B ハイ) シー ネ。 アノー ムカシネ シンデー ムカシモ イマモ
(B はい) うん ね。 あのう 昔ね それで 昔も 今も

アルンダケドネ、 スイジンヌマト ユーノ アノ ケンザカイニ アルノネ。
あるんだけどね、 水神沼と いうの あの 県境に あるのね。

(B シー) シンデー イマワネー、 ホラ ケンザカイナンテ
(B うん) [それ] で 今はね、 ほら 県境なんて

キメラレタカラダケドモ、 ムカシワ ホラネ、 ソンナー ケンザカイモ
決められたからだけでも、 昔は ほらね、 そんな 県境も

ナカッタカモシレナイ。 ソノコロ イマモ ムカシモ カワリナクネ、 ア ソノー
なかったかもしれない。 その頃 今も 昔も 変わりなくね、 あ その一

ソノ バショニ アルンダケドモ ソノ スイジンヌマワネ イマノ ナンゾーバイト
その 場所に あるのだけれども その水神沼はね 今の 何十倍と

シロクテネ、 ムカシワネ ウミノホーマデ ツズイテオッタト ユワレ
広くてね、 昔はね 海のほうまで 続いていたと ×××

イワレテネ。 ソシテ ソノヌマトネ コト ココノ オガワノ サイゴニ イッタ
言われてね。 そして その沼とね ×× この 小川の 最後に 行った

ツルシハマ⁽⁴⁾ノ アイダニモネ コー アノ タナカヌマトユー ヌマガ アッタノ
釣師浜の 間にもね こう あの たなか沼という 沼が あったの

オッキ ヌマガネ。 ソコト ミズツズキデネ ムカシワ イッタリ フネデ
大きい 沼がね。 そこと 水続きでね 昔は 行ったり 船で

イッタリ キタリシテタッテ コー ユーノネ。 ダケドモ コッチノ オガ
行ったり 来たりしてたって こう 言うのね。 けども こっちの ××

オーガワノ アッタ コンナ オッチナ ツツミワネ
大川の あった こんな 大きな 堤はね

ショーワサンジューネンダイニネ ウメタテラレテネ アノ タンボニ
昭和三十年代にね 埋め立てられてね あの 田んぼに

シチャッタノ。 ダ コッチワ ナクナッタノ。 ダケド ムコーワ マダ
しちゃったの。 だから こっちは 無くなったの。 だけど むこうは まだ

イマモ ムカシ カワリナクネ。 ソコワネ モリノ ナカニ コー ヤー イ
今も 昔 [も] 変わりなくね。 そこはね 森の 中に こう いや ×

イッパイ ヤマノ ナカニ アルモンダカラネ、 イッパイ オッキナ キモ
いっぱい 山の 中に あるものだからね、 いっぱい 大きな 木も

ハイテルカラネ アー オーシュウシカゲヌマ⁽⁵⁾ト ユバレテオツタンダト ムコーネ。
生えてるからね ×× 奥州日陰沼と 呼ばれておったのだと むこうね。

ンデ ソノ オーシュウシカゲヌマニワネ ダイジャガイタツテ コー
それで その 奥州日陰沼にはね 大蛇がいたって こう

ユワレテネ。 コノ タナカヌマニワ ダイジャガ イタトワ
言われてね。 この たなか沼には 大蛇が いたとは

ユワレナカッタケドネ。 コッチワ ダイジャガ イタンダト。 ホシタラネー、
言われなかったけどね。 こっちは 大蛇が いたのだと。 そうしたらね、

アルトキダトナ ソノ ヌマノ チカクノ ヒャクショーガネ チカクノ タンボデ
あるときだってね その 沼の 近くの 百姓がね 近くの 田んぼで

タノクサトリオ シッタト。 タノコトネ タンボネ。 ソシタラ
田の草取りを していたと。 田のこと (=仕事) ね 田んぼね。 そうしたら

アノー ムカシワ テド ミンナ タンボ コシテ クサ トルカラネ。
あのを 昔は 手で みんな 田んぼ [を] こうして 草 取るからね。

シタラネ アノー ナンカネー モー アツイ アツイ セナカ セナカガ
そうしたらね あの一 なんかねえ もう あつい あつい 背中 背中が

コゲツクヨーナ アツイー シニネ ムチューンナツテ トツテネ オーシテネ アセ
焦げ付くような あつい 日にね 夢中になって 取ってね そうしてね 汗

フク シマモ イタマシクテ⁽⁶⁾ イッショケンメ ハタライッタノ。 ソノウジ
拭く 暇も もったいなくて 一生懸命 働いていたの。 そのうち

ヒヤヒヤートネ カゼガ フイタンカナトモツテネ アーツテ セノビオシテ
冷や冷やーとね 風が 吹いたのかなと思ってね あーって 背伸びをして

タツテミタンダト。 ソーシタラネ オソラガ ナンダカ マックラグナツテネ アー
立ってみたのだと。 そうしたらね お空が なんだか 真っ暗くなってね あー

ナンダ コレ カミナリデモ クンデネーガートモツテネ コンナ ナガメツタラネ
なんだ これ 雷でも 来るんでないかと思ってね こんな 眺めていたらね

ソノウジ ゴロゴロゴロゴローツテネ カミナリガ ナリダシタンダト。 アー
そのうち ゴロゴロゴロゴローってね 雷が 鳴り出したんだと。 あー

ヤッパリ カミナリダ、 トオモツテル ウテ アメモ ポツツンポツツン
やっぱり 雷だ、 と思ってる うち [に] 雨も ポツツンポツツン

フツテキタシネ、 ハー コンデワ コレ ダメダナ。 ンデ ドッカ
降ってきたしね、 もう これでは これ だめだな。 それで どこか

アマヤドリモ シナクテネトモツテネ、 ソノヌマノ ミナミッカワノ
雨宿りでも しなくてはならないと思ってね、 その沼の 南側の

タカダイニネ アノー スイジンジンジャ⁽⁷⁾ガ アル。 ソノ ジンジャガネ
高台にね あのう 水神神社が ある。 その 神社がね

アルノモ イマモ ムカシモ カワリナグ ジンジャガ アルノ。 ソッデ ソノ
あるの 今も 昔も 変わりなく 神社が あるの。 そして その

ジンジャノネ ケーダイデネ、 アー ココデ シトヤスミ。 ンデ アマヤドリオ
神社のね 境内でね、 あー ここで 一休み。 それで 雨宿りを

シテイヨートモツテネ、 アメガ ダンダンダンダン フツテキタシネ アガツテネ
していようと思ってね、 雨が だんだんだんだん 降ってきたしね 上がってね

ウチマデ イク シマモナイカラトモツテネ ソノ ジンジャデ アマヤドリオ
家まで 行く 暇もないからと思ってね その 神社で 雨宿りを

シッタ。 ソーシタラネー ヒトイツペ アン ナンカ シトイギ ツイタコロネー
していた。 そうしたらねえ ××××× あの なんか 一息 ついたころねえ

アーツトモツタ ナンカ アタリガ ソーゾーシーカラナ コーシテ
あーっと思った [ら] なんか 辺りが 騒々しいからな こうして

ヨク ミタラネー ソノジンジャノ マイノネー アノ ゴシンボクノ フトーイ
よく 見たらねえ その神社の 前のねえ あの ご神木の 太い

マツヌキノ⁽⁸⁾ テッペンニネー アー サルガ ゴロツピギ
松の木の てっぺんにね あー 猿が 5～6匹

キャッキャッキャッキャッテ サワイデルンダト。 ナーンダ コレー コレ イマ
キャッキャッキャッキャッテ 騒いでるんだと。 なんだ これ これ 今

アミガ フツテクルツチューノニ コンナー ン ナンデ コンナトコサ サル
雨が 降ってくるっていうのに こんな うん なんで こんなところに 猿

ツツタッテネー サルダッテ アツイカラネー ミズアビニネー ウミノホーニ
って言ったってねえ 猿だって 暑いからねえ 水浴びにねえ 海のほうに

キタンダッタベ ホレネー。 ソーデ キャッキャッキャッキャッテ
来たんだっだろう それねえ。 それで キャッキャッキャッキャッテ

アソンデタンダト。 ソシタラ ソノウチネー ナンダカナエ ヌmanoホーニネ
遊んでたんだと。 そしたら そのうちねえ なんだかねえ 沼のほうにね

カラネ ナマグサイ カジ カゼ マキオコシテ ダイジャガ
[沼の方] からね 生臭い ×× 風 巻き起こして 大蛇が

ハッテキタンダト。 ズルズルズルズルズルズズズズーッテネ。 ホシタラ ソノ
這ってきたんだと。 ズルズルズルズルズルズズズズーってね。 そしたら その

シャクショーネー ア ノギシタデ ハーット オドロッテネ ナンダ コレ
百姓ねえ あ 軒下で ハーっと 驚いてね なんだ これ

ダイジャガ トモッタ。 モー デーッ ダマーッテネ、 オノ ノギシタニ
大蛇が と思った。 もう ××× 黙ってね、 その 軒下に

アマヤドリシタ。 ホシタラ アメガ ダンダント フッデチタ。 ソノウチ
雨宿りした。 そしたら 雨が だんだんと 降ってきた。 そのうち

カミナリモ ナル。 ナンカイモ カミナリ ナッペシネー。 ヒャクショーワ ハ
雷も 鳴る。 何回も 雷 [が] 鳴るしねえ。 百姓は もう

ア チンジコマッテネ ノギシタニ カクレッタンダト。 ソシタラネー ソノダイジャ
× 縮こまってね 軒下に 隠れていたんだと。 そしたらねえ その大蛇

ダンダントネー、 ソノ モ サルガ ノボッテイルネ アソンデルネ ソノキニ
だんだんとねえ、 その もう 猿が 登っているね 遊んでるね その木に

ノボッテイグンダト。 ズロズロズロリト ノボッテ。 ソシタラ サルガ ソレニ
登っていくんだと。 ぞろぞろぞろりと 登って。 そしたら 猿が それに

キガツイテネー、 アー ソッチニ ニゲ コッチニ ニゲ テッペンマデ
気が付いてねえ、 ああ そっちに 逃げ こっちに 逃げ てっぺんまで

ニゲタッテネ モー ニゲキレナイ。 キダカラネ ホレ。 ソノウチ ダイジャガ
逃げたってね もう 逃げきれない。 木だからね ほら。 そのうち 大蛇が

ズルズルズルズル クビ フリフリネー、 ノボッテイグンダト。 ソーッタラ、 ア
ズルズルズルズル 首 振り振りねえ、 登っていくんだと。 そうしたら、 ×

サルワネー モー ニゲバガ ナイガラ、 コンド サ サルトノー ダイジャトノ
猿はねえ もう 逃げ場が ないから、 今度 × 猿との 大蛇との

カクトーンナツタンダト。 ソーシタラネー、 イヤー ホノ シャクショー
格闘になったんだと。 そうしたらねえ、 いやあ その 百姓

オッカネクテ オッカナクテネー、 モー チッチコマッテテネ モー
おっかなくて おっかなくてねえ、 もう 縮こまっててね もう

ミルドゴデナイカッタド。 ソノウチ ダンダン カミナリワ モノスゴク
見ているところでなかったと。 そのうち だんだん 雷は ものすごく

ナツテクルベシ。 ピカピカ ゴロゴロッテネー。 カミナリモ オッカネーシ
鳴ってくる。 ピカピカ ゴロゴロってねえ。 雷も おっかないし

ソノ ダイジャモ オッカネーシネ ホレワ。 ホノ シャクショーワ ア モー
その 大蛇も おっかないしね それは。 その 百姓は × もう

チッチコマッテネ。 ソーシタラナー ホノナ アノー サルノ イッピキガナー
縮こまってね。 そうしたらなあ そのな あのう 猿の 一匹がなあ

ソノ ダイジャニノネ クビノヘンサ カ コノ カミツイタカナニカシテネ、 ホノ
その 大蛇のね 首の辺に × この 噛みついたかなにかしてね、 その

ダイジャッテ ココニネ ギャクリントユーネ コケラ^⑨ガ アルンダッテ。 コー
大蛇って ここにね 逆鱗というね 鱗が あるんだって。 こう

フツーニ コーナッテル ヤツオ ハ ギャクリンダカラ、 ハンタイニ ナッテル
ふつうに こうなってる やつを × 逆鱗だから、 反対に なってる

ウ コノ ウロコミタイナノネ。 ソレナー ソノ ギャクリンニ フレルトユーネー
× この 鱗みたいなのね。 それなあ その 逆鱗に 触れるというねえ

ムカシカラノ ホノ トノサマノ コトバネ。 トノサマ ガ ホラ、 アノー
昔からの その 殿様の ことばね。 殿様 が ほら、 あのう

ナンテユーカー、 アー ギャクリンニ フレ ルトユー コトバガネ トノサマが
なんていうか、 ああ 「逆鱗に 触れ る」という ことばがね 殿様が

オコッテネ ハー モー ドーニモ シウナクネ ホーレ シタノ シトタチワ
怒って もう もう どうにも 仕方なくね それ 下の 人たちは

コマルネ。 ソノ ギャクリンニ フレルトユー ソノ コトバガネ コノ ヒビノ
困るね。 その 「逆鱗に 触れる」という その ことばがね この 蛇の

ギャクリンカラ キタ ハナシナンダッテネ。 (B へーエ ーン) ンデ
逆鱗から きた 話なんだってね。 (B へえ ふうん) それで

ホノ サルガ ソノ ギャクリンニ フレ サワツタカラネ、 モー スゴイ
その 猿が その 逆鱗に ×× 触ったからね、 もー すごい

カミナリンナツタンダトカンダ。 ソシテ ダイジャモ アバレル アバレルネー、
雷になったんだとか……。 そして 大蛇も 暴れる 暴れるねえ、

モー スス アノ タダ ソレワソレワ オーゲンカン ナツタリシテ モー
もう ×× あの ただ それはそれは 大喧嘩に なったりして もう

シャクショーモ ア モー ミナイダ ツタラネー、 ソノウチ ホラー モー
百姓も × もう 見ないで たらねえ、 そのうち ほら もう

ギャクリンニ フレタカラ モー スンゴイ テンモ チモネ ヒキサケルヨーナネー
逆鱗に 触れたから もう すごい 天も 地もね 引き裂けるようなねえ

カミナリガ ピカピカピカーツ シカリガ ナンシズモ ハジマツタラネ モー
雷が ピカピカピカーつと 光が 何筋も 始まったらね もう

スンゴイ オトノ カミナリガ ダーツ オジダラシクテネ ヒャクショーワ
すごい 音の 雷が ダーツと 落ちたらしくてね 百姓は

ソレッキリネ キオ ウシナッテ ハー ワガンナグナツタツタト。
それきりね 気を 失ってね もう わからなくなってしまったと。

ソシタラネー ソノーウチ カミナリガ ソコニ オチタンダロー タブン。 ソシテ
そしたらねえ そのうち 雷が そこに 落ちたんだろう 多分。 そして

ナンジカンカ スギテネー ソノ ヒャクショーガネー ポカーツ メガ
何時間か 過ぎてねえ その 百姓がねえ ポカーツと 目が

サメタンダト。 ソシタラ サッキノ アノー オッキナ オッカネーネー フーキオ
覚めたんだと。 そしたら さっきの あの 大きな おっかないねえ 風景を

オモイダスト ドコモ ミランネ オッカナクテネ。 モー ンダカラヌ ドコモ
思い出すと どこも 見られない おっかなくてね。 もう だからね どこも

ミナイデネ ハ モー オッカネガラ ハー モー アメガ ヤンデ モ
見ないでね もう もう おっかないから もう もう 雨が 止んで もう

カミナリモ ナオッテ ウスデモ サシハジメタカラ。 ガー メガ サメタカラ
雷も なおって 薄日も 差し始めたから。 ×× 目が 覚めたから

モー ムジューンナッテ ウイサ モドッテッタンダト、 ハ ウチサ。 ホーシデ
もう 夢中になって 〰〰〰に 戻っていったんだと、 もう 家に。 そうして

ムラビトタチサ カタッタンダト。 イーマノ カミナリノ オッカネコト。 アノ
村人たちに 語ったんだと。 今の 雷の おっかないこと。 あの

スイジンヌマニナー タ アノー サルノノ カクト アッテ イヤイヤイヤッテ
水神沼になあ × あのう 猿の× 格闘 あって いやいやいやって

ソレ ムラビトタチサ カタッたらネ、 ムラノシトタチア アー ソレデワ
それ 村人たちに 語ったらね、 村の人たちは ああ それでは

ドンナンナッタカネ、 アノ ジンジャニ イッテミナクチャネッテネ ニサンニン
どんなになったかね あの 神社に 行ってみなくちゃねってね 2～3人

カケノボッテチタンダト。 ソシタラネー ソノ ジンジャニ チタラネー モー
駆け上ってきたんだと。 そしたらねえ その 神社に 来たらねえ もう

アタリイチメンネー モー ソノ ダイジャノ チダマ⁽¹⁰⁾ガ、 ソレカラ ホネカラ
辺り一面ねえ もう その 大蛇の 血の塊が、 それから 骨から

カワカラ ソノ カミナリニ ヤツザキニサッタンダト。 ソーシテ ケーダイ
皮から その 雷に 八つ裂きにされたんだと。 そうして 境内

イチメンネー チノ ガラ カワ グ ニグガラ ホネガラニ
一面ねえ 血の [塊] から 皮 × 肉から 骨から

チラバッテタンダト。 ダラ ムラビトタチ アーッテネ コレデワナー
散らばってたんだと。 そしたら 村人たち あーってね これではなあ

ダイジャノ タタリガ アッタラ タイヘンダ。 ソレデワネー アゾコノネー
大蛇の 祟りが あったら 大変だ。 それではねえ あそこのねえ

タカダイノネー イソセーエン⁽¹¹⁾ッテユー アノ ケンザカイノ デッパッテルノ
高台のねえ 礮性院っていう あの 県境の 〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰の

ヤマノ イーニネ アッタノネ。 ソコニ イド アソコノネ ンー オポーサンニ
山の 上にね あったのね。 そこに ×× あそこのね ×× お坊さんに

オガンデモラオーツテネ。 オ ソシテネ ホコテ オガンデ ~~~~~
 拝んでもらおうってね。 × そしてね それで 拝んで ~~~~~

ツレテキテモラツテ オガンデモラツタノ。 ダラバネ コノネ ホネオネ
 連れてきてもらって 拝んでもらったんだと。 そうしたらね このね 骨をね

ホネバカリモ シロツテネ アソコニネー アノー クヨースルヨーニツテ
 骨ばかりも 拾ってね あそこにね あのー供養するようになって

ユワレタンダド、 ムラビトタチワネー。 ンデネー アタラシー コーフニ
 言われたんだと、 村人たちはねえ。 んでねー 新しい こういうふう

トビラニノ ウイニ アタラシー コモオ シーテネ アノ ミンナシテ
 扉の 上に 新しい むしろを ひいてね あの みんなして

シモーネー ソノ ホネオ シロツタンダト。 ソシタラネー ソノネー トビラニ
 ~~~~~ねえ その 骨を 拾ったんだと。 そしたらねえ そのねえ 扉に

ヤマト ホネガ ツマツタツテ ソノ ダイジャノ ンー。 ソーシテ ソレオネ  
 山と 骨が 積まったって その 大蛇の んー。 そうして それをね

ソノ イソセーエンニ モツテツテネ クヨーシテモラツテネ ソーシテ ソノ  
 その 磯性院に 持ってってね 供養してもらってね そうして その

チカクニネ ソレオネ ヒビズカトシテ コーネ イマモ ノコツテンダネ  
 近くにね それをね 蛇塚として こうね 今も 残ってるんだね

ヒビズカトシテネ ボヒョーナンカ タテテネ。 (B ンー) ソンナノネ  
 蛇塚としてね 墓標なんか 立ててね。 (B うんうん) そんなのね

(B ンー) ソレガネ ソノーオ ソレカラワ アノー ダイジャワ ソコニ  
 (B うん) それがね その それから あのを 大蛇は そこに

イナクナツタツテネ。 ンデ ダイジャガ イル ウチワネ サカナワ イッピキモ  
 いなくなっただね。 それで 大蛇が いる うちね 魚は 一匹も

イナカツタンダト。 ダイジャガ クツテ イナカツタンダトネ。 ソシタラネ  
 いなかったんだと。 大蛇が 食って いなかったんだとね。 そしたらね

ソノトキノ チダマガネー ソノ ミー アノー スイジンヌマワ  
 その時の 血がねえ その ×× あのを 水神沼は

マッカクナツタツタツテ。 (B ンー) ソーシテネー ソコカラネー  
 真っ赤になっただね。 (B うん) そうしてねえ そこからねえ

ナガレテイクネ ウミノホーニ ナガレテイク カワ。 ソノカワモネー ソノ  
流れていくね 海のほうへ 流れていく 川。 その川もねえ その

ダイジャノ チダマデネー マツカク ソマツタト ユワレテネ、 ソノカワオ  
大蛇の 血で 真っ赤に染まったと 言われてね。 その川を

イマモツテ アカガワ<sup>(12)</sup>ト ヨンデンダト。 (B ンーン) ソシタラネー  
今でも 赤川と 呼んでるんだと。 (B んーん) そしたらねえ

ソノ アカガワニネ イマ シジミモ ス ス スンデルンデネ。 ソノ アカガワニ  
その 赤川にね 今は シジミも × × 住んでるんでね。 その 赤川に

スンデイル ネー ソノ シジミト ユーノワネー ホノ ダイジャノ  
住んでいる ねえ その シジミと いうのはねえ その 大蛇の

レーケンダロート ユワレテネ、 アー ハライタノ ミューヤク。 トクニ  
霊験だろうと いわれてね、 ああ 腹痛の 妙薬。 特に

カンゾーノ ミューヤ ミューヤクト ユワレテネ。 ドヨーシジミワ カナラズ  
肝臓の ×××× 妙薬と いわれてね。 土用シジミは 必ず

アノ コノヘンデワ タベルヨーニツテ ユワツテネ。 ドヨーシジミワ  
あの この辺では 食べるようになって いわれてね。 土用シジミは

チンチョー ス サレテンダネ。 ホツテ ソレオネ アノー シジミオ トツテ、  
珍重 × されてるんだね。 そして それをね あのう シジミを 獲って、

ミンナ ドヨーシジミト イツテネ アノー タツ タベテイルノネ。 ンデ  
みんな 土用シジミと 言ってね あのう ×× 食べているのね。 それで

ソンナ アノネ ンー デ イマモツテ ソーデ ソレガネ ソジタラ  
そんな あのね ×× それで 今でも それで それがね そしたら

コンカイノネ ツナミノ トキニネ ソコマデネ ツナミガ ハイッタノ。  
今回のね 津波の 時にね そこまでね 津波が 入ったの。

(B ホー) ソーシテ ソノ ヌマニモ ツナミガ ハイッタノ。 ソイタラ  
(B ほう) そうして その 沼にも 津波が 入ったの。 そしたら

ソコニネー ワー サイキンネー エー ホノー エー ツナミノ マイマデネ  
そこにねえ ×× 最近ねえ ええ そのう ×× 津波の 前までね

ハクチョーノ クル バショダッタノ。 (B ンーン) (C ンー) イーッパイ  
白鳥の 来る 場所だったの。 (B うーん) (C うん) いっぱい

クルンデネ オショーガツネ エ キセーキャクナンカ ミナーナネ ホノ  
来るのでね お正月にね × 帰省客なんか みんなね その

ハクチョーニネ イッテ ミテコヨーッテネ アノ イサオ モッテネ、 アノ  
白鳥にね 行って 見て来ようってね あの 餌を 持ってね、 あの

パンク キレダンナンカ モッテネ、 アー ハクチョー ミテコヨーッテ  
××× [パン] 切れだのなんか 持ってね、 ああ 白鳥 見て来ようって

ミナーナシテネ イッテミテタトコナノ。 ソーシタラ ショーミズガ  
みんなしてね 行って見てたところなの。 そうしたら 潮水が

ハイッタトミーテネ ソノ ツジトカ イッピキモ コナイノ。 {物音}  
入ったとみえてね その 次 [の年] とか 一匹も 来ないの。 {物音}

アレ ヤマモトチョーデネ ソコーネ コーイントシテネ アノ テスリオ  
あれ 山元町でね そこをね 公園としてね あの 手すりを

ツケテネ、 ホノー ハクチョー ミル シトノタメニ アブナクナイヨーニネ  
つけてね、 その 白鳥 [を] 見る 人のために 危なくないようにね

テスリオ ツケテネ、 コッテ シロバナンカ ツクッテネ、  
手すりを つけてね、 こうして 広場なんか 作ってね、

チューシャジョーナンカモ コー ソロエテネ、 ソンナフーニ シッタノ。  
駐車場なんかも こう 揃えてね、 そんなふうにしてたの。

ソシタラ ヒ ソノ ショーミズガ ハイッタタメニネ ハクチョーワ イッピキモ  
そしたら × その 潮水が 入ったためにね 白鳥は 一匹も

コナクナッタノ。 ネー。 (B シー) ソナンナッテンノネ。  
来なくなったの。 ねえ。 (B うん) そんなふうになってるのね

(B シー) ソレガ イマ モッテルノ ツツミダケネ、 ソノー ホラ ソノ  
(B うん) それが 今 保ってるの 堤だけね、 そのう ほら その

スイジンヌマト ユーノガネ (B シー) ソッタラネ ソノアト ワタシモ  
水神沼と いうのがね (B うん) そしたらね そのあと 私も

イッテミタラネ アノ アー モン ホノ ソコニネ ヒビズカ ヒビノネ コーユー  
行ってみたらね あの ×× 門のほうの そこにね 蛇塚 蛇のね こういう

ヒモ タッテタト\_\_\_\_\_、 オノ ジンジャニネ。 アノ ヒビガ ドグロ  
碑も 立ってたと思うの、 その 神社にね。 あの 蛇が とぐる

マイテ コンナンナッテンノト ナニカ カイテアッタノ イワレデモ  
巻いて こんなふうになつてると 何か 書いてあつたの 謂れでも

カイテアル。 ソンナノ コンナ アッタノネ。 ソレモ ナガレテ  
書いてある。 そんなの こんな [のが] あつたのね。 それも 流れて

ソッチノホーノ ドブニ ハイッテタノ。 (C ヘーエ) ソシタラネ アト  
そっちのほうの どぶに 入つたの。 (C ヘえー) そしたらね あと

ホノ トリーモネ ソコワ チット タカインダケドモネ。 オレ ジンジャワ  
その 鳥居もね そこは ちょっと 高いのだけれどもね。 それ 神社は

タカインダケドモ コー カイダンデ コー アガッカラ。 ホノ モンノネ  
高いのだけれども こう 階段で こう 上がるから。 その 門のね

トリーモ シッカラカッテ ナガサレテネ。 ンー。 ソシテ オノ  
鳥居も 引っかかつて 流されてね。 うん。 そして その

ジンジャソノモノモ アソコラマデモ ミズワ イッタラシーンダケドモネ  
神社そのものも あそこらまでも 水は 行つたらしいのだけれどもね

ジンジャソノモノワ アッタノネ。 ソシタラネ ソレカラ アト ナ イチ  
神社そのものは あつたのね。 そしたらね それから あと × ××

イチニカ スギテカラ イッタラネ イッテミタラネ {物音} ヤッパリ アー  
1~2カ月 過ぎてから 行つたらね 行つてみたらね {物音} やっぱり ああ

スグニ アスクワネ アノー ヤマモトチョーデネ アノ ジンジャモ キレーニ  
すぐに あそこはね あのう 山元町でね あの 神社も 綺麗に

アタラシクシテネ。 トリーモ アタラシクシテ チャント ココニ オイテネ、  
新しくしてね。 鳥居も 新しくしてね ちゃんと ここに 置いてね、

アノー ホノ ヒビノ コー イシノ コー キザンダンノネ。 コツツホノ ヌマノ  
あのう その 蛇の こう 石の こう 刻んだのね。 こっちの 沼の

ホトリニ アッタンダケドネ。 ホデ ナガサレテ コンナンナッタカラ コンダ  
ほとりに あつたのだけれどもね。 それで 流されて こんなになつたから 今度は

タカダイニ モッテッテネ ジンジャノネ ア タカイトコニ コンナンシテ  
高台に 持つていってね 神社のね × 高いところに こんなふうにして

チャント カザッテアッタヨード。 (B ナルホドネ) ンー。 ンー、  
ちゃんと 飾つてあつたようだ。 (B なるほどね) うん。 うん、

ソナノガネ エー アノ ダイジャノ ハナシネ。 ンー。  
そんなのがね ええ あの 大蛇の 話ね。 うん。

B : アリガトゴザイマース。  
ありがとうございます。

C : イマ ソノ ゲキリンニ フレタアタリノ トコロデ ワタシー (A ン?) ガ  
今 その 逆鱗に 触れたあたりの ところで 私 (A ん?) が

タダシク キケテナイカモシレナインデスケドモ (A エ?) (B ンー)  
正しく 聞けてないかもしれないんですけども (A え?) (B うん)

「イソセンエン」 ッテ キコエタノ  
「イソセンエン」 って 聞こえたの

A : イソ イソセーエンテネ、 (C イソセーエン) オテラガ ヤマノ テッペンニネ  
×× イソセーエンてね、 (C イソセーエン) お寺が 山の てっぺんにね

(C アーア) アノネ (C イソセーエン) ケンザカイ チョット  
(C あーあ) あのね (C イソセーエン) 県境 ちょっと

ヨロシナッテンノ ヤッパリネ。 (B ンー) ホシテ ホノー ヤマノ ハンブンガ  
／／になってんの やっぱりね。 (B うん) そして その 山の 半分が

ミヤギケン ハンブンガ フクオカケン (B ンー) コノ ヤマオ ノ  
宮城県 半分が 福島県 (B うんうん) この 山を [山] の

チョージョー コーナッテン ハンブンズツンネ。 (B ンー) アノ  
頂上 [が] こうなってる 半分ずつにね。 (B うん) あの

デツツアキントコネ。  
出ているところね。

B : イソセーエンテ オテラノ (C オテラノ ナマエナンドスネ) ナマエ。  
イソセーエンて お寺の (C お寺の 名前なんですネ) 名前。

A : ナマエナンドスネ。 イソッテ ホレ イソベノ イソ イソネ。 ハマノ イソネ。  
名前なんだね。 イソって ほら 磯部の 磯 磯ね。 浜の 磯ね。

セー タダシー エン ダッタカネ。 (C アー) ン ホイデ アスコニネ  
セー [は] 正しい 院 だったかね。 (C ああ) うん それで あそこにね

アトネ (B インジャナイ)  
あとね (B インじゃない)

C : 「エン」ワ コレデ イーンデスカネ。  
「エン」は これで いいんですかね。

A : シ カカ イ インテ アノ  
うん ×× × インて あの

B : コザトヘンノ コレジャナイ。  
阜偏の これじゃない。

A : シ コー シ (C コッチ) (B シ) アノ ナンテユノ  
うん こう うん (C こっち) (B うん) あの なんていうの

C : ビョ ビョーイン  
×× 病院

B : ビョーインノ イン  
病院の 院。

C : ビョーインノ イン。  
病院の 院。

A : ア アレ、 ビョーインノ インカ? コー コザトヘンザ コー  
あ あれ、 病院の 院か? こう 阜偏だ こう

B : シ ソーソー、 ビョーインノ インデスヨ。 (A シ) ナントカザン  
うん そうそう、 病院の 院ですよ。 (A うん) 何とか山

ナントカインナンテ ユツテ (C アー ナントカイン。 シーン) ナントカジツテ  
何とか院なんて 言ッテ (C ああ 何とか院。 うーん) 何とか寺ッテ

ヤル ユーカラ。  
×× 言うから。

A : ヤッパリ キョーカイモ アッタノネ。 アノ ヤマノ テッペンニネ。  
やっぱり 教会も あったのね。 あの 山の てっぺんにね。

(B ホホホホホ) キョーカイ ミヤギケン アノネ。 ソシテネ、 イーヨ  
(B ほほほほほ) 教会 宮城県 あのね。 そしてね、 ×××

ソレワー コノ コ イママデ アッタノネ。 スダラネ、 コノ ヤマ コ  
それは この × 今まで あったのね。 そしたらね、 この 山 ×

チョット コ シ ア ナンテユカー シトツノ ヤマミタイニ コーナッテンノヨ。  
ちょっと × × あ 何ていうか 一つの 山みたいに こうなってんのよ。

アノー アト ミンナ コー ウミ カタッポ ウミダシ、 コッチワ ホレ  
あのう あと みんな こう 海 片一方 [は] 海だし、 こっちは ほら

タンボダノ ネ。 デ コノ フモトニ ウチガ イ ナンケ<sup>ベン</sup>モ アッタノ。  
田んぼだの ね。 それで この ふもとに 家が × 何軒も あったの。

(B ーン) ダ ソレ ミンナ ホレ ナガサレタ。

(B うん) だから それ みんな ほら 流された。

(B ナガサレチャッタ) ホシテ コノシトタチ コノヤマノ テッペンサ ニゲテ

(B 流されちゃった) そして この人たち この山の てっぺんに 逃げて

ホデ<sup>デ</sup> タスカッタ シトワ タスカッタ。 ナンニンカ アー ナクナッタ。  
それで 助かった 人は 助かった。 何人か ああ 亡くなった。

(B ナクナッタ) シタラ コノ テッペンノホノ キョーカイガ

(B 亡くなった) そしたら この てっぺんのほうの 教会が

アツカカラネ。 (B アーア) ホノ キョーカイデ タスケラレタツテ。

あったからね。 (B あーあ) その 教会で 助けられたって。

(B ーン) ナイカ ストーブネ アッタノ ホレ サンガツダカラ マダ

(B うーん) 何か ストーブね あったの ほら 3月だから まだ

(B ーンー) コンナ ストーブ ツカッテタンデシヨ。 (B ーン)

(B うんうん) こんな ストーブ 使ってたんでしょ。 (B うーん)

シテ ノコリノネ セキユガ チット ハイッテタンデ (B ーン) ソレデ  
そして 残りのね 石油が ちっと 入ってたんで (B うん) それで

ダンオ トッタツテ。 (B ーン) ヌレタ シトタチガ アガツテ。

暖を 取ったって。 (B うーん) 濡れた 人たちが 上がって。

(B ーンンン) ホツテネ ソコカラネ タスケオ モトメヨッタツテ

(B うーんん) そしてね そこからね 助けを 求めようとしたって

コリツシテンノヨ、 ホラ マワリワ シクイカラ、 タンボダカラ。

孤立してんよ、 ほら 回りは 低いから、 田んぼだから。

(B ーン) ソステネ、 アル シト ココノ ヤマノ チューククノ

(B うーん) そしてね、 ある 人 この 山の 中腹の

コロアイニ ウチ タテテネ イタ シトガ イタノ。 ソコニモ ソノイーモ  
頃合いに 家 建ててね いた 人が いたの。 そこにも その家も

ヒックラカサッタッテ ユッテネ ソノシトワ コドモオネ ソン ツナミノトキネ、  
ひっくり返されたって 言ってね その人は 子どもをね その 津波のときね、

シー ホイクショニ ヤッテタンダトネ。 ダ ホイクショッテ ア コッチニモ  
うん 保育所へ やってたんだとね。 × 保育所って × こっちにも

アックettoモ ヤマノホーノ ホイクショ、 フクダ<sup>(13)</sup>ッテ ユンダケドネ。 アノ  
あるけれども 山のほうの 保育所、 福田って 言うんだけどね。 あの

ヤマノホーニモ アッチニモ アッタノ。 ソッチサ ホレ アッチノホーノ シト。  
山のほうにも あっちにも あったの。 そっちに ほら あっちのほうの 人。

ダケド ナカナカ ムカイニ イケナインダト、ホレ。 (B シー シー)  
だけど なかなか 迎えに 行けないんだと、ほら。 (B うん うん)

(C シー) マワリ、 ネー。 (B シー) ホンダケドネー ナントカシテ  
(C うん) 周り、 ねえ。 (B うん) そうだけどねえ 何とかして

アノ ヤマトトチョーノホーサ アッチノホーワ アンマ コー ナダラカダカラ  
あの 山元町のほうに あっちのほうは あんまり こう ならだかだから

コッチニ オリテコラネーデ ヤマトトチョーノホーサ ズーット トーマーリ  
こっちに 下りて来られないで 山元町のほうに ずーっと 遠回り

シテネ (B シー) ソーシテネ ヤットコ ムカイニ イッタンダト、  
してね (B うん) そうしてね やつとこ 迎えに 行ったんだと、

(B シー シン) ホイクショ。 ホタラ、 ミンナネ ミンナ ハー ムカイ  
(B うん んん) 保育所 [に]。 そしたら、 みんなね みんな もう 迎え

キテ、 ミンナ イッテネ、 センセ シトリネ アノー ジブンノ コドモ  
来て、 みんな 行ってね、 先生 一人ね あのう 自分の 子ども [を]

マモッテッテクレタタンダト。 ソシタラネ ホントキニ アーノ ンデネー  
守っていてくれたんだと。 そしたらね その時に あの それでねえ

ウチニワ カエレナイカラネー ソノヒ ソゴノ オ シナンシタ バショニモ  
家には 帰れないからねえ その日 そのの × 避難した 場所にも

カイレナイ。 ホレ、 ヤット イッタンダカラ、 マワリ。 ンデネー ココノ  
帰れない。 ほら、 やつと 行ったのだから、 回り。 それでねえ ここの

アッチノホーノ ショーガッコモ シナンジョニ ナッタッタカラ。 ンデ ココノ  
あっちのほうの 小学校も 避難所に なっていたから。 それで ここの

シナンジョニネー コンヤワ ウチニ カエレナイカラ トマッテクーカラネーッテネ  
避難所にねえ 今夜は 家に 帰れないから 泊っていくからねえってね

ソノコドモニ ユッタダト。 ソシタラネー ホノコドモワネー ホレ ミンナ オ  
その子どもに 言ったんだと。 そしたらねえ その子どもはねえ ほら みんな ×

アッチノホーワネー ウイ ヤマノホーダカラ タキダシシテクレタンデショ。  
あっちのほうはねえ ×× 山のほうだから 炊き出ししてくれたんでしょ。

ホンナ オムスビ シトツズツ モラッタンダッテネ。 ソシタラネ、  
そんな おむすび 一つずつ もらったんだってね。 そしたらね、

オカーサンワッテッテ。 オカーサンワネー アノー アツオコノ ヤマノ  
お母さんはって言って。 お母さんはねえ あのう あそこの 山の

テッペンニ イルンダカラネ アソコマデ モー キョーワ カエレナイカラ ココ  
てっぺんに いるんだからね あそこまで もう 今日は 帰れないから ここ

シナンジョン トマルツツッタモンデ、 アラー ンジャ コノー オムスビネー  
避難所に 泊るって言ったもので、 あら それじゃ この おむすびねえ

オカーサンニ モッテッテアゲルッテッテネー アノ ソノコドモワネ オムスビ  
お母さんに 持って行ってあげるって言ってねえ あの その子どもはね おむすび

タバナカッタッテ。 (B ン) オカーサン オモッテ。 (B ン) ーン)  
食べなかったって。 (B ン) お母さん 思っ。 (B ン) ーン)

ン。 ダカラネ イカニ ハハオヤッテユーノワ ダイジダカッテネ (B ン) ーン)  
うん。 だからね いかに 母親っていうのは 大事だかってね (B ン) ーン)

ソノシト ユッテタノ。 ン。 ネー ホノムスコワネ モット イーカラ  
その人 言ってたの。 うん。 ねえ その息子はね もっと いいから

タバナサイッテ。 イーカラ オッカサン アッチニ イルンダッテ。 ダッテ  
食べなさいって。 いいから お母さん あっちに いるんだって。 だって

オッカサンノトコモ タベラレナインデショッテネ。 ン アノ コレワ  
お母さんのところも 食べられないんでしょうってね。 うん あの これは

オカサンニ モッテクーッテネ ソー ユッテネ タバナカッタダッテネ、 ソノ  
お母さんに 持って行くってね そう 言ってね 食べなかったんだってね、 その

ムカイニ イッタ オトサン ユッテタノネ。 (B ン) ン。 ダカラ  
迎えに 行った お父さん 言ってたのね。 (B ン) ン。 うん。 だから

イカニ ハハオヤッテユーノ コレネ ンー モー ナントシタッテネ コドモノ  
いかに 母親っていうの [は] これね うん もう 何としたってね 子どもの

タメニネ ガンバッテ イチテイカナチャナラナイ、 ンー。  
ためにね がんばって 生きていかなくちやならない、 うん。

---

《注》

- (1)水神沼 宮城県亶理郡山元町坂元新赤川にある沼。この水神沼から1kmほど赤川を下ると磯浜漁港に出る。
- (2)ショージサン 庄司アイさん。宮城県のやまもと民話の会代表。
- (3)チンジフ 鎮守府。奈良・平安時代、陸奥・出羽の蝦夷鎮圧のために置かれた軍政官庁。初め多賀城に置かれ、のちに胆沢城、さらに平泉に移った。(大辞泉)
- (4)ツルシハマ 釣師浜。福島県新地町にある。この水神沼の話は何う前に、現在の釣師浜を見に行っているの、「サイゴニ イッタ (最後に行った)」と言っている。
- (5)オーシュウシカゲヌマ 奥州日陰沼。日陰沼は水神沼の別名。
- (6)イタマシクテ 惜しくて。もったいなくて。基本形は形容詞「いたましい」。
- (7)スイジンジンジャ 水神社。宮城県亶理郡山元町の水神沼(注の(1))の南にある。
- (8)マツヌキノ 松の木。連体修飾の格助詞「の」。「杉ぬ木」「楠ぬ木」など、樹木の場合などに用いられるようである。
- (9)コケラ うろこ(鱗)。コゲラとも。
- (10)チダマ 血の塊のことか。
- (11)イソセーエン 宮城県山元町にある波光山磯性院のことか。磯性院水神沼から東南東に1km程のところにある。なお、このあとの語り手の説明では「磯正院」である。
- (12)アカガワ 赤川。宮城県山元町にある水神沼と磯浜漁港とは赤川でつながっている。そのため、この後で語られるように、東日本大震災のときには津波が赤川を遡上して水神沼まで達した。
- (13)フクダ 福田。地名。新地町内の北西に位置する。

## 第四章 茨城方言かるた



## I 茨城方言かるたの制作の概要

### 1 制作の目的と意義

地域のことばである方言を用いて、地域を理解したり、地域の文化を発信したりするために、「茨城方言かるた」を制作する。かるたは、幅広い年代、特に子ども達に、遊びをしながら茨城方言に触れながら方言への関心や理解、地域・地域文化への理解を促すことができるということから、制作の意義があると考えられる。また、「ぐんま方言かるた」（共愛学園前橋国際大学ぐんま方言かるた制作プロジェクト）や「名取方言かるた」（方言を語り残そう会発行、2011年）などの先行事例があり、効果が期待できる。

### 2 制作過程について

「茨城方言かるた」の制作の開始は、2018年度の茨城大学人文社会科学部の授業「地域とことば」での取り組みからである。同授業は、2018年度に新規に開講した授業で、地域志向教育プログラムの授業の一つでもある。授業の成果として茨城方言を活かして地域に発信できるものを作ること、その制作の過程で茨城方言や茨城の民俗に対して、受講者自身が自発的に学んで理解を深めていくことが目標であった。その取り組みを実践的に行っていくために、2018年度の茨城大学地域志向教育支援プロジェクトに申請し、採択され、茨城大学の支援を受けて取り組んだ。新規科目の初年度授業であったためか、受講者は9名と少なかったため、全員で方言かるた作りをテーマにした。授業で取り組んだのは、主にかるたの読み札作りである。あわせて、読み札で取り上げる茨城方言や茨城の民俗についても分担して資料調査等を行った。かるたの読み札は茨城方言の文であるので、地域の方言話者からの方言指導と読み札文のネイティブチェックは必須であった。また、絵札については、広く活用してもらうためには、イラストには一定以上の質が求められると考えたため、授業においてはイラストの原案のみ検討することにした。上述の茨城大学地域志向教育支援プロジェクトに採択されたことで、地域の方言話者を講師として招いて方言指導を受けたり、絵札のイラストの作画を茨城大学教育学部美術専修の学生に依頼したりすることができた。

しかしながら、2018年度の「地域とことば」の授業での取り組みだけでは茨城方言かるたを完成させることができなかったので、2019年度と同授業で取り組みを継続した。ただし、2019年度と同授業の受講者は27名であったので、小グループによる複数のテーマによる取り組みとなった。その一つとして茨城方言かるた作りを4名の受講生がグループテーマとして取り組み、読み札を完成させた。読み札のネイティブチェックも、グループの取り組みとして行った。絵札については、本事業の企画として、2018年度と同様に茨城大学教育学部美術専修の学生（2018年度とは異なる学生）に、読み札案とイラストの原案を示して作画を依頼して作成した。

次節では、2018～2019年度の取り組みの成果として、全読み札と絵札の一部を示す。

## II 読み札・絵札（一部）とその展示資料

### 1 茨城方言かるたの読み札

\*表示順…絵札の仮名／読み札案／【共通語訳】

※＝方言（俚言）の意味（一部のみ）

- あ あぐどいなあ！どれ食っても あぐどいなあ！【しつこいなあ！どれ食べても、しつこいなあ】 ※あぐどい…脂っぽい食べ物などで味がしつこいことを表す
- い いがいあんこう 鍋にして 食べっぺ【大きいあんこう 鍋にして 食べよう】
- う うでたまごで サンドイッチ【ゆで卵でサンドイッチ】
- え えろいんぴつ いっぺえ えろ あんなあ【色鉛筆、いっぱい色あるなあ】
- お おもしろい茨城弁 おせでくれっけ？【おもしろい茨城弁、教えてくれるかい？】
- か カンメに 食われて 寝らんねえ【蚊に刺されて、寝られない】
- き きやりごし やっちゃって いでくて たまんねえ【腰痛になって 痛くてたまらない】 ※きやりごし…ぎっくり腰
- く くれるよ、チョコ！義理だけだよー【あげるよ、チョコ！義理（チョコ）だけだね】
- け けしぐれの挨拶は「おしまな」【夕方のあいさつは「おしまいな」】 ※おしまいな…茨城県東南部地域の夕方の挨拶。茨城県内の多くの地域では「おぼんかた、おぼんかたです」という地域が多い。
- こ こじはん なに？芋だっぺよ【おやつは何？芋だろうよ】
- さ さぷとん 敷いてくんにゃあ【座布団、敷いてください】
- し しゃあんめ あおなじみぐれえは できてっぺ【仕方ない、アオアザくらいはできてるだろう】
- す すみつかれ 初午の日に 食べなんしょ【スミツカレ、初午の日に召し上がれ】
- せ せえばん 持ってきて でえご 切って！【まな板持ってきて大根切って！】
- そ そうしっと うまぐいぐよ 笠間焼【そうするとうまくいくよ笠間焼】
- た だいだらぼうの足っこだっぺ、千波湖は【だいだぼうの足跡だろう、千波湖は】
- ち 「違かった」は「違った」言い方【(そのままの意)】
- つ つちゅーらの 花火は よかっぺ【土浦の花火は、いいだろう】
- て でぎっごあんめ ここから飛ぶなんて【できっこないだろう ここから飛ぶなんて】
- と とっけっこすっけ？おめえのだんごと おれのもじ【取り換えっこする？ 君の団子と 僕の餅】
- な なんでかんで あしたは 5時に起きる【どうしても、明日は 5時に起きる（起きなければいけない）】
- に にくせえと 思っていだら 親子だど【似ていると 思っていたら 親子だって】
- ぬ ぬぐい こたつで ぬぐどまる【あったかい コタツで 温まる】
- ね ねじぐった 足首さ 湿布する【捻挫した 足首に 湿布する】

の のざえっど、そうだに早<sup>はや</sup>えく もち食うな【喉につかえるぞ、そんなに急いで餅食うな】

は はやっこ、みんなが 待ってっど【早くおいで！みんなが待ってるよ】

ひ ひやしといで！ おげさ茶碗 入れどいで【(水に) 浸しておいて！桶に茶碗、入れておいて】

ふ ふっちゃれちゃった あだしの傘【壊れちゃった わたしの傘】

へ へえめ はだぎで ぶっぱだぐ【蠅を蠅たたきで叩く】

ほ ほおどしの 頭 飾って 鬼退治【ほおどし(めざし)の頭を飾って鬼退治だ】

ま まぐれちゃった、道がわがんね。地図あっけ？【迷っちゃった、道がわからない。地図、ある？】

み 見えねえげ？あすこのそっぺの 俺のうじ【見えないかい？あそこらへんの俺の家】

む むねしょう(胸章)つけて 今日も元気に 学校さ【名札をつけて、今日も元気に学校へ】 ※むねしょう(胸章)…小学生などが胸に付ける名札。

め めんきしょ とって 初運転【(運転)免許を取って、初運転】

も もっちゃげでみだら でっけえ 石ごろだ【持ち上げてみたら 大きな石ころだ】

や やんだねーよ そんないたずら【やるんじゃないよ そんないたずらは】

ゆ ゆいでごどは ゆったらいい【言いたいことは 言ったらいい】

よ よういだねえ。湯呑 こっせえで 「あー、こええ」【簡単じゃない。湯のみ作って、「ああ疲れた】】

ら らい様が ゴロゴロいってで おっかねえ【雷がゴロゴロ鳴ってて、怖い】

り リックしょって 筑波山さ 山登り【リュックサックを背負って 筑波山に 山登り】

る るずいは ちゃんとしてくんなんしょ【留守番は ちゃんとしてちょうだいね】

れ れんこん 田んぼのながさ おんのまってる【レンコンは 田んぼの中に 埋まっている】

ろ ろっこく(6国) つたぎって 水戸さ行んべ！【国道6号線を突っ切って水戸に行こう！】

わ わーほいで 注連縄 燃やして 厄除けだ【わーほいで注連縄を燃やして厄除けしよう】

ん んだ んだ、茨城っちゃ 最高だっぺ【そうだ、そうだ。茨城って最高だろう】

2 茨城方言かるたの絵札と読み札 \*イメージ画像の一部



1



2



3



4



5



6

茨城方言かるた「と:とっけこ」

**と**  
とっけこすっけ?  
おめえのだんこと  
おれのもじ  
【共通語:取り換えてこする?  
君の団子と、僕の餅】



7

茨城方言かるた「な:なんでかんで」

**な**  
なんでかんで  
あしたは5時に起きる  
【共通語:どうしても、明日は  
5時に起きる(起きなければ  
ならない)】



8

茨城方言かるた「ふ:ぶっちゃれる」

**ふ**  
ぶっちゃれちゃった  
あだしの傘  
【共通語:壊れちゃった、私の傘】



9

茨城方言かるた「ほ:ほおどし」

**ほ**  
ほおどしの頭  
飾って 鬼退治  
【共通語:ほおどし(めざし)の  
頭を飾って 鬼退治だ】



10

茨城方言かるた「む:ぶっちゃれる」

**む**  
むねしよう(胸章)つけて  
今日も元気に 学校さ  
【共通語:名札をつけて、  
今日も元気に学校へ】



11

茨城方言かるた「ん:んだ」

**ん**  
んだ んだ、  
茨城っっちゃ  
最高だっぺ  
【共通語:そうだ、そうだ、  
茨城って最高だろう!】



12

### 3 茨城方言かるたの展示

茨城方言かるた制作の中間報告として2回のパネル展示を行った。

#### ①茨城大学大学祭「茨苑祭」(水戸キャンパス)におけるパネル展示

日時：2019年11月15日(金)～11月17日(日)

場所：茨城大学図書館1階エントランス(写真→)

#### ②「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」におけるパネル展示

日時：2019年11月30日(土)

場所：茨城大学図書館3階エレベーターホール(ライブラリーホール入口外)



展示においては、「2」に示した絵札と読み札のイメージ画像と、読み札の方言の説明、読み札で取り上げている茨城の民俗等に関する情報(読み札で地域の民俗等を取り上げたもののみ)にを展示した。ここでは、上記の展示で公開したもののうちの一部の絵札・読み札・方言の説明と関連資料の容を紹介する。

#### ①か



#### 【方言(含、訛り)の説明】

[か] カンメに 食われて 寝らんねえ

【共通語：蚊に刺されて 寝られない】

・カンメ…蚊。生き物名の下に「メ」という接尾辞が付いた形。「メ」がどのような生き物名に付くか、茨城県内で地域による違いがあるかは、「資料「〈生き物名〉+メ」という言い方について」をご覧ください。

・寝らんねえ…寝られない。茨城方言では、ラ行音が「ン」の音に変化することがあります。

例えば、「やらない→ヤンナイ/ヤンネー」「食べるのかい→タベンノケー」「それで→ソングデ」。また、「ル」で終わる動詞は、「見ると→ミット」「やるから→ヤッカラ」のように「ッ」(促音)に変化します。

「寝らんねえ」の「ねえ」は「ナイ」の音が変化したもの。母音(ア、イ、ウ、エ、オ)が連続すると、音が融合します。アイ→エー(赤い→アケー、固い→カテー、貝→ケー、手伝い→テツデー、等)のほか、アエ→エー(前→メー、帰る→ケール、等)、オイ→エー(白い→シレー、等)、イエ→エー(消える→ケール)といった音変化もあります。

#### 資料：「〈生き物名〉+メ」という言い方について

\*生き物名に「メ」が付く言い方は、下の分布図を見てもわかるように、茨城のほぼ全域で見られます。茨城方言の代表的なものだと言えます。

\*「メ」が、どんな生き物名につくかは、茨城県内でも地域差があるようです。

大子：牛、犬、猫、魚、鮎、かじか、蛇、虫、カンメ（蚊）、など …川の魚名に「メ」が付く

高萩：牛、豚、鳥、カンメ（蚊）、など

日立：ヘンメ（蛇）、カンメ（蚊）

水戸：牛、馬、豚、犬、猫、魚、鮎、蛙、虫、カンメ（蚊）、など ×「ヘンメ（蛇）」は言わない

大洗：犬、猫、虫、カンメ（蚊）、ハイメ（蠅）、鯛、鰯 …海の魚名に「メ」が付く

潮来：牛、馬、犬、猫、虫、カンメ（蚊）、ヘーメ（蠅）

神栖：ヘーメ（蠅） ×「カンメ（蚊）」は言わない …「メ」が付く言い方は少ない

波崎：言わないか？

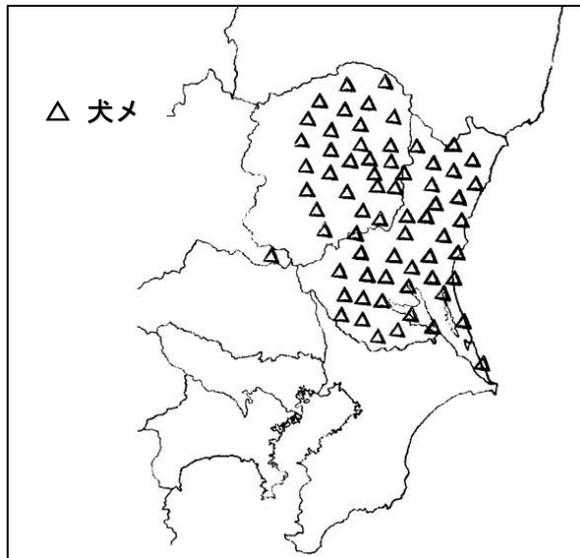


図 「犬メ」と言う地域※

※大橋勝男（1976）『関東地方域方言事象分布地図 第2巻』（桜楓社）のMap152「犬メ」をもとに作図

## ②け



### 【方言（含、訛り）の説明】

【け】 けしぐれのあいさつは 「おしまいな」

【共通語:夕方のあいさつは 「おしまいな」】

- ・けしぐれ…夕方。日が暮れるころの時間帯。
- ・おしまいな…夕方の挨拶ことば。茨城県南東部の神栖市の方言。かつての暮らしの中では、夕方になって日が西に傾くと、農作業を終えて、家に帰っていました。その家路への道で、まだ、田畑にいる人に向かって、「アー オシマイナサイ」と言うと、「アー オラ(俺)モ シマーダヨ」といったやりとりをしたそうです。同輩

の人にも目上の人にも使える挨拶表現ですが、今はあまり使わないそうです。「オシマイナ」「オシマイナサイマシ」とも。なお、夕方の挨拶は、茨城県内では「オバンカタ」「オバンカタデス」といった表現を使う地域のほうが多いようです。

## ③さ（ざ）



### 【方言（含、訛り）の説明】

【さ】 ざぶとん 敷いてくんにあ

【共通語:座布団、敷いてください】

- ・ざぶとん…「ざぶとん」を「ザプトン」と発音します。濁音「ぶ」が清音「プ」と発音されることから、このような変化を「清音化（無声化）」と言います。「ぶ」の子音は有声音、それが無清音「プ」に変化することから、「無声化」とも言います。「ブ→プ」のほかに、「短い（みじかい）→ミチケー」「小遣い（こづかい）→

コズケー（コヅケー）」など。

・～てくんにああ…「～してください」という依頼のていねいな表現。「～テクンニャー」のほかにも、「～テクンニョー」「～テクンロー」「～テクンチェ」「～テクンチョー」等の表現もあります。

「～テクンニャー」は広域で使われ、「～テクンロー」「～テクンチェ」は友達同士で使われる、といった違いがあるようです。

④た

【方言（含、訛り）の説明】

[た] だいだらぼうの 足っこだっぺ、 千波湖は 【共通語：だいだぼうの 足跡だろ  
う、千波湖は】



- ・だいだらぼう →資料
- ・足っこ…足跡。茨城県のほとんどの地域で使うようです。「アシト」という地域もあるようです。
- ・～だっぺ…～だろ。推量の意味を表します。「～ぺ」は、意思や勧誘の意味です。この「～ぺ/ダッぺ」は、茨城を代表する方言です。

資料：茨城の「だいだらぼう」伝説いろいろ

◎ダイダラボウは、茨城を代表する伝説の巨人です。ここでは、県内のダイダラボウにまつわる伝説のいくつかを紹介します。名前もダイダラボウとは限りません。さて、どんな伝説があるのでしょうか？

伝説の場所：つくば市～桜川市・筑波山

つくば市と桜川市をまたぐようにある筑波山には、男体山と女体山の二つの峰があります。その二つの峰の山頂がへこんだようになっている理由は、だいだらぼうが遊び疲れた時に筑波山に腰をかけて休んだからだと言われています。

伝説の場所：利根町・笠脱沼

昔、だいだらぼうがこの地で、笠を脱いで休憩をした時のことだそうです。笠の重みでへこみができてしまい、そこに水が溜まって大きな沼ができたのだそうです。それで、人々はその沼のことを「笠脱沼」と呼んだということです。

伝説の場所：桜川市・背負い石

昔、世の中が天災や疫病などで人々が不安に陥っていると、だいだらぼうが人々を救うために神様が宿るといふ石を背負ってやって来たのだそうです。でも、桜川市にある高峰山の中腹まで来たときに、石を縛っていた縄が切れてしまいました。落ちた石は、だいだらぼうでも動かさなくて、あきらめて大石をそこに置いて去っていったのだそうです。その石のことを「背負い石」と言います。

伝説の場所：常陸太田市・峰山

昔、村の人たちが洪水を防ぐために堤を作っていたところ、だいだらぼうが大きなかごを持ってきて、土運びを手伝ってくれたそうです。だいだらぼうが手伝ってくれたので、

堤づくりはあっという間に終わりました。でも、だいだらぼうが手伝った時に、かごから少し土が落ちてしまい、それで小さい峰山ができたのだそうです。

伝説の場所：水戸市・朝房山

昔、大足(おおだら)という村に、だいだらぼうが住んでいたのだそうです。その村の南には朝房山という高い山があつて、作物は育たないし、冬は寒くて、人々は困っていました。そこで、だいだらぼうは、村人を助けようと、この山を北に移したのだそうです。山が北に移ったので、村は日当たりがよくなり、作物もよく取れるようになったということです。

ところが、朝房山はもとの場所に戻りたいと駄々をこねては動き出してしまい、その度に大地震が起きて人々は困ってしまいました。だいだらぼうは、それを見かねて、朝房山が動かないように足を踏ん張って山に腰かけて押さえつけたり、ここにいたほうがいいと朝房山をなだめたり、撫でて山の形を直してやったりしたのだそうです。

伝説の場所：水戸市・千波湖

だいだらぼうが、朝房山を移す時、指で土を掘ったので、その指のあとに水がたまって、大塚池などになったのだそうです。でも、少し深く掘りすぎたせいで、雨が降るたびに水が溜まり、洪水になってしまったのだそうです。そこで、だいだらぼうは、その川の下流の丘を引き裂いて、水が流れるようにし、下流に湖をつくったのだそうです。それが今の千波湖だと言われています。

\*朝房山を動かしたときに土で汚れた手を、千波湖で洗ったそうです。

\*千波湖は、だいだらぼうが足を踏ん張った時にできた足跡に水がたまっただというお話もあります。

伝説の場所：水戸市常澄・大串

だいだらぼうは貝を食べるのが好きだったので、大串の丘の近くに立って、腰を曲げて磯浜(今の大洗町)の海岸に落ちている貝を拾って食べたそうです。その貝殻を大串の丘に捨てたので、今でも大串にはたくさんの貝が丘になって残っているそうです。

---

◎茨城の巨人伝説：常陸大宮市「沢又三太」

「だいだらぼう」以外にも、茨城県には巨人伝説があります。常陸大宮市には「三太(さんた)」という巨人の話が伝わっています。

昔、三太という巨人が諸沢村に住みついたのだそうです。そのころ、諸沢村では沢又を開墾していたので、毎日、村人は泥だらけになって精を出していたそうです。それを見た三太は、食事と引き換えに開墾を手伝い、三日以内に開墾すると約束しました。でも、三太は村人が用意したご飯を平らげると寝てしまい、一日たっても、二日たっても、開墾する様子がありませんでした。村人は心配していましたが、約束の三日が過ぎた翌朝に、沢又はきれいに開墾されていたのだそうです。村人は開墾してくれたことに感謝し、その巨人に沢又三太という名前を付けて呼ぶようになりました。

\*この話は、日本民話の「三年寝太郎」の話によく似ています。

⑤わ



【方言（含、訛り）の説明】

【わ】 わーほいで 注連縄 燃やして

厄除げだ 【共通語：ワーホイで注連縄を 燃やして厄除けしよう】

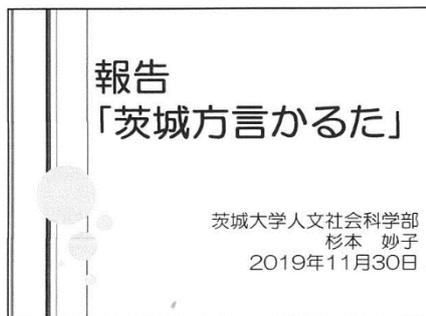
・わーほい…左義長・どんと焼きなどとも言われる正月の行事。『茨城方言民俗語辞典』には、次のように出ています。（地域に関する情報は一部のみ示し、他は省略。なお、地域名は旧称）

ワーホイ [児] 小正月の火祭りの行事（久慈郡、常陸太田市、那珂郡、水戸市、笠間市、鹿

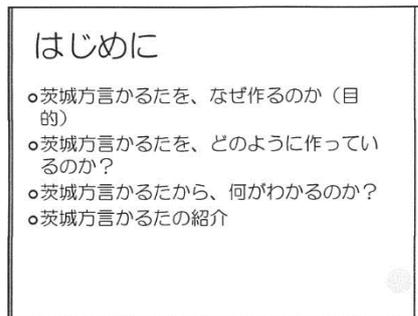
島郡、鉾田町、ほか）。この日、子どもたちは、田や畑などへ藁で小屋をつくり、餅などを食べながら夜をすごす（那珂郡、大子町、水戸市、茨城町、八郷町、鉾田町、ほか）。隣組の家へ、ご馳走をくばったりする（緒川村）。子どもたちは、「ワーホイ、ワーホイ、今夜はどごのワーホイだ、鎌倉殿（様）のワーホイだ、イノシシ、カノシシ、ワーホイ、ワーホイ」などと唱える（那珂郡大宮町、桂村、など）。14日の晩か（水戸市、八郷町、ほか）、15日の早朝（茨城町、岩瀬町、鉾田町、ほか）、小屋を燃やす（緒川村、水戸市、茨城町、八郷町、出島村、鉾田町、ほか）。小屋をつくらず、門崎で正月の飾りなどを焼くところや（勝田市、御前山村、笠間市、七会村、ほか）、そのあと「ワーホイ」と唱えながら村中を歩きまわるところがある（勝田市）。子どもの書き初めを燃やすと字が上手になるとも（笠間市）、この火にあると病気にならないともいう（鉾田町）。キクの枯れた茎を燃やして尻をあぶるとできものができないとか、この日まで焚火をしてはいけないとか、火元になるからこの日までアズキを煮てはいけないとかいう（七会村）。15日の朝にも、門前でお飾りや稲藁・ナスとキクの茎などを燃やし、「今夜はどごのワーホイだ、鎌倉さんのワーホイだ、早ぐいって追いましょう、ワーホイ、ワーホイ」と唱える。ナスとキクの茎は、「金をナスように、いいごどをキクように」燃すのだという（勝田市）。[出典は、省略]

・燃やして／厄除げだ…清音の濁音化（無声音の有声化）。語頭（語の始めの音）以外のカ行・タ行が、濁点（゛）が付いた音になること。坂→サガ、若い→ワガイ／ワゲー、肩→カダ、餅→モチ（ジ）、松→マヅ（ズ）など。音声学では、濁点のつかない清音は無声子音といい、濁点のついた音は有声子音（有声音）といいます。無声音が有声音になることから、この現象を有声化といいます。このような有声化は、北関東に位置する茨城辺りから東北地方の広域にみられる発音上の特徴です。茨城方言と東北方言と共通する特徴です。

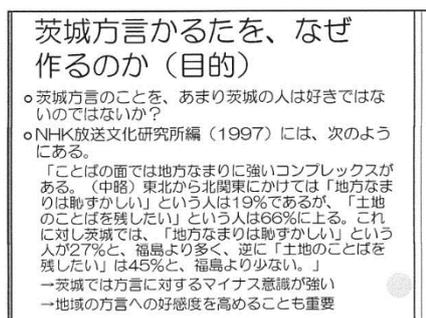
### Ⅲ 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話4」における報告



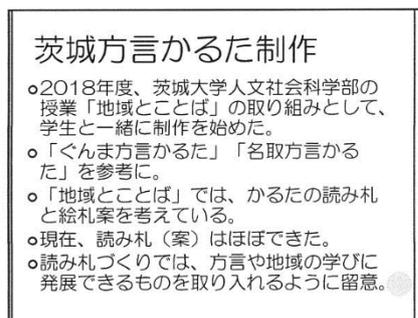
1



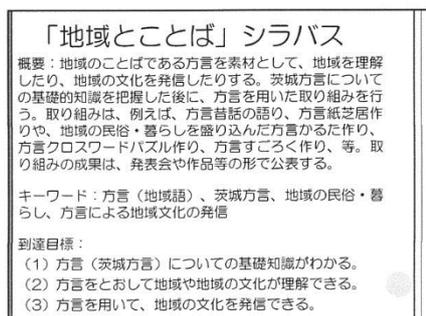
2



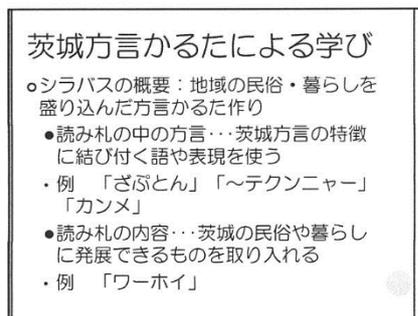
3



4



5



6

### 茨城方言かるたの紹介

- 例1 「ざぶとん 敷いてくんにゃー」
  - ・「ざぶとん」の「ぶ」→茨城方言の発音の特徴
  - ・「〜(し)てくんにゃー」→茨城方言の依頼のていねい表現
- 例2 「カンメに 食われて 寝らんねえ」
  - ・「カンメ」→「動物名+メ」という言い方と、地域差
- 例3 「わーほいで 注連縄 燃やして 厄除げだ」
  - ・「わーほい」→正月飾りなどを燃やす行事。「どんど焼き」「左義長」などともいう。茨城ではどのような行事を行うか

7

### 茨城方言かるた「さ:ざぶとん」

さ

ざぶとん 敷いて  
くんにゃあ

【共通語】座布団 敷いて  
ください】



8

### 茨城方言かるた「か:かんめ」

か

カンメに 食われて  
寝らんねえ

【共通語】蚊に刺されて  
寝られない】



9

### 茨城方言かるた「わ:わーほい」

わ

わーほいで 注連縄  
燃やして 厄除げだ

【共通語】ワイワイで注連縄を  
燃やして厄除けしよう】  
※ワイワイは、左義長などと焼きなどとも  
言われる正月の行事



10

### 茨城方言かるたの紹介

- 例1 「ざぶとん 敷いてくんにゃー」
    - ・「ざぶとん」の「ぶ」→茨城方言の発音の特徴
    - ・「〜(し)てくんにゃー」→茨城方言の依頼のていねい表現
  - 例2 「カンメに 食われて 寝らんねえ」
    - ・「カンメ」→「動物名+メ」という言い方と、地域差
  - 例3 「わーほいで 注連縄 燃やして 厄除げだ」
    - ・「わーほい」→正月飾りなどを燃やす行事。「どんど焼き」「左義長」などともいう。茨城ではどのような行事を行うか
- 2018年度は茨城大学COC地域志向教育支援プロジェクトの支援を受け、2019年度は文化庁委託事業の支援を受けて取り組み中。

11

### 「茨城方言かるた」の今後

- 読み札の方言を地元の方にチェックしていただく
- 読み札に合わせて、絵札のイラストを描いてもらう（教育学部美術専修学生に依頼）
- 学生と手分けして、読み札の中の方言や茨城の民俗・暮らしについての解説をまとめていく
- 完成後は、試作版を作成し、子ども達にかるた遊びを試してもらおう
- 最終的には製品化したい！

おわり

12

(注)「名取方言かるた」を紹介したスライド(6ページ目)は省略した。

## 参考文献

- 赤城毅彦（1991）『茨城方言民俗語辞典』東京堂出版  
大橋勝男（1976）『関東地方域方言事象分布地図 第2巻』桜楓社  
兒玉卯一郎（1935）『福島県方言辞典』西澤書店  
小林初夫編（2005）『高平方言集』高平方言教室  
新妻三男（1973）『相馬方言考 改訂版』相馬郷土研究会

\* 昔話の参考文献については、第二章に記したので省略した。

執筆者

杉本 妙子 (茨城大学)

---

令和元(2019)年度 文化庁委託事業報告書  
方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承 2

令和 2(2020)年 3 月 10 日発行

編者 杉本妙子 (茨城大学)

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1  
茨城大学人文社会科学部 TEL 029(228)8104(代)

---